

PeopleSoft®

EnterpriseOne 8.9
Web サーバー・インストール
PeopleBook
(AS/400 ベース・システムおよび WebSphere)

2003 年 9 月

PeopleSoft EnterpriseOne 8.9

Web サーバー・インストール (AS/400 ベース・システムおよび WebSphere) PeopleBook

SKU AC89JWSIA0309

Copyright 2003 PeopleSoft, Inc. All rights reserved.

本書に含まれるすべての内容は、PeopleSoft, Inc. (以下、「ピープルソフト」) が財産権を有する機密情報です。すべての内容は著作権法により保護されており、該当するピープルソフトとの機密保持契約の対象となります。本書のいかなる部分も、ピープルソフトの書面による事前の許可なく複製、コピー、転載することを禁じます。これには電子媒体、画像、複写物、その他あらゆる記録手段を含みます。

本書の内容は予告なく変更される場合があります。ピープルソフトは本書の内容の正確性について責任を負いません。本書で見つかった誤りは書面にてピープルソフトまでお知らせください。

本書に記載されているソフトウェアは著作権によって保護されており、このソフトウェアの使用許諾契約書に基づいてのみ使用が許諾されます。この使用許諾契約書には、開示情報を含むソフトウェアと本書の使用条件が記載されていますのでよくお読みください。

PeopleSoft、PeopleTools、PS/nVision、PeopleCode、PeopleBooks、PeopleTalk、Vantiveはピープルソフトの登録商標です。Pure Internet Architecture、Intelligent Context Manager、The Real-Time Enterpriseはピープルソフトの商標です。その他すべての会社名および製品名は、それぞれの所有者の商標である場合があります。ここに含まれている内容は予告なく変更されることがあります。

オープンソースの開示

この製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) が開発したソフトウェアが含まれています。Copyright (c) 1999–2000 The Apache Software Foundation. All rights reserved. このソフトウェアは「現状のまま」提供されるものとし、特定の目的に対する商品性および適格性の黙示保証を含む、いかなる明示または黙示の保証も行いません。Apache Software Foundationおよびその供給業者は、損害の発生原因を問わず、責任の根拠が契約、厳格責任、不法行為（過失および故意を含む）のいずれであっても、また損害の可能性が事前に知らされていたとしても、このソフトウェアの使用によって生じたいかなる直接的損害、間接的損害、付随的損害、特別損害、懲罰的損害、結果的損害に関しても一切責任を負いません。これらの損害には、商品またはサービスの代用調達、使用機会の喪失、データまたは利益の損失、事業の中断が含まれますがこれらに限らないものとします。

ピープルソフトは、いかなるオープンソースまたはシェアウェアのソフトウェアおよび文書の使用または頒布に関しても一切責任を負わず、これらのソフトウェアや文書の使用によって生じたいかなる損害についても保証しません。

目次

概要	1
はじめる前に	1
WebSphereコンポーネントの命名規則	2
新機能	3
ERP 9.0	3
サードパーティ・ソフトウェアのインストール	5
WebSphere要件の理解	5
サポートされているWebSphereのバージョン	5
前提条件	5
はじめる前に	6
必要なデータベース・リポジトリ	6
JDBCドライバの入手	6
DB2の場合	6
IBM HTTPサーバーのインストール	6
WebSphereのインストール(バージョン4.0)	6
iSeries CD-ROMからのWebSphereのインストール	7
> WebSphereをQshell Interpreterからインストールするには	7
> WebSphereをiSeriesのコマンド行からインストールするには	7
ワークステーションのCD-ROMドライブからのWebSphereのインストール	8
> WebSphereをワークステーションのCD-ROMドライブからインストールするには	8
WebSphere FixPackの適用	11
> WebSphere FixPackを適用するには	11
WebSphere Administrative Consoleのインストール	12
> WebSphere Administrative Consoleをインストールには	12
WebSphereの起動	20
> WebSphere Administrative Consoleを起動するには(AEの場合)	20
IBM HTTPサーバーの構成(V5R2)	23
IBM HTTPサーバーのADMINインスタンスの起動	23
> HTTPサーバーのADMINインスタンスをiSeriesのコマンド行から起動するには	23
> HTTPサーバーのADMINインスタンスを[Operations Navigator]から起動するには	23
新規HTTPサーバー構成の作成	24
> 新規HTTPサーバーを作成するには	24
新規HTTPサーバー・インスタンスの作成	24
> HTTPサーバー・インスタンスを作成するには	25
> 新規HTTPサーバー・インスタンスを構成するには	29
iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスの起動	33
> iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスをコマンド行から起動するには	33
> iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスを[iSeries Configuration]および	34
Administrationフォームから起動するには	34
WebSphereアプリケーション・サーバーのテスト(V5R2)	35
> WebSphereアプリケーション・サーバーをテストするには(AE)	35
iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスの停止	36

> iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスをコマンド行から停止するには	36
> iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスを[iSeries Configuration]およびAdministrationフォームから停止するには	36
Webサーバーのインストールと構成	39
はじめる前に	39
Webサーバーのインストール	39
> Webサーバーをインストールするには	39
OneWorld/ERPインストール・プランへのWebサーバーの追加	45
> OneWorld/ERPインストール・プランにJavaサーバーを追加するには	45
スタティック・ファイルの処理の構成	46
> ファイル・サーブレットを無効化するには	47
> ファイル・サーブレットを有効化するには	47
JASログの構成	47
サンプルjdelog.propertiesファイル	48
OneWorld/ERPのシリアル化オブジェクトの生成	51
はじめる前に	52
eGeneratorのインストール	52
はじめる前に	52
シリアル化オブジェクト生成のためのWin32クライアントのセットアップ	52
> シリアル化オブジェクトを生成するようにOneWorld/ERPクライアントをセットアップするには	52
ジェネレート・マシンへのJASビルドのコピー	53
> ドライブをiSeries上のIFSにマップするには	53
> ジェネレート・マシンにJASビルドをコピーするには	54
シリアル化オブジェクトのためのOneWorld/ERPの準備	54
> データ辞書を自動入力するには	55
> グローバル・スペックを自動入力するには	55
gen.batの修正	56
> gen.batを修正するには	56
ログイン	57
はじめる前に	57
jas.iniの設定	58
jde.iniの設定	58
Webサーバーに生成する方法	59
> Webサーバーに生成するには	59
Webサーバーをバイパスしてデータベースに直接生成する方法	60
> オブジェクトをデータベースに直接生成するには	61
eGeneratorの構成	62
eGeneratorオプションの設定	62
> eGeneratorオプションを設定するには	62
生成モード	64
逐次生成	64
パラレル生成	64
直接生成	65
HTMLOverridesファイルの選択	65
> HTMLOverridesファイルを選択するには	65
言語の選択	65
> 言語を選択するには	66
genapp.iniファイルの構成	66
すべての標準シリアル化オブジェクトの生成	69
TAM Analyzerの実行	69

▶ TAM Analyzerを実行するには	69
全オブジェクトの生成	70
▶ すべてのOneWorld/ERPオブジェクトを生成するには	70
生成プロセスの検証	74
ログ・ファイルのチェック	74
▶ ステータス・ログを表示するには	75
▶ エラー・ログを表示するには	75
データベース確認のチェック	75
選択したオブジェクトの生成	76
バルク生成ファイルを使用したオブジェクトの生成	77
バルク生成ファイルの作成	77
▶ バルク生成ファイルを作成するには	77
バルク生成ファイルの実行	78
▶ バルク生成ファイルを実行するには	78
コア・オブジェクトの生成	80
▶ コア・オブジェクトを生成するには	80
アプリケーションの生成	82
▶ 単一アプリケーションを生成するには	82
▶ システム・コード別にアプリケーションを生成するには	84
▶ モード別にアプリケーションを生成するには	85
フォームの生成	86
▶ フォームを生成するには	86
レポートの生成	88
▶ 単一レポートを生成するには	88
▶ レポート・バージョンを生成するには	88
▶ システム・コード別にレポートを生成するには	89
NERの生成	91
▶ NERを生成するには	91
データ辞書項目の生成	92
▶ データ辞書項目を生成するには	92
テーブルの生成	93
▶ テーブルを生成するには	93
ビジネス・ビューの生成	94
▶ ビジネス・ビューを生成するには	95
データ構造体の生成	96
▶ データ構造体を生成するには	96
グリッド・タブの変換	97
▶ グリッド・タブを変換するには	97
Webサーバーの実行	99
Webサーバーの起動	99
▶ Webサーバーをインストールするには(WebSphere AEの場合)	99
Webサーバーの停止	99
▶ Webサーバーを停止するには(WebSphere AEの場合)	99
Webサーバーへのアクセス	99
▶ Webサーバーにアクセスするには	100
J.D. EdwardsポータルでのInherited Trustシステムのセットアップ	100
▶ J.D. Edwardsポータル上でInherited Trustシステムをセットアップするには	101
Webサーバーのチューニング	103
jas.ini設定のチューニング	103
[JDENET]	103
[LOGS]	103

[PORTALCONFIGURATION]	103
Java仮想マシンのチューニング	104
単一VMのチューニング	104
複数VMが動作するシステムのチューニング	104
エンタープライズ・サーバーのチューニング	104
DB2®/UDBの場合のみ	104
データベース・マネージャ構成	104
データベース構成(OWSH9)	104
シリアル化オブジェクト・データベースのチューニング	105
DB2/UDBのチューニング	105
▶ DB2/UDBをチューニングするには	105
Oracle9iのチューニング	106
最適化設定の確認	106
▶ init.oraファイルのパラメータ設定をチェックするには	106
▶ データベースをクエリーするには	106
統計の更新	106
▶	107
A. jas.iniファイルのパラメータと値	
[SECURITY]	111
[OWWEB]	114
[PORTALCONFIGURATION]	118
[CACHE]	127
[SERVER COMPONENTS]	128
[JDENET]	129
[SERVER]	130
[LOGIN]	131
[LOGS]	131
[TRANSACTIONS]	133
[WEB GUI]	133
B. サンプルjas.iniファイル	
C. jdbj.iniファイルのパラメータと値	
J.D. Edwards OneWorld/ERPデータ固有のセクション	139
[JDBj-BOOTSTRAP SESSION]	139
[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]	140
[JDBj-SPEC DATA SOURCE]	141
汎用セクション	142
[JDBj-JDBC DRIVERS]	143
[JDBj-ORACLE]	143
[JDBj-LOGS]	144
[JDBj-SERVER]	144
[JDBj-CONNECTION POOL]	144
[JDBj-RUNTIME PROPERTIES]	146
D. サンプルJDBj.iniファイル	
E. WebSphere 4.0への移行	
Javaサーバー構成のバックアップ作成	159
WebSphere 3.5構成のバックアップ作成	159
▶ WebSphere 3.5構成のバックアップを作成するには	159
jas.iniファイルのバックアップ作成	160

➤ jas.iniファイルのバックアップを作成するには	160
WebSphere 3.5インストールの削除	160
WebSphereからの Web Server構成の削除	161
➤ WebSphereからWebサーバー構成を削除するには	161
WAS 3.5.xインストールの削除	161
➤ WAS 3.5.xインストールを削除するには	162
WebSphere 4.0とJASのインストールと構成	162
F. Webサーバーのサービス・パックのアップグレード	
Webサーバー構成のバックアップ作成	163
WebSphere 4.0構成のバックアップ作成	163
➤ WebSphere 4.0構成のバックアップを作成するには	163
jas.iniファイルのバックアップ作成	164
➤ jas.iniファイルのバックアップを作成するには	164
ポータル・コンポーネントのバックアップ作成	164
WebSphereからのWebサーバー構成の削除	164
➤ WebSphereからWebサーバー構成を削除するには	164
キャッシュ・ディレクトリの削除	165
➤ キャッシュ・ディレクトリを削除するには	165
新規サーバーのサービス・パックのインストール	166
➤ 新規Webサーバーのサービス・パックをインストールするには	166

概要

このガイドでは、iSeriesプラットフォーム上でOneWorld XeまたはERP 8以上（以下、OneWorld/ERP）を実行するJ.D. Edwards HTML Webサーバー（以下、Webサーバー）のインストールと構成について説明します。インストール・プロセスの構成は次のとおりです。

- ・ サードパーティ・ソフトウェアのインストール
- ・ Webサーバーのインストールと構成
- ・ IBM HTTPサーバーの構成(V5R2)
- ・ OneWorld/ERPのシリアル化オブジェクトの生成
- ・ Webサーバーの実行
- ・ Webサーバーのチューニング

同じJavaサーバーに複数のサービス・パックをインストールする方法については、Knowledge Gardenで次のドキュメントを参照してください。

https://knowledge.jdedwards.com/jdecontent/WWAT/TipsTechniques/ttdk_JAS_Multi_Foundations.doc

J.D. Edwardsポータルを使用している場合は、この製品の使用ガイドを次のURLのJ.D. Edwards Knowledge Gardenで検索できます。

<https://knowledge.jdedwards.com/JDEContent/documentationcbt/overview/B7333eindex.htm>
[https://knowledge.jdedwards.com/jdecontent/WWAT/TipsTechniques/ttdk_JAS_Multi_Foundations.doc]

注意

Webサーバーのインストールに必要な手順が記載されています。ただし、インストール担当者がiSeriesとシステム管理の基本的な知識を持っていることが前提となります。

注意

OneWorld/ERP JavaサーバーとWebSphere 4.0では、SQL Server 7をサポートしていません。このガイドでSQL Server 7に言及している箇所は、すべて無視してください。最新情報については「技術的な最小要件」を参照してください。

はじめる前に

- ・ ポータルを実装するには、SAR 5274158、5897371、および6107095の特殊指示を完了する必要があります。
- ・ システムが、特定のプラットフォーム上で動作するWebサーバーのインストールに必要なハードウェアとソフトウェアの技術的な最小要件(MTR)を満たしているかどうかを確認します。これらの要件のリス

トについては、次のURLにアクセスし、Knowledge GardenのWebページを参照してください。

<https://knowledge.jdedwards.com/JDEContent/TechMarketingCU/information/bjtechreqs.htm>

- ・ OneWorld/ERP™エンタープライズ・サーバーが正常にインストールされ、機能しているかどうかを確認します。
- ・ 次のリンクを使用して、インストール環境がWebSphereコンポーネントのインストール前提条件を満たしているかどうかを確認します。

<http://www-3.ibm.com/software/webrowsers/appserv/doc/v40/ae/infocenter/index.html>

WebSphereコンポーネントの命名規則

WebSphereコンポーネントの場合は、次の命名規則を使用することをお勧めします。これらの名称を使用すると、各種のWebサーバー・コンポーネントをOneWorld/ERPのさまざまなインスタンスと区別できます。次の表のすべてのコンポーネント式により、OneWorld/ERPの単一のインスタンスが定義されます。

アプリケーション・サーバー	推奨名
アプリケーション・サーバー	AS_JDEdwards_[instance]
仮想ホスト	VH_JDEdwards_[instance]
Webアプリケーション	EA_JDEdwards_[instance]
標準出力	stdout_[instance].log
標準エラー	stderr_[instance].log

[instance]は、OneWorld/ERPのインスタンス定義であるWebSphereコンポーネント・グループを識別する固有の文字、番号または文字列です。[instance]は、あるグループの全コンポーネントについて同じにする必要があります。

たとえば、OneWorld/ERP™のインスタンスが1つしかない場合は、[instance]を“1”と定義できます。その場合、そのインスタンスのアプリケーション・サーバー名はAS_JDEdwards_1となります。

新機能

ここでは、各サービス・パック・リリースのマニュアルに加えられた変更事項について説明します。

ERP 9.0

SP22以降のリリースB9には、次の変更事項があります。

変更	セクション
V4R5またはV5R1オペレーティング・システムはサポート対象外となりました。	V4R5およびV5R1に関する「IBM HTTPサーバーの構成」の章は削除されています。
WebSphere Advanced Edition Single Serverはサポート対象外となりました。	この変更は、このガイド全体に適用されます。
インストール・プログラムが修正されました。	Webサーバーのインストール Webサーバーのインストールと構成
JASにログインするには、新規構成ファイル jdelog.properties の設定が必要です。	「JASログの構成」を参照してください。 Webサーバーのインストールと構成
全オブジェクトの生成の前に、コア・オブジェクトの生成手順が追加されました。	全オブジェクトの生成 OneWorld/ERPのシリアル化オブジェクトの生成
jas.iniファイルから、多数のパラメータがJDBj.iniファイルに移動されました。	付録の修正： Appendix A: jas.iniファイルのパラメータと値
サンプルjas.iniファイルが新規ファイルに置き換えられました。	付録の修正： Appendix B: サンプルjas.iniファイル
新規構成ファイル: JDBj.ini	新規の付録： Appendix C: jdbj.iniファイルのパラメータと値
JDBj.iniサンプル・ファイルに関する新規の付録が追加されました。	新規の付録： Appendix D: サンプルJDBj.iniファイル

サードパーティ・ソフトウェアのインストール

ここでは、Webサーバーの実行に必要なWebSphereと他のサードパーティ製品をインストールする方法について説明します。

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [WebSphere要件の理解 - ページ \[5\]](#)
- ・ [JDBCドライバの入手 - ページ \[6\]](#)
- ・ [IBM HTTPサーバーのインストール - ページ \[6\]](#)
- ・ [WebSphereのインストール\(バージョン4.0\) - ページ \[6\]](#)
- ・ [WebSphere Administrative Consoleのインストール - ページ \[12\]](#)

注意

特に明記しない限り、すべてのインストール画面でデフォルト値を受け入れてください。開発に必要なステップについては、その旨を記載してあります。

WebSphere要件の理解

WebSphereには複数のバージョンがあり、それぞれ要件とインストール・タスクが異なります。

サポートされているWebSphereのバージョン

IBM WebSphereアプリケーション・サーバー(バージョン4.0、FixPack 3以上付き)を購入する必要があります。

J.D. Edwards Javaアプリケーション・サーバーでは、次のバージョンのWebSphere 4.0がサポートされています。

- ・ WebSphere Advanced Edition (AE)

WebSphere Advanced Edition™(AE)では複数のアプリケーション・サーバーを実行できますが、その構成情報を格納するデータベース・リポジトリが必要です。リポジトリ要件については、下記の「[必要なデータベース・リポジトリ - ページ \[6\]](#)」を参照してください。

前提条件

WebSphereアプリケーションをインストールする前に、前提条件が満たされていることを確認します。IBM WebSphereバージョン4.0アプリケーション・サーバーの要件については、次のIBMリンクをクリックして確認してください。

<http://publib.boulder.ibm.com/was400/40/AE/english/docs/iicprqr.html> (WebSphere AE™)

iSeriesの場合は、別のライセンス・プログラム5769-JV1のオプション 5としてJavaを取得する必要があります (V5R1および5722-JV1の場合も含む)。

はじめる前に

WebSphere 3.5からWebSphere 4.0に移行する場合は、次のタスクを行う前に「Appendix E: WebSphere 4.0への移行」の指示に従って操作する必要があります。

必要なデータベース・リポジトリ

WebSphere Advanced Edition (AE)アプリケーションには、構成設定を格納するためのデータベース・リポジトリとしてDB2が必要です。

J.D. Edwardsでサポートされているデータベースのバージョンについては、J.D. Edwardsの技術的な最小要件を参照してください。

データベースは、Webサーバーと同じマシン上または異なるマシン上で運用できます。各種データベースのインストール事例については、IBMマニュアルを参照してください。次のリンクを使用すると、WebSphereインフォメーション・センターにアクセスして、各種プラットフォーム用のインストール・ガイドを入手できます。

<http://www-3.ibm.com/software/webservers/appserv/doc/v40/ae/infocenter/index.html> (WebSphere AE)

JDBCドライバの入手

DB2の場合

システム上にJDBCドライバ(jt400.jar)が存在することを確認します。このドライバは、ライセンス・プログラム製品5769-JC1 (V5R1の場合は5722-JC1)として出荷されます。ドライバが次のパスにあることを確認してください。

/QIBM/ProdData/http/Public/JT400/lib/jt400.jar

このJDBCドライバは、J.D. Edwards Knowledge Garden (次のURL) で指定されているWebサーバーの技術的な最小要件となっています。

<https://knowledge.jdedwards.com/jdecontent/techmarketingcu/information/webspherexref.doc>

IBM HTTPサーバーのインストール

IBM HTTPサーバーは、ライセンス・プログラム製品5769-DG1 (V5R1の場合は5722-DG1)として出荷されます。IBM HTTPサーバーがiSeriesにインストールされていることを確認する必要があります。これは、J.D. Edwards Knowledge Garden (次のURL) で指定されているiSeries Webサーバーの技術的な最小要件となっています。

<https://knowledge.jdedwards.com/jdecontent/techmarketingcu/information/webspherexref.doc>

WebSphereのインストール (バージョン4.0)

Webサーバーには、iSeries用のWebSphere Application Server 4.0 Advanced Editionが必要です。WebSphereアプリケーション・サーバーをインストールするには、次の2つの方法があります。

- ・ [iSeries CD-ROMからのWebSphereのインストール - ページ \[7\]\(推奨\)](#)
- ・ [ワークステーションのCD-ROMドライブからのWebSphereのインストール - ページ \[8\]](#)

iSeries CD-ROMからのWebSphereのインストール

WebSphereアプリケーション・サーバーは、DC-ROMドライブからiSeriesシステムに直接インストールできます。リモート・ワークステーションからインストールするよりも、この方法の方が迅速です。

ヒント

下記のコマンドを実行するには、ユーザー・プロファイルに*ALLOBJ権限があることを確認します。

次の手順では、WebSphereアプリケーション・サーバーにすべてのデフォルト設定を使用します。異なる設定を使用する場合は、次のIBMリンクを使用してWebSphereアプリケーション・サーバーのインストール・パラメータを確認してください。

<http://publib.boulder.ibm.com/was400/40/AE/english/docs/iicprrq.html> (WebSphere AE™)

iSeries CD-ROMドライブからWebSphereをインストールするには、次のどちらかを選択します。

- ・ [手順 1 \[7\]](#)
- ・ [手順 2 \[7\]](#)

► WebSphereをQshell Interpreterからインストールするには

1. iSeriesシステムのCD-ROMドライブにWebSphere Application Server Advanced Edition for iSeries (V4.0) CD-ROMを挿入します。
2. iSeriesのコマンド行に次のコマンドを入力して、Qshell Interpreter を起動します。

```
STRQSH
```

3. 次のコマンドを入力して、CD-ROMの正しいディレクトリに移動します。

```
cd /QOPT/WebSphere
```

注意

このパスは大文字と小文字が区別されるので、上記のとおり正確に入力してください。

4. 次のコマンドを入力してインストール・スクリプトを起動します。

```
SETUP
```

► WebSphereをiSeriesのコマンド行からインストールするには

1. iSeriesシステムのCD-ROMドライブにWebSphere Application Server Advanced Edition for (V4.0) iSeries CD-ROMを挿入します。
2. iSeriesのコマンド行から次のコマンドを1行に入力します。

```
RUNJAVA CLASS(SETUP)
CLASSPATH('/QIBM/ProdData/Java400/jt400ntv.jar:/QOPT/WebSphere/OS400:/QOPT/WebSphere/OS400/INSTALL
```

ヒント

このコマンドは見やすいように改行が挿入されていますが、単一の継続行として改行なしで入力する必要があります。また、大文字と小文字が区別されるので、上記のとおりに入力してください。

このコマンドを実行すると、インストール・プロセスの各段階を説明するメッセージが表示されます。システムの規模によっては、WebSphereアプリケーション・サーバーのインストールに1時間程度かかるので注意してください。

ワークステーションのCD-ROMドライブからのWebSphereのインストール

WebSphereアプリケーション・サーバーは、Windows 32ビット・オペレーティング・システム・ワークステーションからiSeriesにインストールできます。リモート・インストールには、InstallShieldインターフェイスを使用します。

ヒント

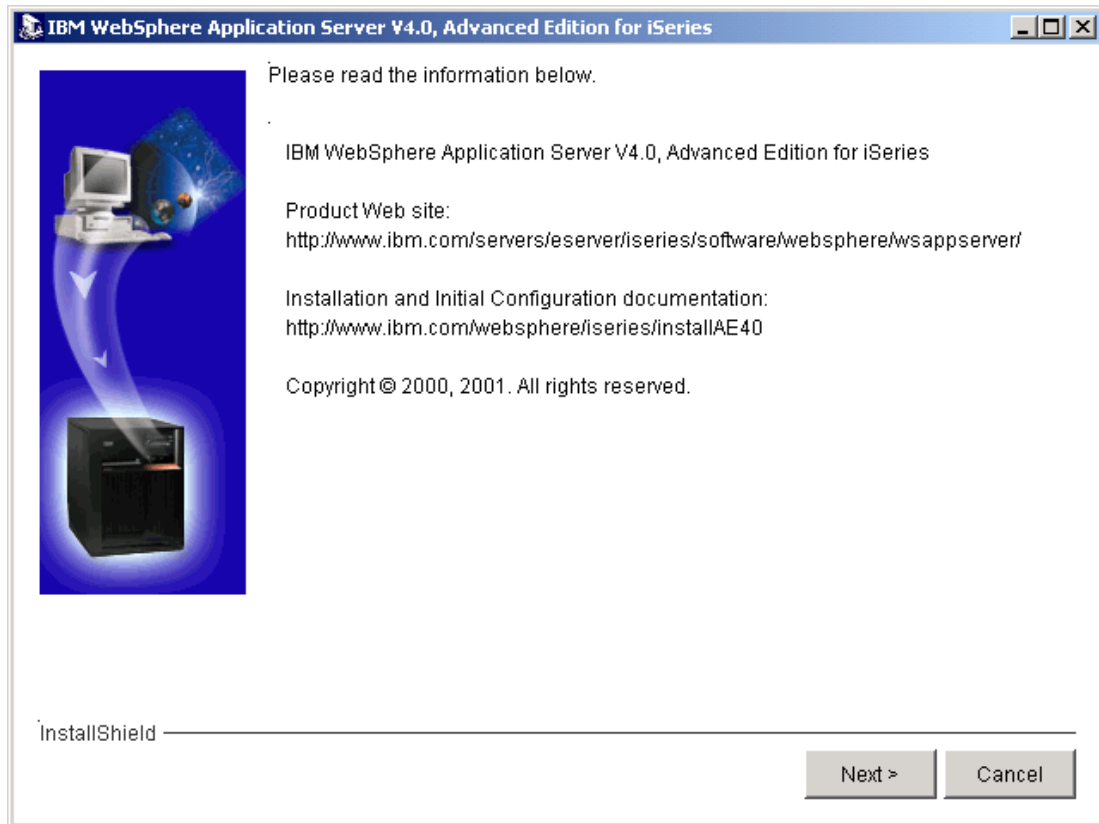
WebSphereアプリケーション・サーバーをワークステーションのCD-ROMドライブからインストールした場合は、リモートでインストールを削除する場合にも同じワークステーションを使用する必要があります。詳しくは、次のIBMリンクを使用してトピック「Uninstalling WebSphere Application Server」を参照してください。

<http://publib.boulder.ibm.com/was400/40/AE/english/docs/uninst.html>

► WebSphereをワークステーションのCD-ROMドライブからインストールするには

1. ワークステーションのCD-ROMドライブにWebSphere Application Server Advanced Edition for iSeries (V4.0) のCD-ROMを挿入します。
2. ワークステーション上でAutorun(自動実行)が使用可能になっている場合は、WebSphere InstallShieldプログラムが自動的に起動します。

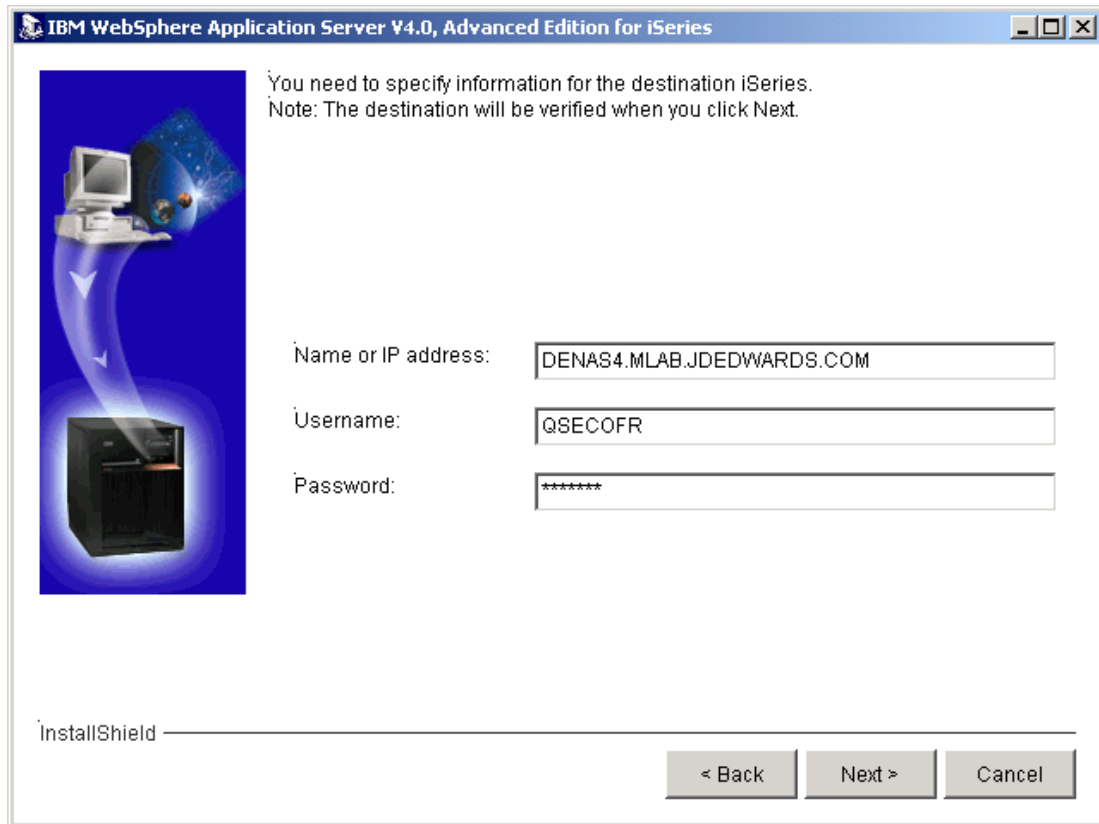
Autorunが使用可能になっていない場合は、Windowsエクスプローラを使用してCD-ROMドライブに移動します。setup.batファイルをダブルクリックしてWebSphere InstallShieldプログラムを起動します。



3. 最初の画面で[Next(次へ)]をクリックし、WebSphereアプリケーション・サーバーのInstallShieldプログラム・ウィザードに表示される指示に従って操作します。

ヒント

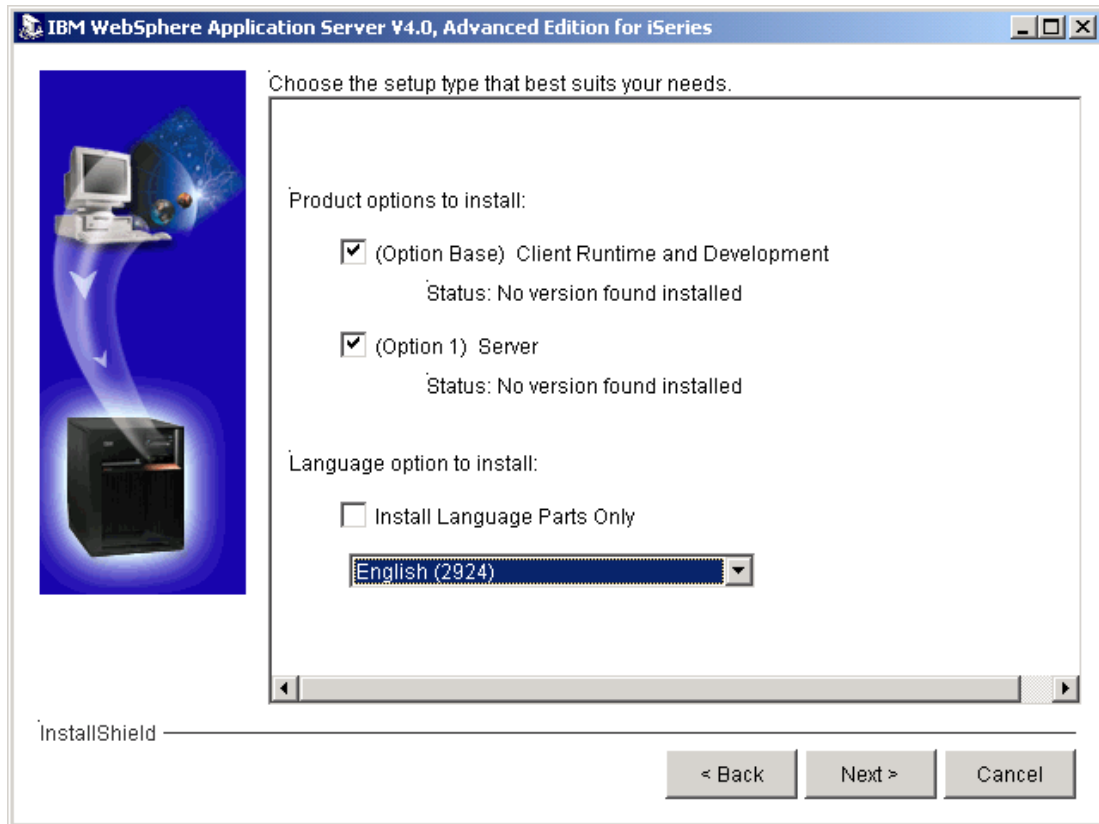
リモート・インストール中に、インストール先ディレクトリの指定を求めるプロンプトが表示されます。このディレクトリには、製品がインストールされるのではなく、リモート・インストール削除ファイルが保持されます。



4. 次の画面で、次のフィールドに値を入力します。

- ・ [Name or IP Address(名称またはIPアドレス)] : iSeries Webサーバー名を入力します。
- ・ [User name(ユーザー名)] : *ALLOBJ権限を持つユーザー名を入力します。
- ・ [Password(パスワード)] :

5. [Next]をクリックします。



6. [WebSphere Components (WebSphereコンポーネント)]で、次のフィールドに値を入力します。
 - ・ [Product Options to Install: (インストールする製品の選択)]で、[Option Base (基本オプション)]と[Option 1 (オプション1)]を有効にします。
 - ・ プルダウン・メニューから、iSeries Webサーバー環境用の言語を選択します。
7. [Next]をクリックします。
8. インストールの完了後に[Finish (完了)]をクリックします。

WebSphere FixPackの適用

必要なFixPackは、J.D. Edwardsの技術的な最小要件を参照して判断してください。次のタスクを実行してFixPackを適用します。

► WebSphere FixPackを適用するには

1. 次のコマンドを入力してWebSphereを停止します。

```
ENDSBS QHTTPSVR
```

```
ENDSBS QEJBADV4
```

2. Advanced Editionの場合は、PTF SF99241を要求してFixPack 3以上を入手します。
3. グループPTFを適用します。

WebSphere Administrative Consoleのインストール

WebSphere Administrative Consoleを使用すると、iSeries用WebSphereアプリケーション・サーバーを管理できます。このコンソールは、ワークステーション（Windows NT、AIXまたはSolaris）上で動作するスタンドアロンJavaアプリケーションであり、管理データが格納されているiSeriesシステムに接続します。

► WebSphere Administrative Consoleをインストールには

1. ワークステーション上で、コンソールを実行するワークステーション（NT、AIXまたはSolaris）のCD-ROMドライブに、そのワークステーション用のWebSphere Application Server 4.0 Advanced Edition CD-ROMを挿入します。

iSeriesマシンへのインストール時と同じEditionを使用してください。

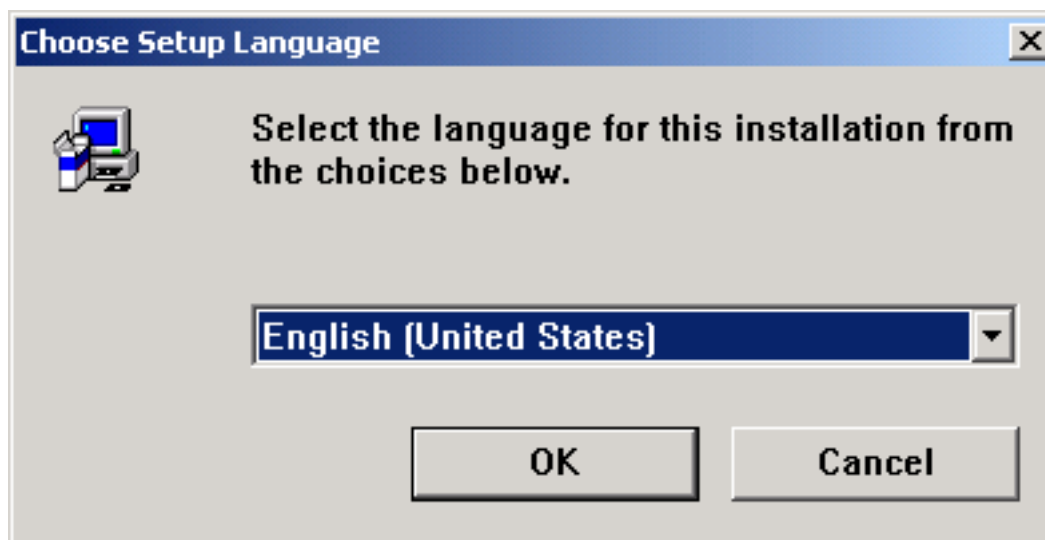
注意

WebSphere Application Server Advanced Edition for iSeries CD-ROMを挿入しないでください。

2. Windows NTワークステーションを使用しており、Autorunが使用可能になっている場合は、Windows InstallShieldプログラムが自動的に起動します。

Autorunが使用可能でない場合は、Windowsエクスプローラを使用してCD-ROMドライブの中身を表示し、Windows InstallShieldプログラムを実行します。ルート・ディレクトリにあるsetup.exeファイルをダブルクリックします。

AIXまたはSun Solarisワークステーションを使用している場合は、AIXまたはSunサブディレクトリに移動します。"./install.sh"と入力してインストール・スクリプト・ファイルを実行します。



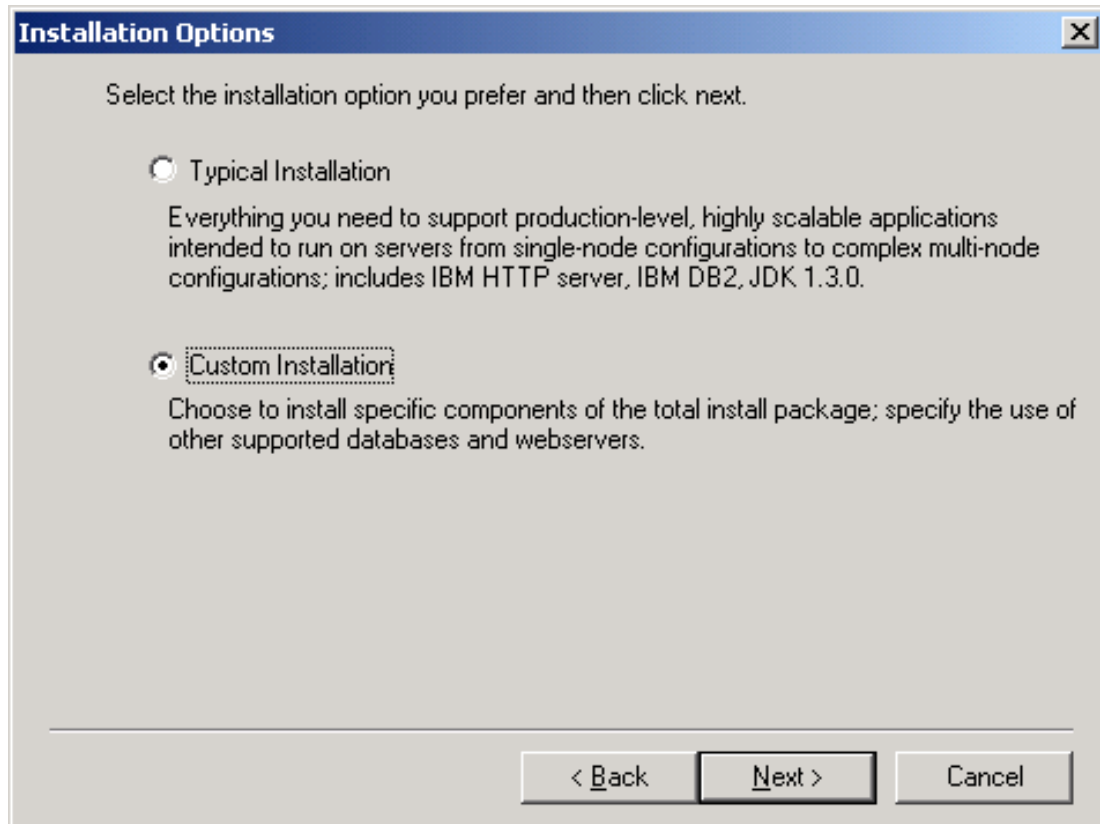
3. [Choose Setup Language (セットアップ言語の選択)] で、WebSphereアプリケーション・サーバー・ド

キュメントの表示に使用する言語を選択します。

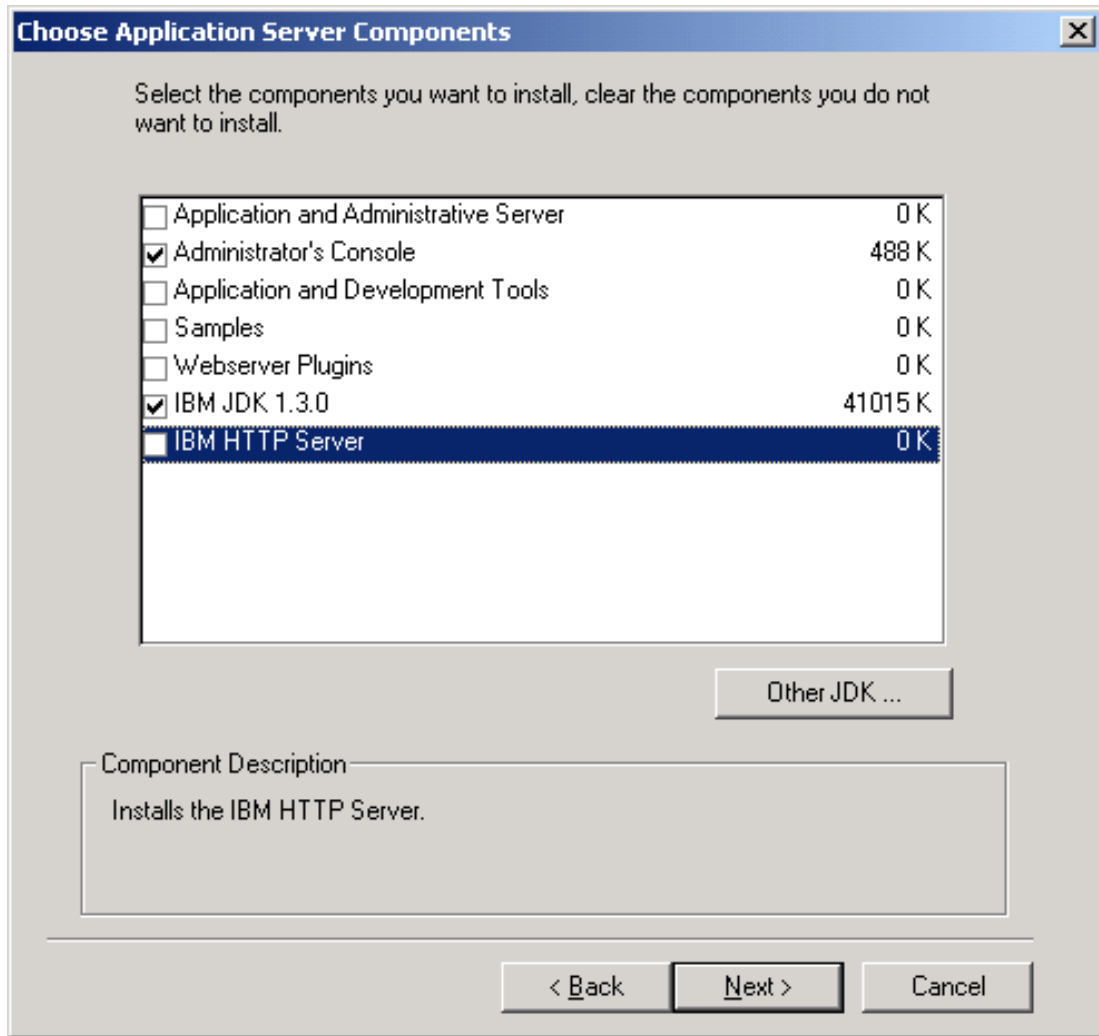
4. [OK]をクリックします。



5. [WebSphere Application Server]で[Next]をクリックします。
6. WebSphereの旧バージョンがインストールされている場合は、それが検出されるのでインストールを削除できます。[Next]をクリックしてインストールを続行します。



7. [Installation Options (インストール・オプション)]で、[Custom Installation (カスタム・インストール)]を選択して[Next]をクリックします。



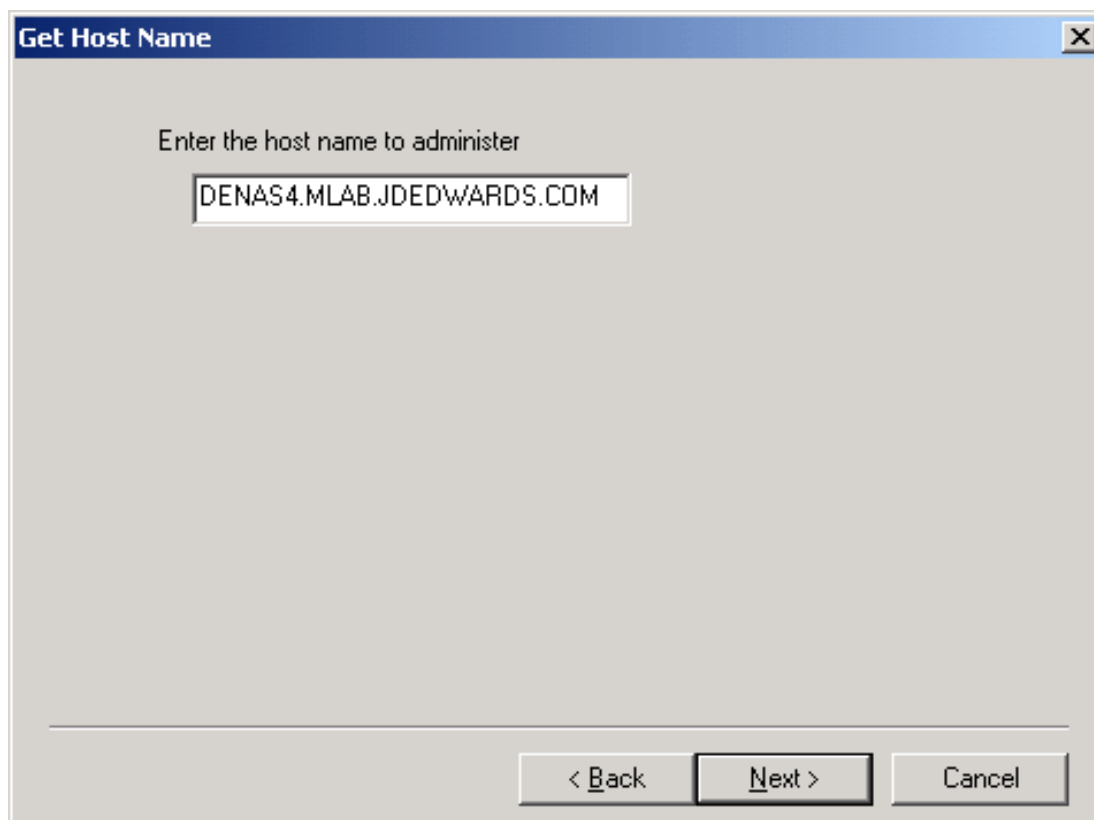
8. [Choose Application Server Components(アプリケーション・サーバー・コンポーネントの選択)]で、次のオプションのみを有効にします(他はすべて無効にします)。

- ・ Administrator Console
- ・ IBM JDK 1.3

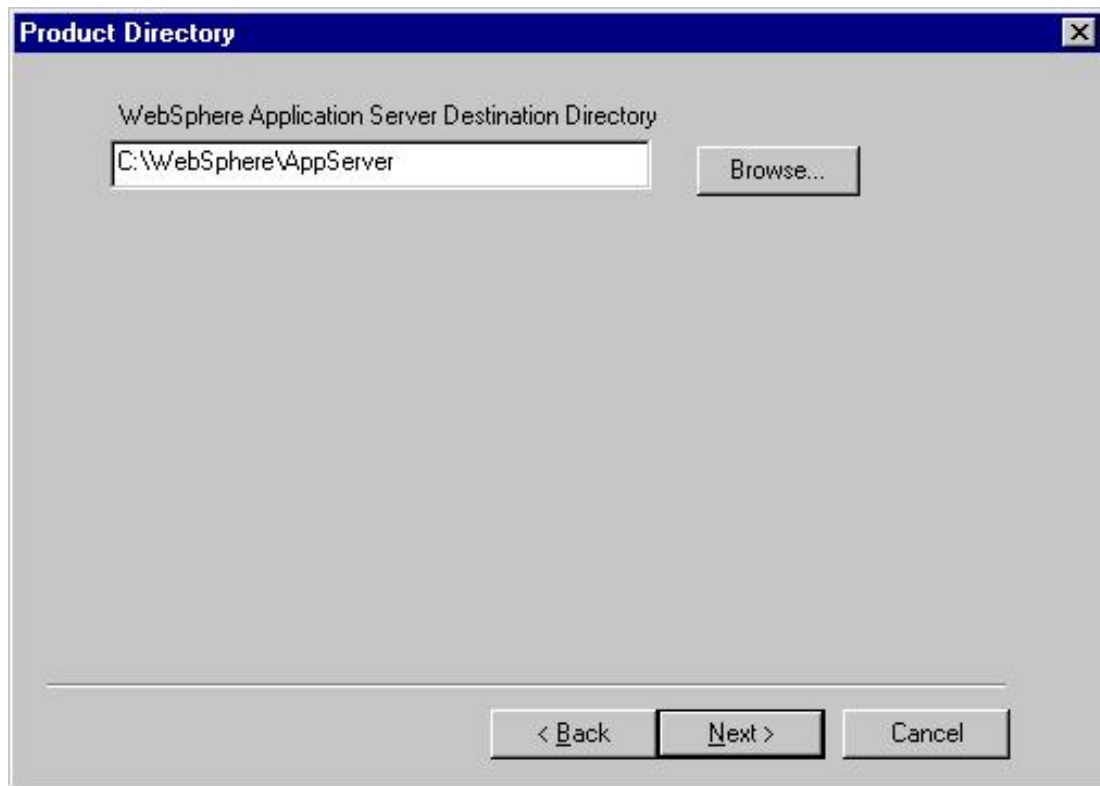
このオプションを有効にするのは、WebSphereアプリケーション・サーバーでサポートされているIBM Java Development Kit製品の最新バージョンがインストールされていない場合です。ワークステーション用のIBM Java Development Kitの正しいバージョンについては、次のリンクの「Workstation software requirements(ワークステーションのソフトウェア要件)」セクションを参照してください。

<http://publib.boulder.ibm.com/was400/40/AE/english/docs/iicprrq.html>

9. [Next]をクリックします。



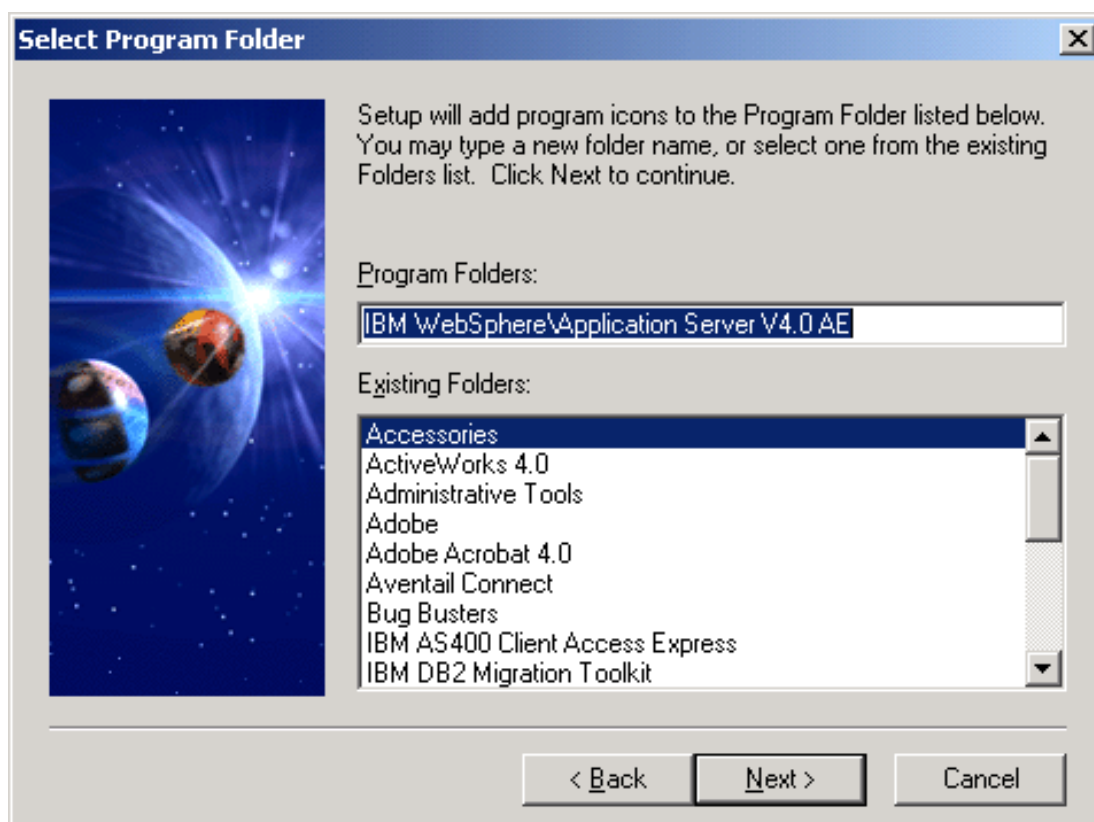
10. [Get Host Name(ホスト名の取得)]で、iSeriesサーバー名を入力します。
この名前は大文字と小文字が区別されます。
11. [Next]をクリックします。



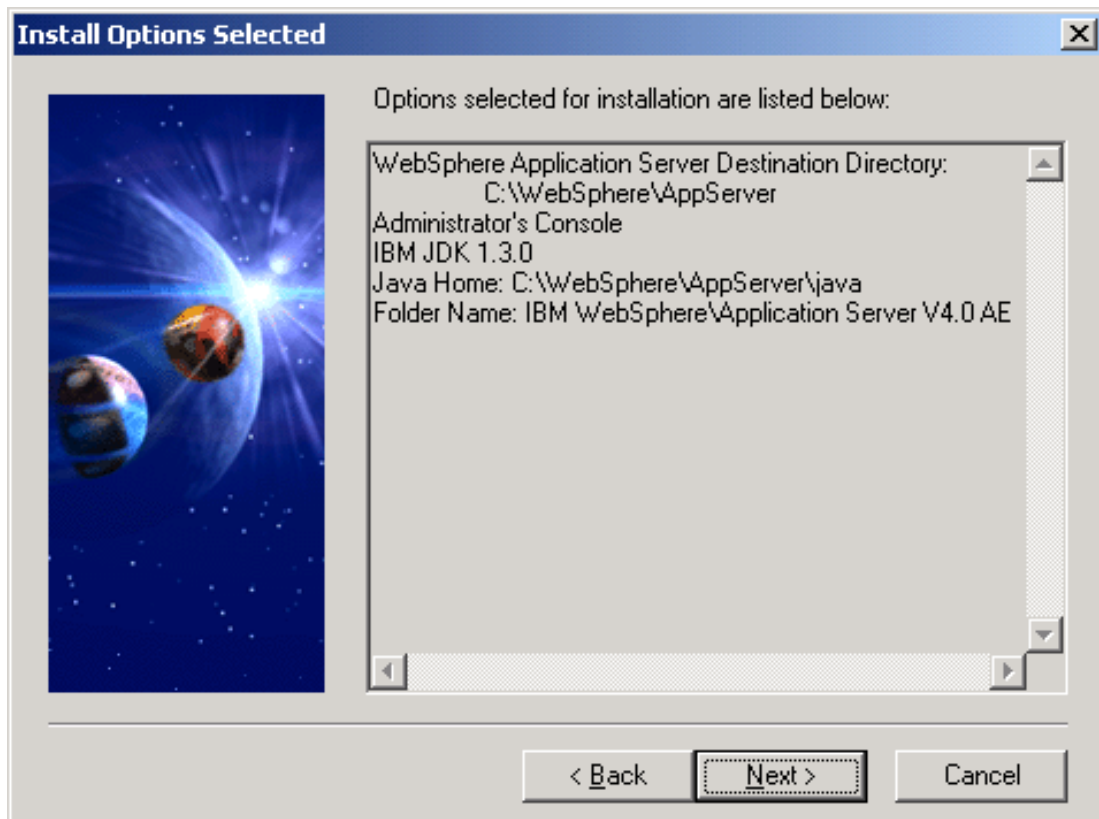
12. [Product Directory(製品ディレクトリ)]で、[Browse(参照)]ボタンをクリックするか、次のように Administrative Consoleをインストールするローカル・ディレクトリへのパスを入力します。

x:\WebSphere\AppServer

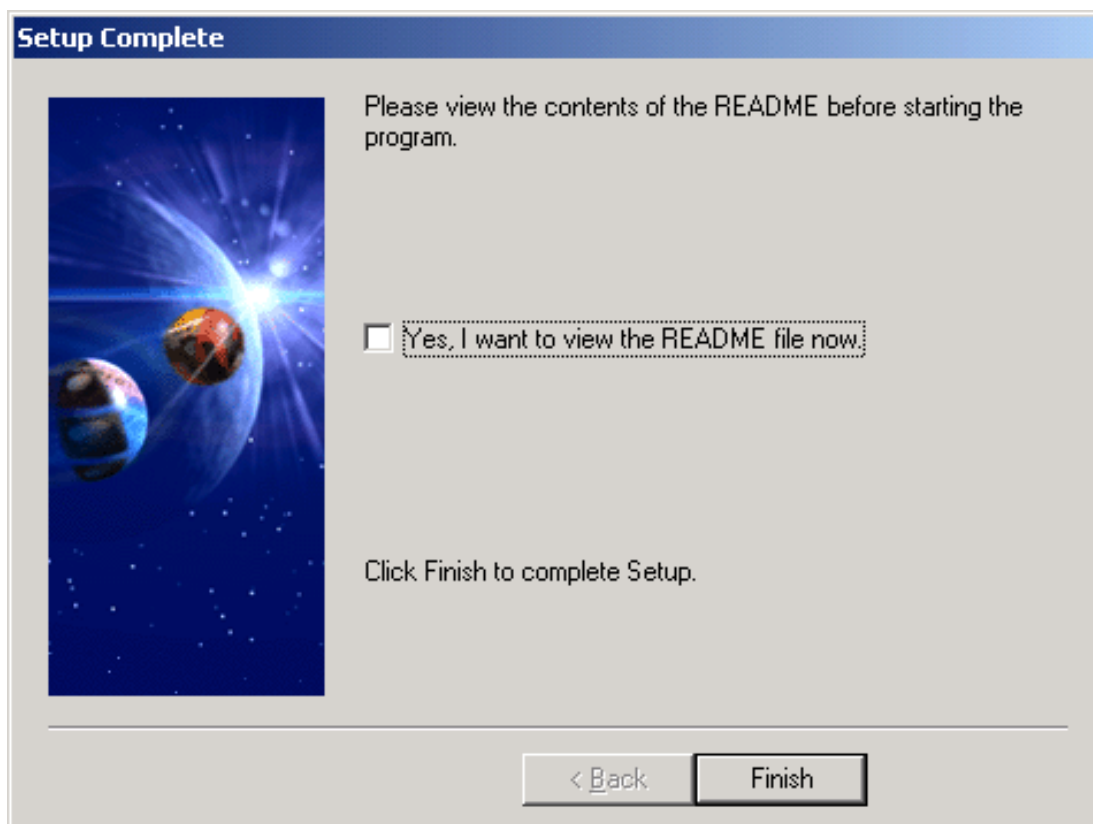
13. [Next]をクリックします。



14. [Select Program Folder(プログラム・フォルダの選択)]で[Next]をクリックします。



15. Install Options Selected(選択したインストール・オプション)]で、[Next]をクリックしてインストール・プロセスを開始します。
16. [Setup Complete(セットアップ完了)]メッセージが表示されるまで待ちます。



17. [Setup Complete]で[Finish]をクリックします。
18. Administrative Consoleのインストール後に、WebSphereと同じディレクトリ (x:¥WebSphere¥AppServer)に正しいFixPackを適用してWebSphereを更新します。

Administrative Consoleには、WebSphereアプリケーション・サーバーに使用したのと同じFixPackレベルを使用してください。また、コンソール・マシンには、iSeriesマシンと同じEditionをインストールしてください。

正しいFixPackは、MTRを参照して判断してください。

WebSphereの起動

これ以降に説明するステップを実行するには、WebSphereを起動する必要があります。このタスクはIBM HTTPサーバーに依存しないため、IBM HTTPサーバーの構成前に実行できます。

► WebSphere Administrative Consoleを起動するには(AEの場合)

1. コマンド・プロンプトから、次のコマンドを使用してQEJBADV4サブシステムを起動します。
Advanced Editionの場合: STRSBS QEJBADV4/QEJBADV4
2. 〈Work With Active Jobs (アクティブ・ジョブの処理)〉を使用するために、次のコマンドを入力します。
WRKACTJOB

3. 〈Work With Active Jobs〉画面で、QEJBADV4サブシステムがリストに表示されることと、次の2つの従属ジョブがあることを確認します。
 - ・ QEJBADMIN
 - ・ QEJBMNTR
4. QEJBADMINジョブのオプション5を使用し、[Display Job Log (ジョブ・ログの表示)]にオプション10を使用します。ジョブが開始されたことを示す次のメッセージが表示されます。

WebSphere administration server QEJBADMIN ready

IBM HTTPサーバーの構成(V5R2)

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [IBM HTTPサーバーのADMINインスタンスの起動 - ページ \[23\]](#)
- ・ [新規HTTPサーバー構成の作成 - ページ \[24\]](#)
- ・ [新規HTTPサーバー・インスタンスの作成 - ページ \[24\]](#)
- ・ [iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスの起動 - ページ \[33\]](#)
- ・ [WebSphereアプリケーション・サーバーのテスト\(V5R2\) - ページ \[35\]](#)
- ・ [iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスの停止 - ページ \[36\]](#)

IBM HTTPサーバーのADMINインスタンスの起動

iSeries用IBM HTTPサーバーの[Configuration and Administration]フォームを使用して、IBM HTTPサーバーのインスタンス構成を作成、変更、または表示するには、iSeries用IBM HTTPサーバーのADMINインスタンスを起動する必要があります。IBM HTTPサーバーのADMINインスタンスを起動するには、次の2つの方法があります。

- ・ [手順 1 \[23\]](#)
- ・ [手順 2 \[23\]](#)

► HTTPサーバーのADMINインスタンスをiSeriesのコマンド行から起動するには

1. コマンド行に次のコマンドを入力します。

STRTCPSVR SERVER(*HTTP) HTTPSVR(*ADMIN)
2. [Enter]キーを押します。

► HTTPサーバーのADMINインスタンスを[Operations Navigator]から起動するには

[Operations Navigator (操作ナビゲータ)]は、ポイント&クリックによるiSeriesシステムへのグラフィカル・インターフェイスで、iSeries Access製品に付属しています。

1. [Operations Navigator]を起動します。
2. [Operations Navigator]のメイン・ツリー・ビューでiSeriesサーバーをダブルクリックします。
3. [Network (ネットワーク)]をダブルクリックします。

4. [Servers(サーバー)]をダブルクリックします。
5. [TCP/IP]をダブルクリックします。
6. 右ペインで[HTTP Administration(HTTPの管理)]を右クリックします。
7. ポップアップメニューで[Start(開始)]を選択します。

新規HTTPサーバー構成の作成

WebSphereアプリケーション・サーバーは、iSeries用IBM HTTPサーバーにプラグインします。IBM HTTPサーバーでは、特定のクライアント要求(サーブレット要求やJSPファイル要求など)が、処理のためにWebSphereにルーティングされます。IBM HTTPサーバーで要求を正しいWebSphereアプリケーション・サーバー・メソッドにルーティングするために必要な情報を含むように、新規HTTPサーバー構成を作成する必要があります。

新規IBM HTTPサーバー構成を作成するには、[Configuration]または[Administration]フォームを開きます。

► 新規HTTPサーバーを作成するには

1. JavaScript対応のブラウザを起動します。
2. URLのロケーションまたはアドレスを指定するウィンドウで、次のように入力します。

`http://<server_name>:2001`

<server_name>はiSeries Webサーバーのホスト名です。
3. [Enter]キーを押します。
4. iSeriesのユーザーIDとパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。iSeriesのユーザーIDには、*ALLOBJ権限と*IOSYSCFG権限が必要です。

[iSeries Tasks(iSeriesタスク)]ページが表示されます。
5. [IBM HTTP Server for AS/400]をクリックします。

[IBM HTTP Server for iSeries]ページが表示されます。
6. 左ペインで[Configuration and Administration]をクリックします。

[IBM HTTP Server for iSeries Configuration and Administration]ページが表示されます。

新規HTTPサーバー・インスタンスの作成

構成のインスタンスが動作するように、HTTPサーバー・インスタンスを作成する必要があります。

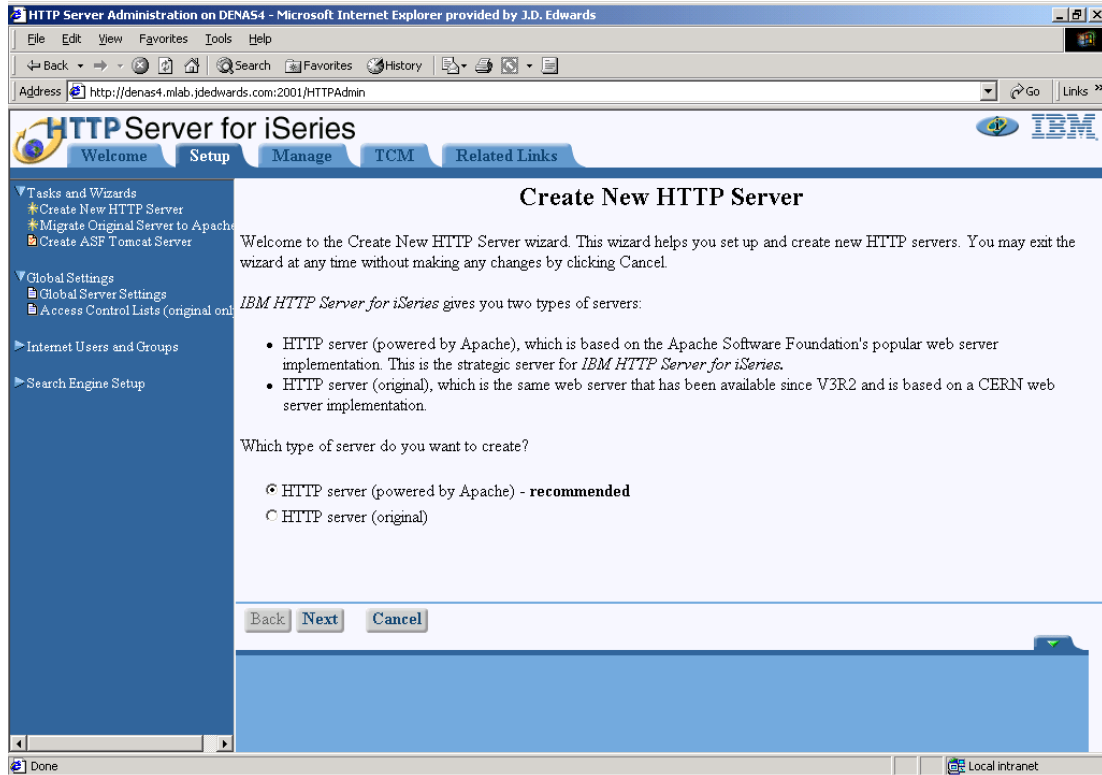
[IBM HTTP Server for iSeries Configuration]およびAdministrationフォームを使用して次のタスクを実行します。

- ・ [手順 4](#) [25]

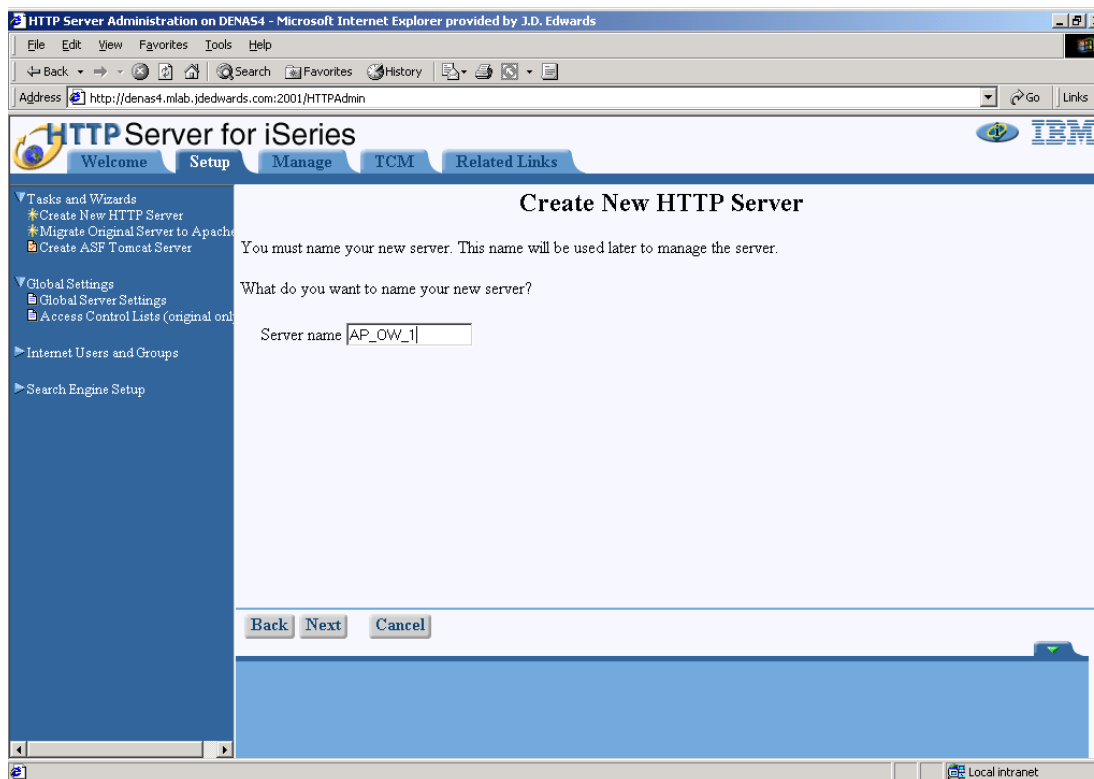
・ 手順 5 [29]

▶ HTTPサーバー・インスタンスを作成するには

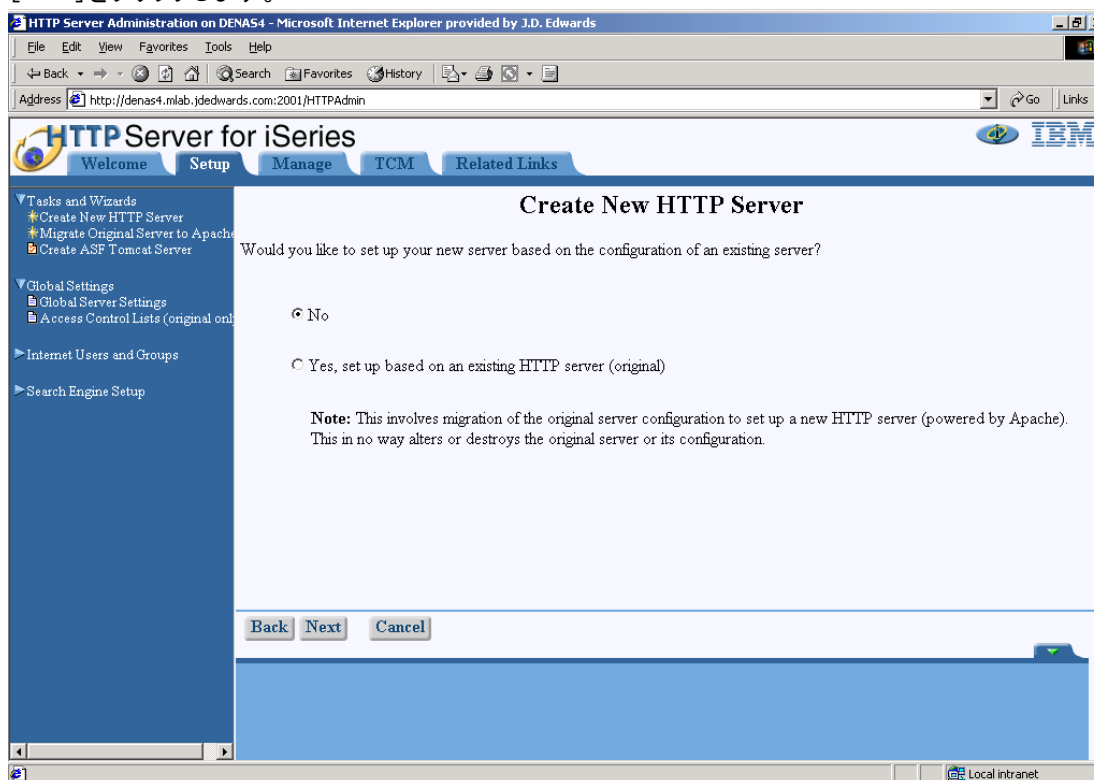
1. 画面上部の[Administration]リンクをクリックします。
2. 左フレームで[Create HTTP Server(HTTPサーバーの作成)]リンクをクリックします。右フレームに[Create HTTP Server]ページが表示されます。



3. 画面下部で[HTTP server (Powered by Apache)]を選択します。
4. [Next]をクリックします。



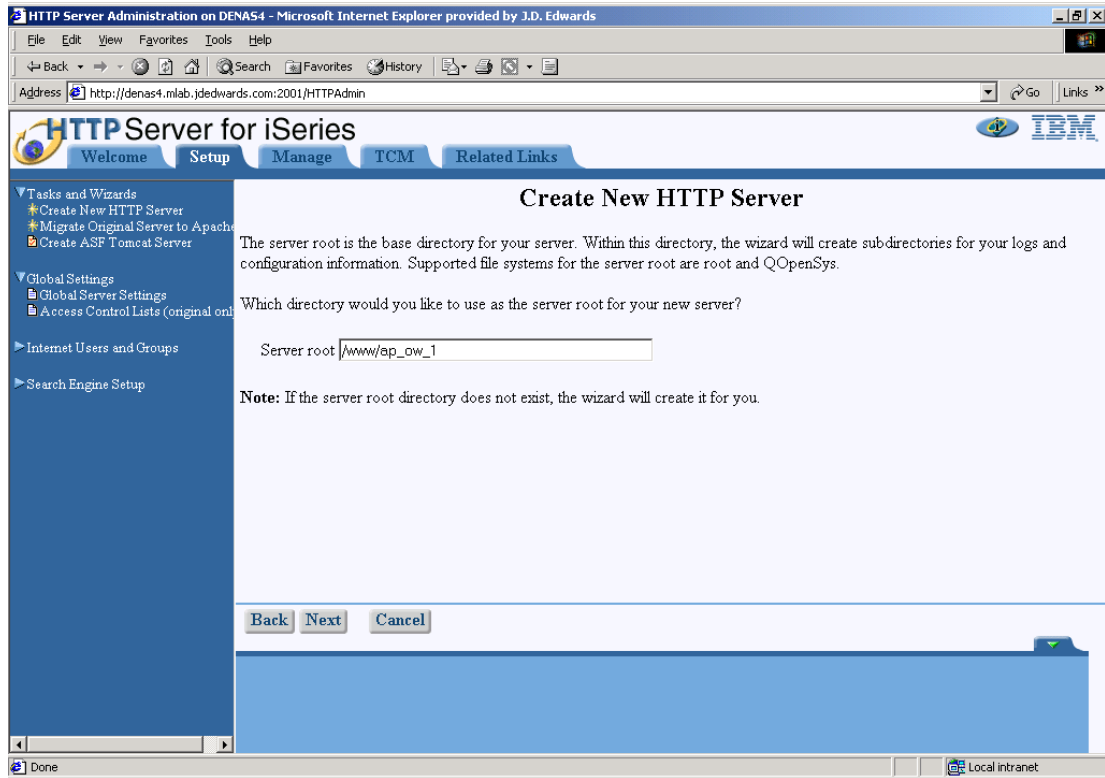
5. HTTPサーバー名を入力します。
6. [Next]をクリックします。



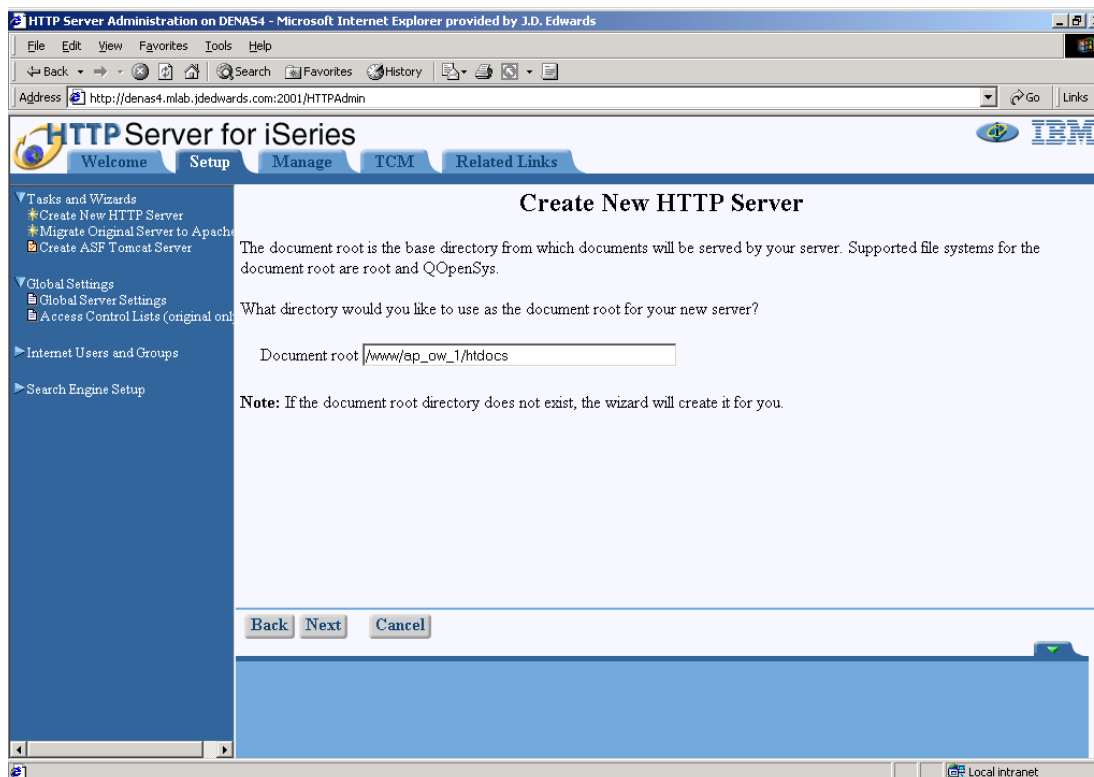
7. [No]をクリックします。

新規サーバーの基礎には既存の構成を使用しません。

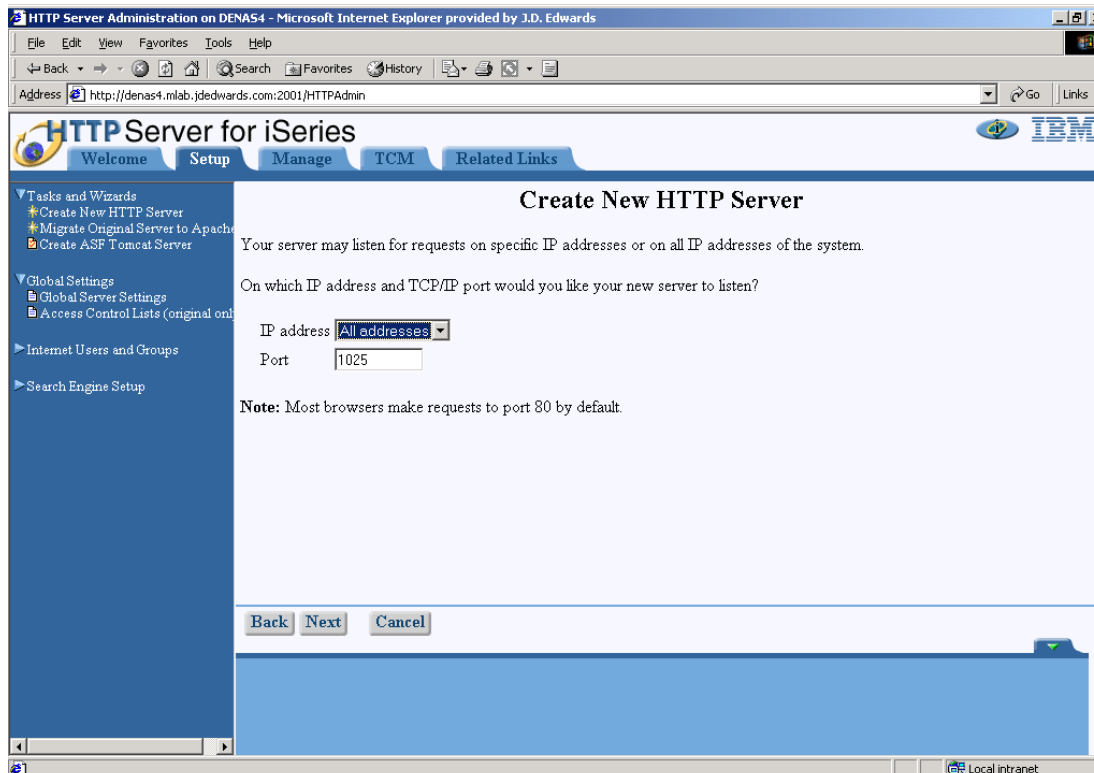
8. [Next]をクリックします。



9. デフォルトのサーバー・ルート・ディレクトリを受け入れて[Next]をクリックします。

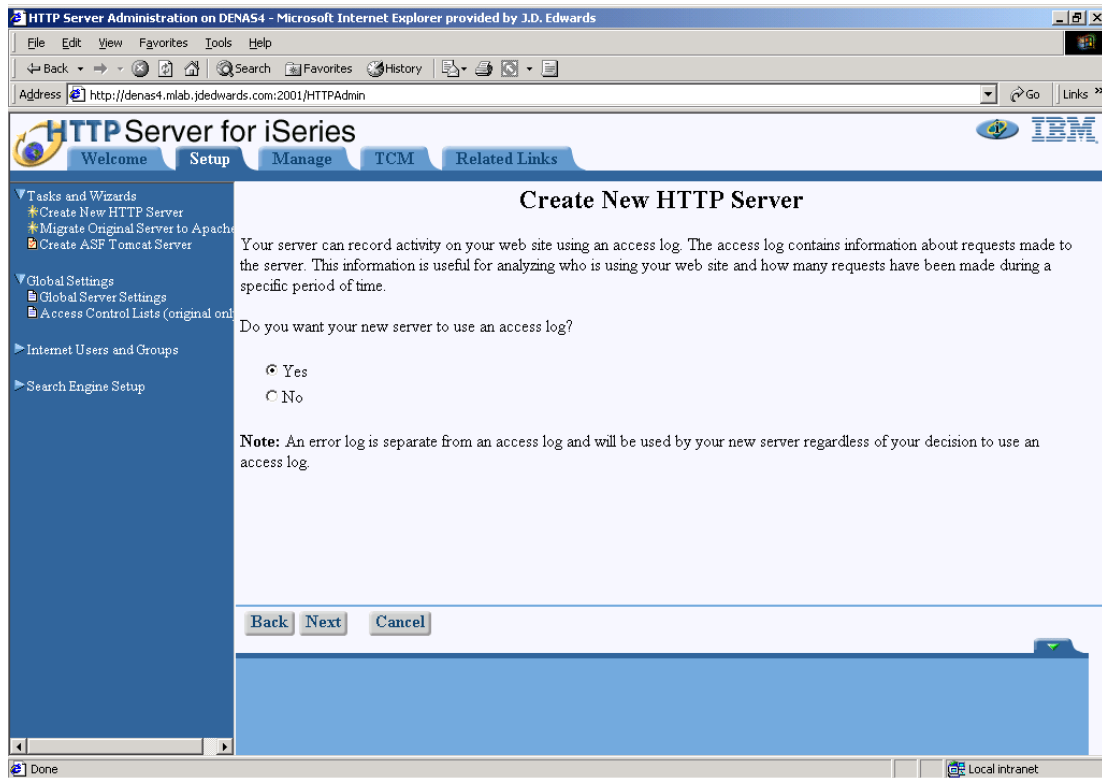


10. デフォルトのドキュメント・ルート・ディレクトリを受け入れて[Next]をクリックします。



11. HTTPサーバー用のポート番号(1025など)を入力します。

12. [Next]をクリックします。



13. デフォルト設定を受け入れ([Yes])、[Next]をクリックします。

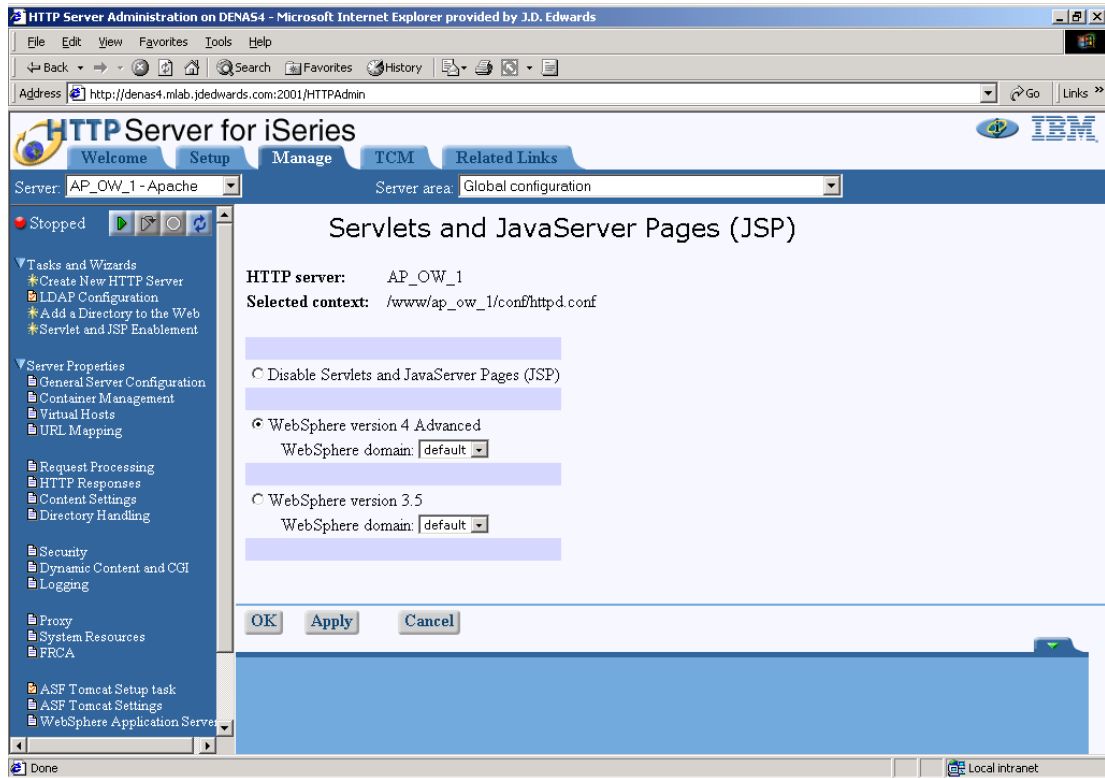
14. [Finish]をクリックします。

▶ 新規HTTPサーバー・インスタンスを構成するには

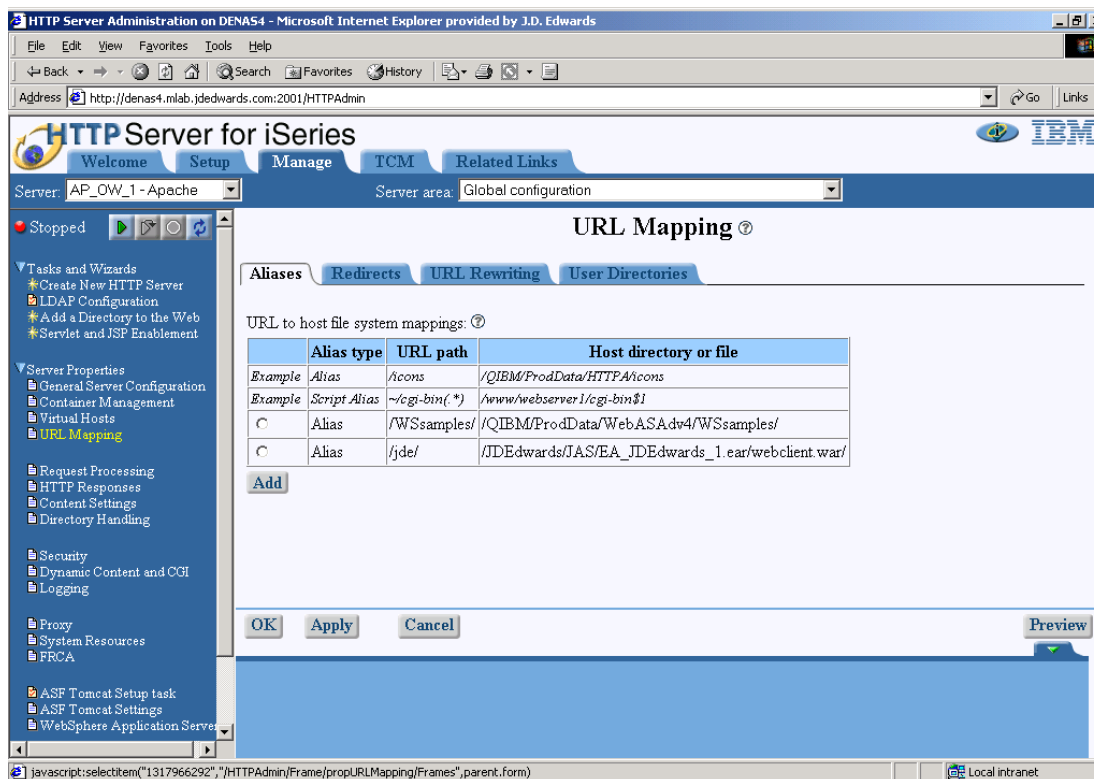
1. [Manage newly created server(新規作成したサーバーの管理)]をクリックします。
2. 左ペインで[WebSphere Application Server]リンクをクリックします。

注意

このリンクが表示されない場合は、スクロール・バーを使用して下方向にスクロールします。

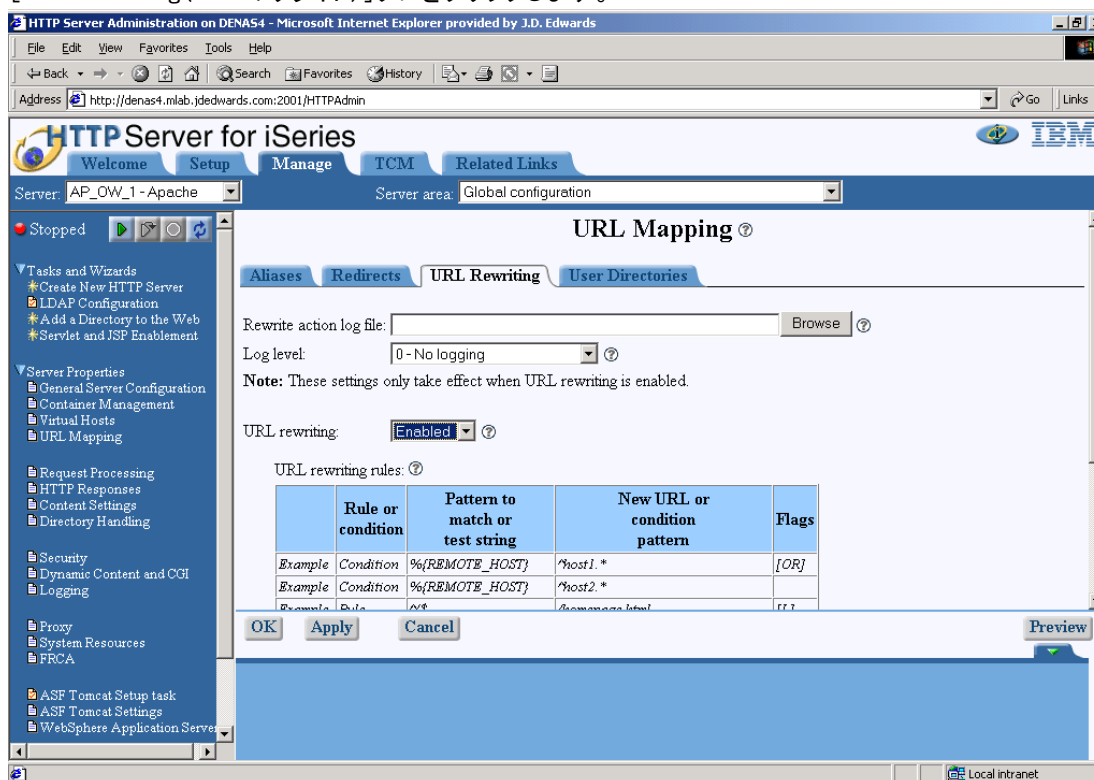


3. [WebSphere Version 4 Advanced]を選択します。
4. [Apply(適用)]をクリックします。
5. [OK]をクリックします。
6. 左ペインで[URL Mapping(URLマッピング)]を選択します。
7. [Add]をクリックします。
8. [URL Path(URLパス)]に"/jde/"と入力します。
9. [Host Directory or File(ホストのディレクトリまたはファイル)]に、webclientディレクトリへのパス(/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/ など)を入力します。



10. [Apply]をクリックします。

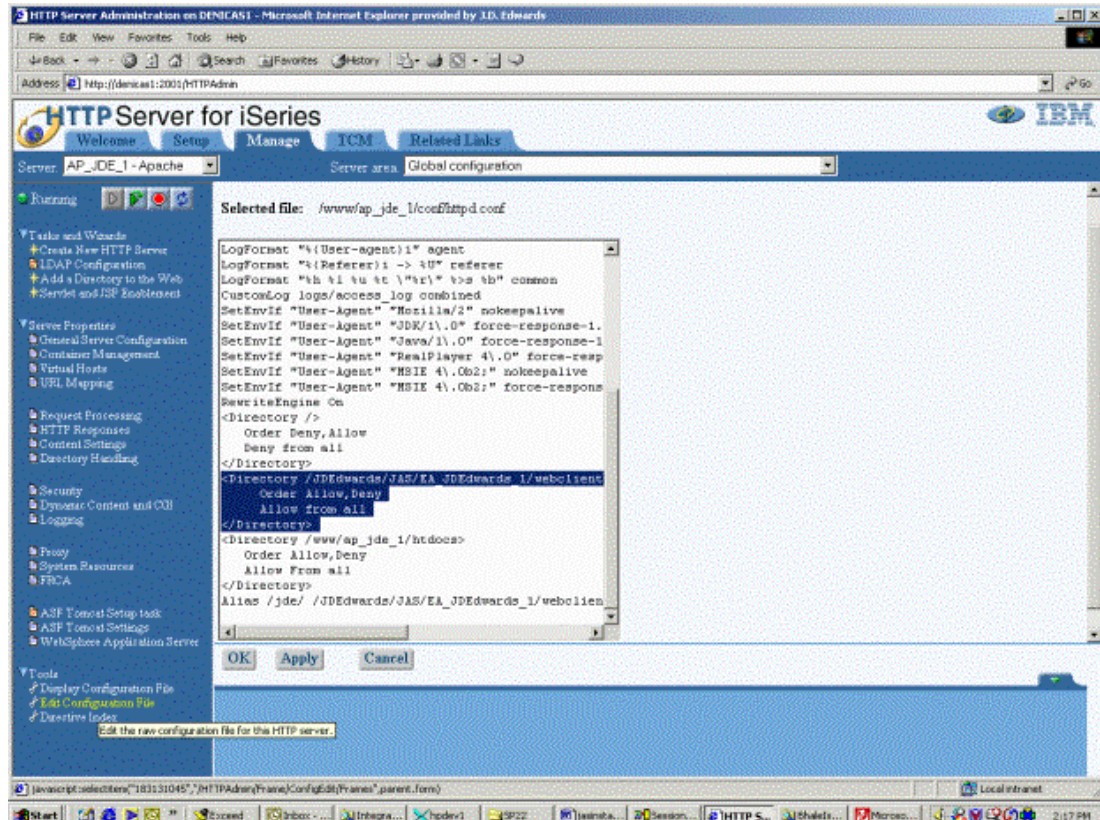
11. [URL Rewriting (URLのリライト)]タブをクリックします。



12. プルダウン・メニューから[Enabled(使用可能)]を選択します。
13. [Apply]をクリックします。
14. [OK]をクリックします。
15. 構成ファイルを編集して次のディレクティブを挿入します。

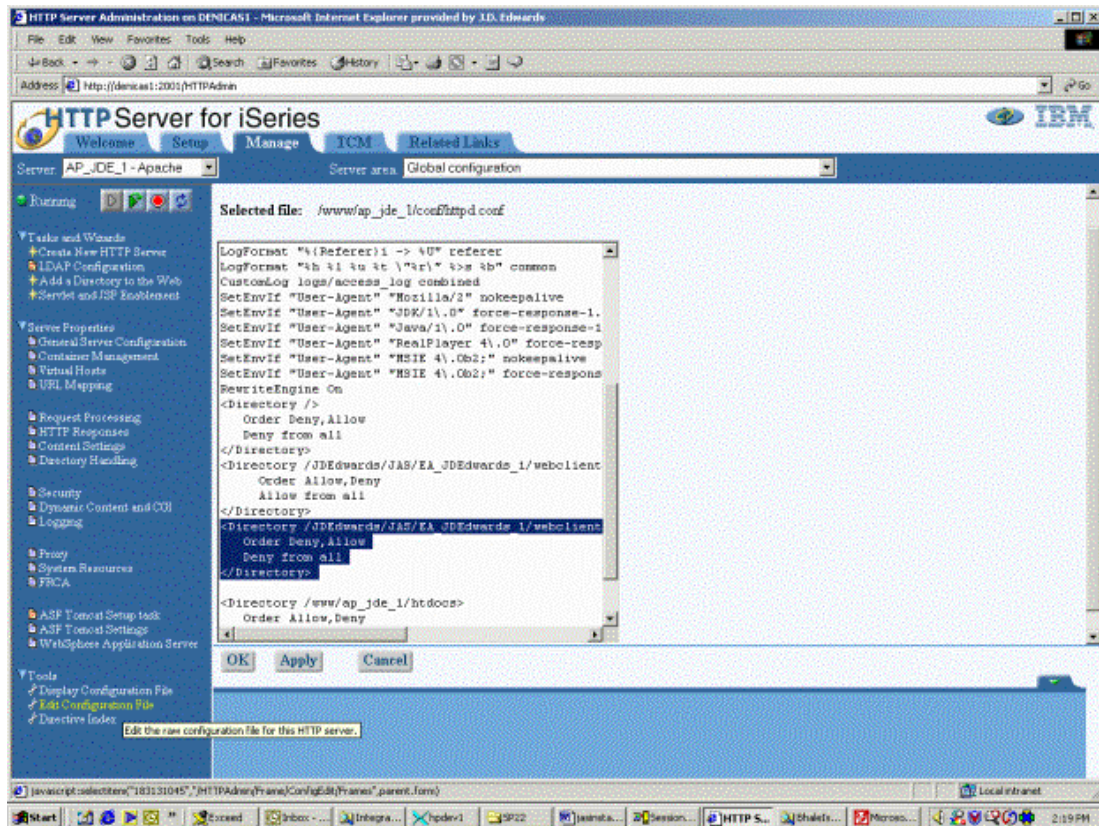
```
<Directory /JDEdwards/JAS/EA_JDEdwards_1.ear/webclient.war> Order Deny, Allow Allow from all </Directory>
```

このディレクティブは、webclient.warディレクトリへのアクセスを許可します。



16. 構成ファイルへを保護するために、構成ファイル内で上記のディレクティブの後に次のディレクティブを追加して、WEB-INFディレクトリへのアクセスを拒否することをお勧めします。

```
<Directory /JDEdwards/JAS/EA_JDEdwards_1.ear/webclient.war/WEB-INF>
Order Deny, Allow Deny from all
</Directory>
```

17. [Apply]をクリックします。

iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスの起動

iSeries用IBM HTTPサーバーはQHTTPSVRサブシステムで動作し、各HTTPサーバー・インスタンスにより複数のジョブが起動されます。iSeries用IBM HTTPサーバーにプラグインするWebSphereアプリケーション・サーバー・コードは、管理サーバーおよび1つまたは複数のアプリケーション・サーバーと通信するHTTPサーバー・ジョブで実行されます。

iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスを起動するには、次の2つの方法があります。

- ・ 手順 6 [33]
- ・ 手順 7 [34]

▶ iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスをコマンド行から起動するには

1. iSeriesのコマンド行から次のコマンドを入力します。

```
STRTCPSVR SERVER(*HTTP) HTTPSVR(MYINSTANCE)
```

MYINSTANCEはHTTPサーバー・インスタンス名です。この名称の構文は、次のように、このガイドの推奨命名規則に従う必要があります。

AP_OW_1

2. HTTPサーバー・インスタンス構成を変更した場合は、HTTPサーバー・インスタンスを停止してから再起動します。

► iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスを[iSeries Configuration]および Administrationフォームから起動するには

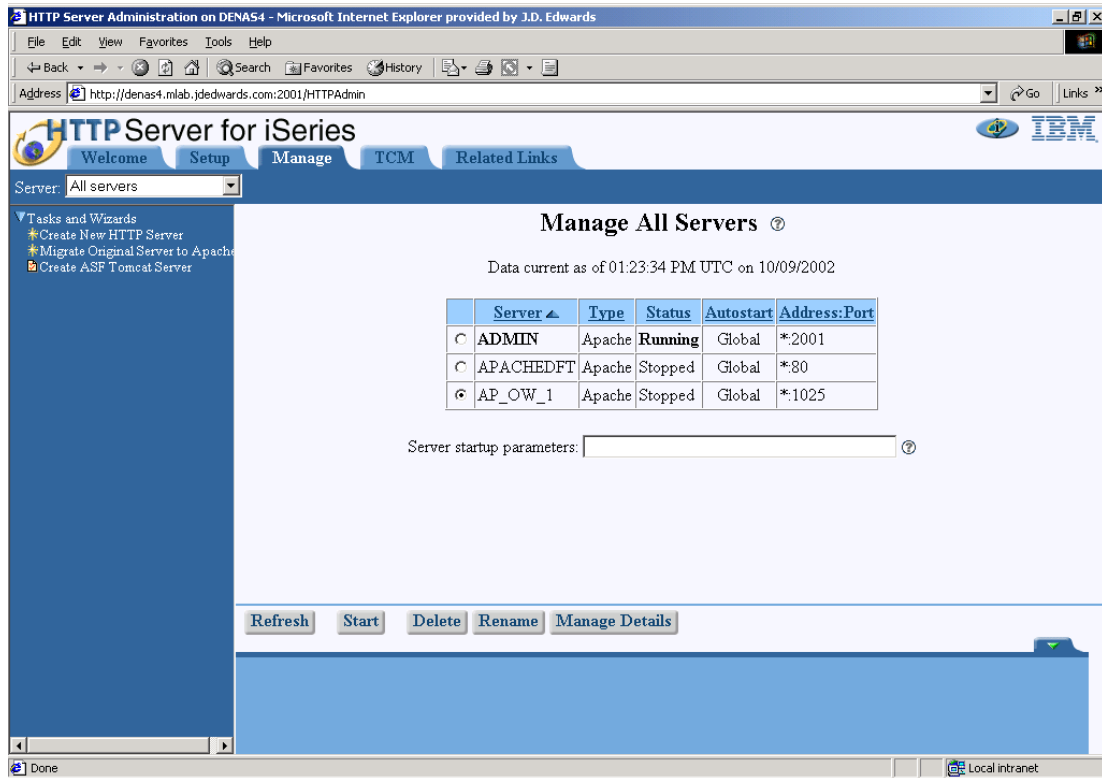
ConfigurationおよびAdministrationフォームを使用すると、HTTPサーバー・インスタンスを再起動するかどうかをオプションで指定できます。HTTPサーバーを再起動すると、[Basic]および[Security]構成フォームでの変更を除き、すべての構成変更が認識されます。

1. JavaScript対応のブラウザを起動します。
2. URLのロケーションまたはアドレスを指定するウィンドウで、次のように入力します。

http://<server_name>:2001

<server_name>はiSeriesシステムのホスト名です。

3. [Enter]キーを押します。
[iSeries Tasks]ページが表示されます。
4. [IBM HTTP Server for iSeries]をクリックします。
[IBM HTTP Server for iSeries]ページが表示されます。
5. 上部ペインで[Administration]をクリックします。
[Administration]ページが表示されます。
6. 左ペインで[Manage HTTP Servers]をクリックします。



7. 作成したサーバーの左側にあるラジオ・ボタンをクリックします。
8. [Start]をクリックします。

画面下部の[Message]ボックスに次のメッセージが表示されます。

HTTP server starting(HTTPサーバーを起動中。)

WebSphereアプリケーション・サーバーのテスト(V5R2)

► WebSphereアプリケーション・サーバーをテストするには(AE)

Webサーバー上で、

1. [WebSphere Administrative Console]を開きます。
2. [WebSphere Administrative Domain(WebSphere管理ドメイン)]のアイコンを展開します。
3. [Nodes(ノード)]アイコンを展開します。
4. サーバー・ホストのアイコンを展開します。
5. [Applications Servers(アプリケーション・サーバー)]アイコンを展開し、[Default Server(デフォルト・サーバー)]を選択します。
6. 画面上部の[Start]をクリックし、デフォルトのWebSphereアプリケーション・サーバーを起動します。

サーバーが正常に起動すると、次のメッセージが表示されます。

“Default server.start” completed successfully (“Default server.start”が正常に起動しました。)

7. 上記のメッセージが表示されない場合は、問題を解決してサーバーを再起動します。
8. クライアント・マシンで、ブラウザを開いて次のURLを入力します。

`http://servername/servlet/snoop`

servernameはWebサーバー名です。

要求したURLと、各種ブラウザからサーバーへの通信情報も表示されます。

9. [WebSphere Administrative Console]で、デフォルト・サーバーを停止します。
10. 各エイリアス・エントリで、デフォルト・ホストのエイリアスをポート8000に変更します。

iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスの停止

HTTPサーバー・インスタンス構成を変更した場合は、HTTPサーバー・インスタンスを停止してから再起動します。

iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスを停止するには、次の2つの方法があります。

- ・ [手順 9](#) [36]
- ・ [手順 10](#) [36]

► iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスをコマンド行から停止するには

- ・ iSeriesのコマンド行で次のように入力します。

`ENDTCPSVR SERVER(*HTTP) HTTPSVR(MYINSTANCE)`

MYINSTANCEはHTTPサーバー・インスタンス名です。

► iSeries用IBM HTTPサーバー・インスタンスを[iSeries Configuration]および Administrationフォームから停止するには

1. JavaScript対応のブラウザを起動します。
2. URLのロケーションまたはアドレスを指定するウィンドウで、次のように入力します。

`http://<server_name>:2001`

<server_name>はiSeriesシステムのホスト名です。

3. [Enter]キーを押します。

iSeriesのユーザーIDとパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。iSeriesのユーザーIDには、*ALLOBJ権限が必要です。

[iSeries Tasks]ページが表示されます。

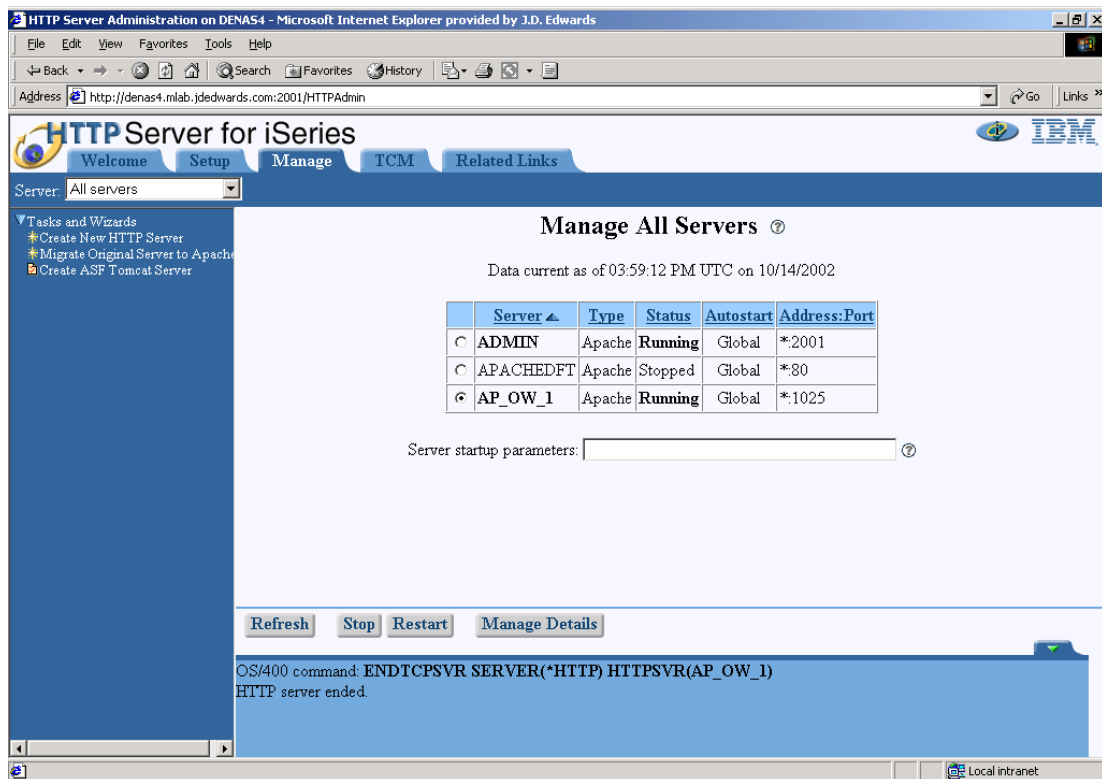
4. [IBM HTTP Server for AS/400]をクリックします。

[IBM HTTP Server for iSeries]ページが表示されます。

5. 上部ペインで[Administration]をクリックします。

[Administration]ページが表示されます。

6. 左フレームで[Manage HTTP Servers]をクリックします。



7. 作成したサーバーの左側にあるラジオ・ボタンをクリックします。

8. [Stop(停止)]を選択します。

画面下部の[Message]ボックスに次のメッセージが表示されます。

HTTP server ended.(HTTPサーバーを終了しました。)

Webサーバーのインストールと構成

ここでは、J.D. Edwardsインストール・プログラム（JASインストーラ）を使用して、Webサーバーをインストールし、WebSphereでWebサーバーのインスタンスを構成し、jas.iniファイルを構成します。

このインストール用に用意されているJava Server CDを使用して、Webサーバー・コードをインストールします。

次のタスクを実行して、Webサーバーと関連ソフトウェアをインストールします。

- ・ [Webサーバーのインストール – ページ \[39\]](#)
- ・ [OneWorld/ERPインストール・プランへのWebサーバーの追加 – ページ \[45\]](#)
- ・ [スタティック・ファイルの処理の構成 – ページ \[46\]](#)
- ・ [JASログの構成 – ページ \[47\]](#)

はじめる前に

- ・ WebSphere Adminのポート番号を900（デフォルト）以外の値に変更した場合は、Javaサーバーをインストールする前に元の900に戻す必要があります。元のポート番号に戻さないと、インストール・プロセスが失敗します。このプロセスの完了後に、ポート番号をカスタマイズした値に変更できます。

Webサーバーのインストール

J.D. Edwards Javaアプリケーション・サーバーをコンピュータにインストールするには、lodrunコマンドから[InstallShield]ウィザードを使用します。

► Webサーバーをインストールするには

1. WebSphereが実行されていることを確認します。
 - ・ WebSphereを起動するには、「WebSphereの起動」を参照してください。
 - ・ WebSphereが実行されていることを確認するには、「WebSphereアプリケーション・サーバーのテスト(V5R2)」を参照してください。
2. QSECOFR権限を使用してIBM iSeriesにログオンします。この権限により、すべてのコンポーネントが正常にインストールされます。
3. J.D. Edwards Java Installation CDをCD ROMドライブに挿入するか、Knowledge Gardenの[Update Center(アップデート・センター)]からプラットフォーム固有のWebサーバー・インストール・ソフトウェアをダウンロードします。

4. ソフトウェアを[Update Center]からダウンロードした場合は、次の手順でソフトウェアをiSeriesマシンにFTPします。

- a. iSeries Webサーバー上で、次のコマンドを入力します。

```
CRTSAVF qgpl/qtemp
```

- b. ソフトウェアをダウンロードするWindowsマシン上で[コマンド プロンプト]ウィンドウを開いて次のコマンドを入力し、ファイル転送プロトコル(FTP)セッションを開いてiSeries Webサーバーに接続します。

```
x:¥>ftp webServerName
```

webServerNameはiSeries Webサーバー名です。

- c. 次のプロンプトから"qsecofr"と入力します。

```
User webServerName:<none>:qsecofr
```

- d. パスワードを入力します。

- e. 次のコマンドを入力します。

```
bin
```

```
quote site namefmt 1
```

```
put downloadPath webSetupDirectory
```

downloadPathはWindowsマシン上のjarファイルへのパス、webSetupDirectoryはsetup.jarファイルを置くiSeries Webサーバー上のパスです。

```
quit
```

- f. 次のコマンドを入力してソフトウェアをiSeriesマシンにFTPLします。

```
x:¥>ftp webServerName
```

- g. 次のプロンプトから"qsecofr"と入力します。

```
User webServerName:<none>:qsecofr
```

- h. パスワードを入力します。

- i. 次のコマンドを入力します。

```
bin
```

```
put downloadPath qgpl/qtemp
```

```
quit
```

- j. AS/400のコマンド行に次のコマンドを入力します。

```
RSTOBJ OBJ(QINSTAPP) SAVLIB(QTEMP) DEV(*SAVF) SAVF(qgpl/qtemp)
```


5. Webサーバーから次のコマンドを入力します。

```
cd /
```

6. Webサーバーから次の関連コマンドを入力します。

- ・ システムのデフォルトJDKのリリースが1.2より前の場合は、次のように入力します。

```
RUNJAVA CLASS(run) PARM('-console')
```

```
CLASSPATH('/QIBM/ProdData/Java400/jt400ntv.jar:webSetupDirectory/setup.jar') PROP((java.version 1.3))
```

webSetupDirectoryは、setup.jarファイルを置くiSeries Webサーバー上のパス(/tmpなど)です。

注意

上記のコマンドを入力した場合は、下記のコマンドを実行しないでください。

- ・ CD-ROMからインストールする場合は、次のコマンドを入力します。

```
LODRUN device_name
```

device_nameはインストール・ソフトウェアをダウンロードしたCD-ROMドライブまたはディレクトリの名称です(たとえば、“lodrun opt011”と入力します)。

- ・ [Update Center]からインストールする場合は、次のコマンドを入力します。

```
CALL QINSTAPP '/webSetupDirectory'
```

注意

webSetupDirectoryの指定にはsetup.jarファイルを含めないでください。

注意

このコマンドを入力すると、J.D. Edwards Installerプログラムによるロードが完了するまでに数分かかることがあります。その間に、[Java Shell Display (Java Shell表示)]コンソールが表示され、最初はブランクの画面が表示されます。

プログラムが起動すると初期メッセージが表示されます。

7. [Enter]キーを押します。

[WebSphere Setup (WebSphereのセットアップ)]に、WebSphereのデフォルトのインストール・ディレクトリ(<WAS_HOME>)が表示されます。

```
/QIBM/ProdData/WebASAdv4
```

8. デフォルト・パス以外のディレクトリにWebSphereをインストールした場合は、そのパスを入力します。

9. [Enter]キーを押します。

Webサーバーのデフォルトのインストール・パスが表示されます。

/JDEdwards/JAS

10. J.D. Edwards Javaサーバーを別のディレクトリにインストールする場合は、新規のパスを入力します。

11. [Enter]キーを押します。

[WebSphere Configuration (WebSphere構成)] セクションに、WebSphereでJavaサーバーをセットアップするために必要なデフォルト設定が表示されます。

12. 項目ごとに、[Enter]キーを押してデフォルト値を受け入れるか、新規の値を入力して[Enter]キーを押します。

[WebSphere Configuration]のほとんどの設定フィールドは、デフォルトで正しい値に設定されます。ただし、次のフィールド記述を検討し、必要に応じてフィールド値を確認または変更できます。

- ・ [Node Name (ノード名)] :

[WebSphere Administrative Console]に表示されるとおりのマシン名を使用します。このマシン名が正しいかどうかを確認するには、[WebSphere Administrative Console]を開き、[WebSphere Administrative Domain]を展開して、[Nodes]アイコンの下にあるマシン名を確認します。この値は大文字と小文字が区別されることに注意してください。

- ・ [HTTP Port (HTTPポート)] : デフォルト・ポート(80)の場合は、J.D. Edwardsアプリケーション・サーバー(AS_JDEdwards)がデフォルトのホストに関連付けられ、J.D. Edwards構成の一部として新規仮想ホストは作成されません。

J.D. Edwards Javaサーバー用に別の仮想ホストをセットアップする場合は、この値を別のポート番号(1025など)に変更します。値を変更すると、J.D. Edwards WebSphere構成をデフォルト構成から変更できるので、WebSphereのパフォーマンスを向上できる可能性があります。

- ・ [NLS Encoding (NLSエンコード)] : Javaサーバーに英語以外の言語をインストールする場合は、その言語を選択します。

ページを上へスクロールすると、その他の値が表示されます。

他のWebSphere設定の多くは、ユーザーが入力しなくてもインストーラにより自動的に構成されます。

13. 残りの設定では、jdbj.iniファイル内の重要な設定を構成します。[Database System Settings (データベース・システム設定)] セクションには、jdbj.iniファイルの[JDBj BOOTSTRAP SESSION]セクションの重要な設定が含まれます。これらの設定は、OneWorld/ERPデータベース・サーバー上のOneWorld/ERPデータベースへの接続を定義します。詳しくは、「[JDBj-BOOTSTRAP SESSION]」を参照してください。これらの設定については、CNC管理者に問い合わせるか、OneWorld/ERPのインストール・ガイドを参照してください。

これらのフィールドのほとんどは、デフォルトで正しい値に設定されます。

ヒント

このインストール・プロセス中に、jas.iniファイルまたはjdbj.iniファイルの設定のどちらかに間違っ
た値を入力した場合は、該当するファイルを開いて設定を手作業で編集できます。これらのファ
イルの各設定については、「Appendix A: jas.iniファイルのパラメータと値」を参照してください。

次のフィールドを確認し、必要に応じて変更します。

項目ごとに、[Enter]キーを押してデフォルト値を受け入れるか、新規の値を入力して[Enter]キーを
押します。

- ・ [Database Type(データベース・タイプ)]:

(デフォルト値は無視してください。新規の値を入力すると、[Database Type]が自動的に再設定
されます)。

- ・ Oracleの場合: 1
- ・ MS SQLの場合: 2
- ・ UDB/DB2の場合: 3
- ・ iSeries (DB2)の場合: 4

データベースがiSeries Webサーバー上にある場合は、“4”を選択します。

- ・ [Default User(デフォルト・ユーザー)]: “JDE”
- ・ [Default Environment(デフォルト環境)]: デフォルト環境を入力します (DV9など)。
- ・ [Base Datasource(基本データ・ソース)]: “System - B9”
- ・ [Object Owner(オブジェクト所有者)]: “SY9”

注意

このフィールドが表示されるのは、Oracle、SQL、UDBデータベースをインストールする場合のみ
です。

- ・ [OCM Server(OCMサーバー)]:

OCMテーブルが格納されているサーバーの名称。通常はエンタープライズ・サーバーまたはデ
ータベース・サーバーです。このフィールドには、jdbj.iniファイルの[JDBj-BOOTSTRAP DATA
SOURCE]セクションのServer=設定が自動入力されます。

- ・ [Database(データベース)]: iSeriesの場合は、デフォルトを受け入れます。
- ・ [Library Name(ライブラリ名)]: AS/400上で実行している場合は、OCMマッピングを含むライ
ブラリをライブラリ名を入力します。通常、ライブラリ名はSY9です。

- ・ [Database User Role(データベース・ユーザー・ロール)]:*ALL

[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]の値については、「Appendix A: jas.iniファイルのパラメータと値」の「[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]」を参照してください。

14. [Environment Settings(環境設定)]セクションには、jas.iniファイルの各セクションの重要な設定が表示されます。これらの値は、JASサーバーの構成(使用するパス・コード、接続先となるエンタープライズ・サーバーなど)を定義します。

項目ごとに、[Enter]キーを押してデフォルト値を受け入れるか、新規の値を入力して[Enter]キーを押します。

次のフィールドを確認し、必要に応じて変更します。

正しい値が不明な場合、詳しくはOneWorld/ERPのインストール・ガイドを参照してください。[Environment Settings]の値については、「Appendix A: jas.iniファイルのパラメータと値」を参照してください。これらのフィールドのほとんどは、デフォルトで正しい値に設定されます。

- ・ [Enterprise Server Platform(エンタープライズ・サーバーのプラットフォーム)]:エンタープライズ・サーバーのプラットフォームを選択します。
 - ・ Windowsの場合: 1
 - ・ UNIXの場合: 2
 - ・ iSeriesの場合: 3
- ・ [Enterprise Server Name(エンタープライズ・サーバー名)]:エンタープライズ・サーバー名を入力します。
- ・ [Default Environment]:ステップ [ステップ 13](#) [42]でデフォルト環境に使用したのと同じ値(DV9など)を使用します。
- ・ [Enterprise Server Port(エンタープライズ・サーバーのポート)]:"6011"
- ・ [UBE Queue(UBE待ち行列)]:QB9
- ・ [Temporary File Directory(一時ファイル・ディレクトリ)]:デフォルトでローカル・ドライブの標準一時フォルダに設定されます。

この値を、システム上で有効な一時ディレクトリに変更してください。

15. 検証画面で情報を慎重にチェックし、入力値が正しいかどうかを確認します。
16. [Enter]キーを押します。

J.D. Edwards Javaアプリケーション・サーバーのインストールが開始されます。このプロセスは、完了までに数分かかることがあります。

17. インストールの完了後に[Enter]キーを押します。

18. 「Java Program Completed (Javaプログラムが完了しました)」と表示されるまで待ってから、プログラムを終了します。

OneWorld/ERPインストール・プランへのWebサーバーの追加

WebサーバーでOneWorld/ERPと通信するには、JavaサーバーをOneWorld/ERPインストール・プランに追加し、OneWorld/ERP環境の一部として定義する必要があります。次の手順に従って、OneWorld/ERPのインストール・ガイドまたはアップグレード・ガイドの2つの章の作業を完了してください。

► OneWorld/ERPインストール・プランにJavaサーバーを追加するには

デプロイメント・サーバー上で、次の手順で操作します。

1. OneWorld/ERPインストール(アップグレード)・ガイドの「既存構成へのサーバーの追加」の章に記載されているタスクを開始します。

OneWorld/ERP™のプランナ環境にユーザーJDEとしてサインオンし、〈システム・インストール・ツール〉メニュー(GH961)で[アドオン・サーバー・プラン]をダブルクリックします。OneWorld/ERPのインストール/アップグレード・ガイドに記載されている指示に従ってプランを定義します。

2. 〈アドオン・サーバー・プラン - [サーバーの追加]〉画面で、[JASサーバー]オプションを選択して[OK]をクリックします。
3. [OK]をクリックします。
4. 〈アドオン・サーバー・プラン - [JASサーバーの改訂]〉で、次のフィールドに値を入力します。

- ・ [マシン名]:

JASサーバー名

- ・ 記述

JASサーバーの記述

- ・ [リリースNo.]: "B9"

- ・ [ホスト・タイプ]:

10

- ・ [基本ユーザー]:

"JDE"

- ・ [インストール・パス]:

JASサーバー上の¥jasディレクトリへのパス。たとえば、x:¥Program Files¥JDEdwards¥JASです。

5. [OK]をクリックします。

6. <アドオン・サーバー・プラン - [環境の選択]>画面が表示されるまで、各画面に値を入力します。
7. <アドオン・サーバー・プラン - [環境の選択]>画面で、J環境を選択します(たとえば、JTS9 xまたはJPY9を使用します)。
8. デフォルトのデータ・ソースを受け入れます。
9. プランに追加する他のすべてのJ環境について、上記のステップを繰り返します。
10. 「インストール・プランの確定」の章の次の手順を完了します。
11. <インストール計画の処理>で[検索]をクリックし、新規プランを展開してエンタープライズ・サーバーをクリックします。
12. [追加]をクリックします。
13. <エンタープライズ・サーバー>で、[選択]をクリックします。
14. <アドオン・サーバー・プラン - [マシンの検索]>で、Javaオブジェクトを格納するエンタープライズ・サーバーを選択して[選択]をクリックします。
15. <アドオン・サーバー・プラン - [エンタープライズ・サーバーの改訂]>で、[フォーム]メニューの環境をクリックします。
16. <アドオン・サーバー・プラン - [マシン環境の改訂]>で、空のローの[環境]フィールドをクリックし、ビジュアル・アシスト・ボタンをクリックします。
17. <アドオン・サーバー・プラン - [環境の検索]>で、環境を選択して[選択]をクリックします。
18. インストールしたすべての環境について、上記のステップを繰り返します。
19. <アドオン・サーバー・プラン - [マシン環境の改訂]>で[OK]をクリックします。
20. <アドオン・サーバー・プラン - [エンタープライズ・サーバーの改訂]>で[OK]をクリックします。
21. デフォルトのデータ・ソースを受け入れて、残りの画面に情報を入力します。
プランへの追加が確定されます。
22. OneWorld/ERPインストール(またはアップグレード)・ガイドの「インストール・ワークベンチ」セクションの操作を実行し、OneWorld/ERPでJavaサーバーを構成します。

スタティック・ファイルの処理の構成

デフォルトでは、Webサーバー用のスタティック・ファイルはすべてHTTPサーバーで処理されます。このため、HTTPサーバーからすべてのスタティック・ファイルにアクセスできる必要があります。この設定を構成するには、IBM HTTPサーバーのhttpd.confファイルのAliasディレクティブを使用するか、またはVirtual Directory for IISを使用します。この構成は、ほとんどの場合に適合します。これにより通信量が減少し、水平複製処理についてはHTTPサーバーとWebSphere™間のネットワーク・トラフィックが減少します。また、一般にHTTPサーバーの場合、スタティック・ファイルの処理効率が向上します。

2番目のオプションは、WebSphereファイル処理サブリットを有効化してスタティック・ファイルを処理することです。Webサーバーのスタティック・ファイルをWebサーバー・マシンに格納できず、HTTPサーバーからネットワーク経由でスタティック・ファイルにアクセスしたくない場合は、この方法が必要になることがあります。

次のどちらかのタスクを実行して、スタティック・ファイルを構成します。

- ・ **手順 3** [47]

このタスクは、WebSphereファイル処理サーブレットを無効化し、すべてのスタティック・ファイルをHTTPサーバーで処理できるようにします。

- ・ **手順 4** [47]

このタスクは、WebSphereファイル処理サーブレットを有効化し、HTTPサーバーに代わってスタティック・ファイルを処理できるようにします。

► ファイル・サーブレットを無効化するには

1. テキスト・エディタでibm-web-ext.xmiファイルを開きます。
このファイルは次のディレクトリにあります。
`/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war¥WEB-INF`
2. fileServingEnabledプロパティをfileServingEnabled="false"に変更して、ファイル・サーブレット・オプションを無効にします。
- 3.
4. HTTPサーバー上でプラグインを再生成し、HTTPサーバーを再起動します。

► ファイル・サーブレットを有効化するには

1. テキスト・エディタでibm-web-ext.xmiファイルを開きます。
このファイルは次のディレクトリにあります。
`/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war¥WEB-INF`
2. fileServingEnabledプロパティをfileServingEnabled="true"に変更して、ファイル・サーブレット・オプションを有効にします。
3. デフォルト・ページindex.htmlをセットアップするには、webclient.war¥WEB-INFディレクトリにあるweb.xmlファイルを開き、最終行(</web-app>タグを含む行)の真上に次のセクションを追加します。

```
<welcome-file-list> <welcome-file>index.html</welcome-file> </welcome-file-list>
```

注意

これらのタグを追加するのは、ファイルに存在しない場合のみです。

4. HTTPサーバー上でプラグインを再生成し、HTTPサーバーを再起動します。

JASログの構成

B9以降のJASでは、新規のログAPIを使用してJASプロセスがモニタリングされ、情報がログ・ファイルに書き込まれます。この新規ログ・プロセスでは、jdelog.propertiesファイルを使用してログ・ファイルの位置が指定され、ログ・パラメータが設定されます。新規ログ・プロセスを有効にするには、jdelog.propertiesを含むディレクトリをclasspathに指定します。

注意

このディレクトリは、J.D. Edwards ERPソフトウェアのインストール時にclasspathに自動的に指定されます。

次にサンプルjdelog.propertiesファイルを示します。

サンプルjdelog.propertiesファイル

```
# This is a sample configuration file for root configuration

jdelog.rootLogger=DEBUG,JDELOG,JASLOG
jdelog.loggerFactory=com.jdedwards.base.logging.log4j.JdeLoggerFactory
jdelog.reloadInterval=60❶

# These are the settings for file handlers.
jdelog.handler.JDELOG=com.jdedwards.base.logging.log4j.FileHandler ❷
jdelog.handler.JDELOG.File=¥¥jderoot.log❸
jdelog.handler.JDELOG.Level=ERROR❹
jdelog.handler.JDELOG.Append=TRUE❺
jdelog.handler.JDELOG.MaxBackupIndex=1❻
jdelog.handler.JDELOG.MaxFileSize=10MB❼
jdelog.handler.JDELOG.format=com.jdedwards.base.logging.log4j.DefaultFormat❽

# These are the settings for file handlers.
jdelog.handler.JASLOG=com.jdedwards.base.logging.log4j.FileHandler
jdelog.handler.JASLOG.File=¥¥jas.log jdelog.handler.JASLOG.Level=ERROR
jdelog.handler.JASLOG.Append=TRUE jdelog.handler.JASLOG.MaxBackupIndex=1
jdelog.handler.JASLOG.MaxFileSize=10MB
jdelog.handler.JASLOG.format=com.jdedwards.base.logging.log4j.DefaultFormat

#This is added for debug logging.Please uncomment following to start debug.
#jdelog.Debug=DEBUG, jasdebug
#jdelog.handler.jasdebug=com.jdedwards.base.logging.log4j.FileHandler
#jdelog.handler.jasdebug.File=¥¥jasdebug.log
#jdelog.handler.jasdebug.Level=DEBUG
```

上記のサンプルは、3つのログ・ファイル、jde.log、jas.logおよびjasdebug.logのパラメータ設定を示します。次のリストに、jde.logファイルの各パラメータを示します。JDELOGはハンドラ名です。この名前はどのような名前でもかまいませんが、ロガー、ルート、またはユーザーに与えられたハンドラ名と一致する必要があります。

この説明を参考にして各ログ・ファイルのパラメータを修正してください。

- ❶ Webサーバーによりjdelog.propertiesファイルが再ロードされる間隔を定義します。

jdelog.propertiesファイルの修正後にシステムで構成設定が更新される際の所要時間を決定するグ

ローバル・パラメータです。デフォルト値は60(秒)です。この値を修正して異なる間隔を指定できます。

ヒント

値を0(ゼロ)に変更すると、更新後のパラメータは再ロードされません。

- ③ ルートのファイル・ハンドラ設定を定義します。
- ③ ファイルの位置と名前を定義します。

このパスを修正してログ・ファイルのディレクトリを指定する必要があります。現行のWebSphere基本ディレクトリへの相対パスを指定してください(/WebSphere/AppServerなど)。

注意

パスの入力時には、ファイル・パスの指定に2つのバックスラッシュ¥¥を使用します。または、代わりに1つのスラッシュ/を使用してもかまいません。ファイル・パスの指定には1つのみのバックスラッシュ¥¥を使用しないでください。

- ④ ハンドラのログ・レベルを定義します。
- ④ アプリケーションの再起動時に、新規ログ情報を既存のファイルに追加するかどうかを定義します。
- ④ ログ・ファイルのサイズが次に指定するMaxFileSizeよりも大きくなった場合に、システムで作成されるバックアップ・ファイルの数を定義します。
- ⑦ ログ・ファイルの最大サイズを定義します。
- ⑧ メッセージ・ログのフォーマットを定義します。

2) このコンソール・ハンドラ構成を次に示します。

注意

jdelog.propertiesファイルの最後にステートメントを追加すると、ログの出力先をWebSphereエラー・ログ・ファイル(stderr.txt)または[WebSphere Administrative Console]の最下部にあるコンソールに変更できます(この場合も、出力はstd.outファイルに送られます)。

- ・ 出力先をWebSphereコンソールにするには、jdelog.propertiesファイルに次のステートメントを追加します。
- ・ 出力先をWebSphereのstderr.txtファイルに変更するには、太字で示したSystem.outのテキストをSystem.errに置き換えます。

```
#These are the settings for console handler (or System.err)
jdelog.handler.JDELOG=com.jdedwards.base.logging.log4j.ConsoleHandler
#This specifies where your output goes.
jdelog.handler.JDELOG.Out=System.out
#This specifies the level for the handler.
jdelog.handler.JDELOG.Level=ERROR
```


OneWorld/ERPのシリアル化オブジェクトの生成

Webサーバーを実行するには、サーバーにOneWorld/ERP™の一連のシリアル化JASオブジェクトへのアクセス権が必要です。これらのオブジェクトは、該当するOneWorld/ERPスペック・セットを使用してOneWorld/ERP™オブジェクトから直接生成する方法と、OneWorld/ERP™のインストール時にテーブル(F989998、F989999、F98BLOB)に自動的にロードされる事前生成済みの一連のプリスティン(JDEオリジナル)オブジェクトから派生させる方法があります。

OneWorld/ERP™のシリアル化オブジェクトを生成するには、特定のマシン構成が必要です。OneWorld/ERP™のシリアル化オブジェクトを生成するようにWebサーバーを構成することもできますが、別の生成マシンをこの処理専用を使用するようお勧めします。生成マシンに関する全要件のリストについては、Knowledge Gardenの次のリンクを参照してください。

Minimum Technical Requirements (技術的な最小要件)

[<https://knowledge.jdedwards.com/JDEContent/TechMarketingCU/information/bjtechreqs.htm>]

旧リリースからOneWorld/ERP™にアップグレードし、OneWorld/ERPオブジェクトをカスタマイズした場合は、最初にカスタム修正をテストした後、アップグレード済みのパス・コードからシリアル化JASオブジェクトを生成する必要があります。

ヒント

JASがOneWorld/ERP™ Windowsクライアントと同じスペックで動作するようにすべてのオブジェクトを生成することをお勧めします。すべてのプラットフォーム用に事前生成済みのオブジェクトが用意されていますが、オブジェクトを正常に生成できるかどうか、Webサーバー導入の成否を左右します。JASオブジェクトを生成するのは、OneWorld/ERP™クライアント用パッケージをビルドするのと同じことなので、導入作業を完全かつ順調に進めるには、オブジェクトを生成する必要があります。

次のタスクを実行してeGeneratorをインストールし、一連のOneWorld/ERP™オブジェクトからOneWorld/ERP™ JASオブジェクトを生成します。

Javaサーバー用のシリアル化オブジェクトを生成するには、開発者はeGeneratorをインストールして使用する必要があります。eGeneratorは、OneWorld/ERP™アプリケーションをJava、HTMLまたはその両方で生成できるように、OneWorld/ERP™のスペックをJavaコードに変換するJ.D. Edwardsツールです。このツールを使用して生成するOneWorld/ERP™のフォームとアプリケーションは、JavaまたはHTMLオブジェクトとなります。OneWorld/ERPでは、オブジェクトはデータベースに格納され、実行時に取り込まれます。

次の手順を実行し、eGeneratorをインストールして実行します。

- ・ [eGeneratorのインストール - ページ \[52\]](#)
- ・ [ログイン - ページ \[57\]](#)
- ・ [すべての標準シリアル化オブジェクトの生成 - ページ \[69\]](#)
- ・ [生成プロセスの検証 - ページ \[74\]](#)
- ・ [選択したオブジェクトの生成 - ページ \[76\]](#)

はじめる前に

Webサーバーと同じサービス・パック・レベルで動作するOneWorld/ERPクライアントをインストールし、実行しておきます。このタスクでは、OneWorld/ERPクライアントをジェネレート・マシンとして構成します。OneWorld/ERPクライアントのインストール手順については、OneWorld/ERPのインストール・ガイド(Windows NTベース・システム)を参照してください。

eGeneratorのインストール

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [シリアル化オブジェクト生成のためのWin32クライアントのセットアップ - ページ \[52\]](#)
- ・ [ジェネレート・マシンへのJASビルドのコピー - ページ \[53\]](#)
- ・ [シリアル化オブジェクトのためのOneWorld/ERPの準備 - ページ \[54\]](#)
- ・ [gen.batの修正 - ページ \[56\]](#)

はじめる前に

- ・ SP20の場合は、SAR 5897371に含まれているESU JD14797をインストールする必要があります。このESUにより、WBOIDとWBLNGPREFに基づいてシリアル化オブジェクト・テーブル(F989999)に新規のインデックスが作成されます。
- ・ ジェネレート・マシン上のgen.batファイルが示すパスが、構成に有効であることを確認します。必要な場合は、ジェネレート・マシン上の正しいローカルjarファイルを指すように変更してください。
- ・ エンタープライズ・サーバー上でDB2 UDBを使用している場合は、次のタスクを実行します。ジェネレート・マシン上でdb2cli.iniファイルを開き、OneWorld/ERPに関連するデータベース・エイリアスの下のLobCachSize/パラメータをコメント化するか削除します。

通常、このファイルはDB_HOME¥SQLLIB¥にあります。

シリアル化オブジェクト生成のためのWin32クライアントのセットアップ

OneWorld/ERP™クライアントのインストール後に、このマシンを使用してシリアル化オブジェクトを生成できます。

► シリアル化オブジェクトを生成するようにOneWorld/ERPクライアントをセットアップするには

1. Windows NTエクスプローラで、jde.iniファイルが格納されているディレクトリ(通常はc:\winnt)を検索します。
2. jde.iniファイルの[Interactive Runtime]セクションで、次のパラメータと値を追加します。

WebAdmin=1

このパラメータの値を"1"に設定すると、eGeneratorで8つのタブを表示して使用できるようになります。これにより、デフォルト・ユーザー用にすべてのシリアル化オブジェクトを生成できます。

3. [Save(保存)]をクリックします。

ジェネレート・マシンへのJASビルドのコピー

OneWorld/ERPクライアントのセットアップ後に、シリアル化オブジェクトの生成に使用するJASビルドを、このマシンにコピーします。ほとんどの場合、JASビルドのSystemディレクトリには、OneWorld/ERPの正常動作に必要なファイルがすべて含まれています。

► ドライブをiSeries上のIFSにマップするには

次のタスクを実行して、ジェネレート・マシンからiSeries上のIFSにドライブをマップします。すでにドライブがマップされている場合は、次のタスクに進んでください。

1. Windowsデスクトップで次のように選択します。
[スタート] – [IBM iSeries Access for Windows] – [iSeries Navigator]
2. [iSeries Navigator]で、ノードを順に展開して次のパスを表示します。
[My Connections] – [iSeries machine name] – [Network – Servers] – [TCP/IP] – [iSeries NetServer]

iSeries machine nameはiSeries Webサーバー名です。
3. [iSeries NetServer]が起動していることを確認します。
4. [iSeries NetServer]アイコンをダブルクリックします。
5. [Shared Objects]アイコンを展開し、[Root]がサブノードとして表示されることを確認します。
6. [Root]が表示されない場合は、次の手順を実行します。それ以外の場合は、「[ステップ 7 \[54\]](#)」に進んでください。
 - a. [Shared Objects]を右クリックして[New] – [File]を選択します。
 - b. [General]タブで、次のフィールドに値を入力します。
 - ・ [Share Name]: "Root"
 - ・ [Description]: "Root"
 - ・ [Access]: "Read/Write"
 - ・ [Path Name]: /
 - c. [Text Conversion]タブをクリックします。
 - d. [Allow file text conversion]のチェックボックスをクリックします。
 - e. [Add file extensions for automatic EBCDIC/ASCII text conversion]フィールドで、次のファイル拡張子を追加します。

- ・ .txt
- ・ .log
- ・ .ini
- ・ .mbr

f. [OK]をクリックします。

7. Windowsエクスプローラで、ドライブを¥¥machine ip address¥rootにマップします。machine ip addressはiSeries WebサーバーのIPアドレスです。

▶ ジェネレート・マシンにJASビルドをコピーするには

1. ジェネレート・マシン上で、¥B9フォルダの下に次の新規フォルダを作成します。

¥B9¥Generator

2. Webサーバー上で、WebSphere™ドキュメントのルート・フォルダを検索します。

/JDEdwards/JAS/EA_JDEdwards_1.ear/webclient.war

ドライブをiSeries上のIFSにマップする方法については、上記の「[手順 2 \[53\]](#)」を参照してください。

3. WebSphere™ドキュメントのルート・フォルダとサブディレクトリにある全ファイルを、Webサーバーからジェネレート・マシン上の¥Generatorディレクトリにコピーします。
4. Webサーバー上で次のファイルを検索します。

genapp.ini

このファイルは、gen.batと同じディレクトリ(通常は次のディレクトリ)にあります。

/JDEdwards/JAS/EA_JDEdwards_1.ear/webclient.war

Webサーバーからジェネレート・マシン上の次のディレクトリに、genapp.iniファイルをコピーします。

C:¥WINNT

シリアル化オブジェクトのためのOneWorld/ERPの準備

OneWorld/ERPでシリアル化Javaオブジェクトを生成する前に、次のタスクを実行してJavaジェネレート・マシンにデータ辞書とグローバル・スペックを自動入力します。

- ・ データ辞書の自動入力
- ・ グローバル・スペックの自動入力

▶ データ辞書を自動入力するには

1. Javaジェネレート・マシン上で、OneWorld/ERP™の有効なローカル環境にログオンします。
2. [略式コマンド]に“BV”と入力して[Enter]キーを押します。
3. 〈バッチ・アプリケーション – バッチ・バージョンの処理 – 使用可能なバージョン〉で、[バッチ・プログラムID]フィールドに“R92TAM”と入力します。
4. [検索]をクリックします。
5. バージョンXJDE001を選択し、[選択]をクリックします。
6. 〈バッチ・バージョン – バージョン・プロンプト〉で、[フォーム]メニューの[上級]をクリックします。
7. 〈バッチ・バージョン – [上級バージョン・プロンプト]〉で、[ロケーション一時変更]をクリックします。
8. [OK]をクリックします。
9. 〈バッチ・バージョン – バージョン・プロンプト〉で、[投入]をクリックします。
10. 〈バッチ・バージョン – JDEデータ・ソース〉で、[LOCAL(ローカル)]を選択して[選択]をクリックします。

アプリケーションにより、x:\B9ディレクトリに格納されているデータベースへの自動入力UBEが起動されます。この処理には1時間程度かかります。

11. 処理の完了後に、次のファイルをx:\B9ディレクトリからJavaシリアル化オブジェクトの生成に使用する環境のパス・コードの下の¥specディレクトリ(x:\b9¥PY9¥specなど)にコピーします。

- ・ dddict.xdb
- ・ ddttext.xdb
- ・ dddict.ddb
- ・ ddttext.ddb

▶ グローバル・スペックを自動入力するには

1. [略式コマンド]に“BV”と入力して[Enter]キーを押します。
2. 〈バッチ・アプリケーション – バッチ・バージョンの処理 – 使用可能なバージョン〉で、[バッチ・プログラムID]フィールドに“R98CRTGL”と入力します。
3. [検索]をクリックします。
4. バージョンXJDE001を選択し、[選択]をクリックします。
5. 〈バッチ・バージョン – バージョン・プロンプト〉で、[フォーム]メニューの[上級]をクリックします。
6. 〈バッチ・バージョン – 上級バージョン・プロンプト〉で、[ロケーション一時変更]をクリックします。

- 7. [OK]をクリックします。
- 8. <バッチ・バージョン - バージョン・プロンプト>で、[投入]をクリックします。
- 9. <バッチ・バージョン - JDEデータ・ソース>で、[LOCAL(ローカル)]を選択して[選択]をクリックします。

アプリケーションによりUBEが起動されます。完了までに1時間程度かかります。

gen.batの修正

eGeneratorには、標準的な構成設定のリストを含むbatファイル(gen.bat)が用意されています。これらの設定は、環境に合わせて修正する必要があります。

► gen.batを修正するには

- 1. Windowsエクスプローラから、ジェネレート・マシンの¥B9¥Generatorディレクトリに移動してgen.batをコピーします。
- 2. gen.batを右クリックして[Edit(編集)]を選択します。

注意

Webサーバーの旧バージョンがある場合は、gen.batファイルを旧バージョンで置き換えないでください。旧バージョンのファイルは、最初は正常に実行されますが、時間が経過すると異常終了します。

- 3. gen.bat構成ファイルの次の設定を変更します。

注意

OWResource.jarファイルがGEN_CLASSPATHで指定されている位置にあることを確認してください。

パラメータ	設定
set JDK 1.3=	WebSphereで使用するJDKアプリケーションのディレクトリへのパス。通常、このパスはx:¥WebSphere¥AppServer¥javaです。 注意 このパスはx:¥WebSphere¥AppServer¥JDK(WebSphere 3.5)から変更されています。
set JAS INI=	jas.iniファイルのディレクトリへのパス(直接生成の場合にのみ必須)。通常、このパスは次のとおりです。 x:¥B9¥Generator¥WEB-INF
set	データベースのJDBCドライバのパスとファイル名

パラメータ	設定
DBDRIVERS=	<p>(直接生成の場合にのみ必須)。</p> <p>特定のデータベース用のJDBCドライバへのパスを入力します。</p> <p>Oracleの場合: "classes12.zip"</p> <p>SQL 2000の場合: msbase.jar、mssqlserver.jar、msutil.jar</p> <p>DB2/UDBの場合: db2java.zip</p> <p>DB2(iSeries)の場合: jt400.jar</p>

注意

jas.iniファイルまたはデータベース・ドライバへのパス名にスペースが含まれている場合は、パス全体を二重引用符で囲む必要があります。たとえば、Windowsの場合は、JAS INI="c:\program files\JDEdwards\JAS\EA_JDEdwards_1.ear\webclient.war\WEB-INF"に設定します。

4. gen.batファイルの次の行を検索します。

```
%JDK 1.3%\bin\java -ms128m -512m...
```

この行を次のように変更します。

```
%JDK 1.3%\bin\java -classic -ms128m -512m...
```

ログイン

eGeneratorを使用すると、次のどちらかの方法でOneWorld/ERPオブジェクトを生成できます。

- ・ Webサーバーに生成する方法
- ・ Webサーバーをバイパスしてデータベースに直接生成する方法

この2つの生成方法では、eGeneratorへのログイン方法が異なります。オブジェクトの生成方法に対応するタスクを選択してください。

はじめる前に

次のファイルとフォルダがワークステーション上にあることを確認します。

- ・ gen.bat
- ・ OWResource.jar
- ・ xalan.jar

- ・ xerces.jar
- ・ images.jar
- ・ classesフォルダ

データベースに直接生成する場合は、さらに次のファイルも必要です。

- ・ jas.ini
- ・ データベース・ドライバ
- ・ tnsnames.ora

jas.iniの設定

jas.iniファイルの次のセクションが正しく構成されていることを確認します。必要な場合は、構成に合わせて変更します。

- ・ [LOGS]
ログ・ファイルへのパスが有効なディレクトリを指していることを確認します。
- ・ [JDBC URL]
DEFAULT= この設定が、シリアル化オブジェクトが生成される正しいデータベースを指していることを確認します。
- ・ [OWWEB]
OracleTNS= Oracleデータベースを使用している場合は、この設定がtnsnames.oraファイルのディレクトリを指していることを確認します。

jde.iniの設定

jde.iniファイルの[Interactive Runtime]セクションで、次のパラメータが設定されていることを確認します。

注意

jde.iniファイルの変更内容は、ジェネレート・マシンにフル・パッケージをデプロイするときに上書きされます。これらの設定を保持するために、jde.iniファイルをバックアップ・ディレクトリにコピーできます。新規パッケージをデプロイした後、Java生成用にカスタマイズした設定（下記を参照）を、バックアップ・ファイルの[Interactive Runtime]セクションから更新済みのjde.iniファイルにコピーできます。パッケージ・ビルド後は、更新済みjde.iniファイル全体をバックアップ・ファイルで上書きしないでください。全体を上書きすると、新規パッケージに必要な更新済みの設定が削除される可能性があります。

- ・ WebAdmin

このパラメータを、eGeneratorの管理者権限を表す“1”に設定します。管理者権限がない場合は、一部のアクションとオプションを使用できません。

Webサーバーに生成する方法

オブジェクトをWebサーバーに生成する場合は、このタスクを実行します。Webサーバーをバイパスしてオブジェクトをデータベースに直接生成する場合は、このタスクをスキップして次のタスクを実行してください。

► Webサーバーに生成するには

ジェネレート・マシン上で、

1. ジェネレート・マシン上の¥B9¥Generatorディレクトリの下でgen.batを実行します。このバッチ・ファイルにより初期化ファイルgenapp.iniが呼び出されます。このファイルを使用して、シリアル化オブジェクト生成用に特定のアプリケーションを構成できます。

ヒント

ジェネレート・マシン上のWINNTディレクトリに次の初期化ファイルがあることを確認します。

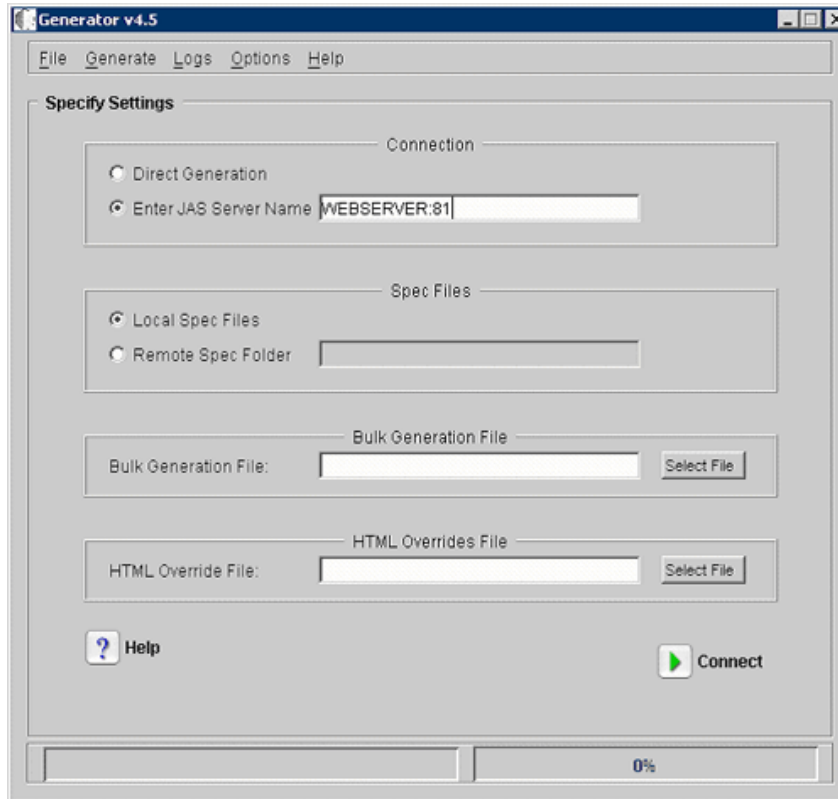
genapp.ini

サンプルのgenapp.iniファイルを次に示します。

-
2. 〈OneWorld/ERP Sign On (OneWorld/ERPのサインオン画面)〉で、OneWorld/ERPのJava環境 (JPY9など) にログオンします。

ヒント

OneWorld/ERP™環境にログオンするために[OK]をクリックしてからログオン処理が完了するまで最大で2分かかる場合があります。



3. eGeneratorで、次のフィールドに値を入力します。

- ・ JAS Server Name (JASサーバー名)

ログインするJASサーバーの名称を入力します。

システムによりデータベース・パスがjas.iniファイルから取得されます。eGeneratorにより、このWebサーバーに全オブジェクトが生成されます。

注意

ジェネレート・マシン上で複数のWebサーバー・ポートが動作している場合は、machine name:portを入力します。machine name はジェネレート・マシン名、portはポート番号です。

4. [OK]をクリックします。

指定したWebサーバーにシステムが接続します。ログインが完了すると、ステータス・バーにメッセージが表示されます。

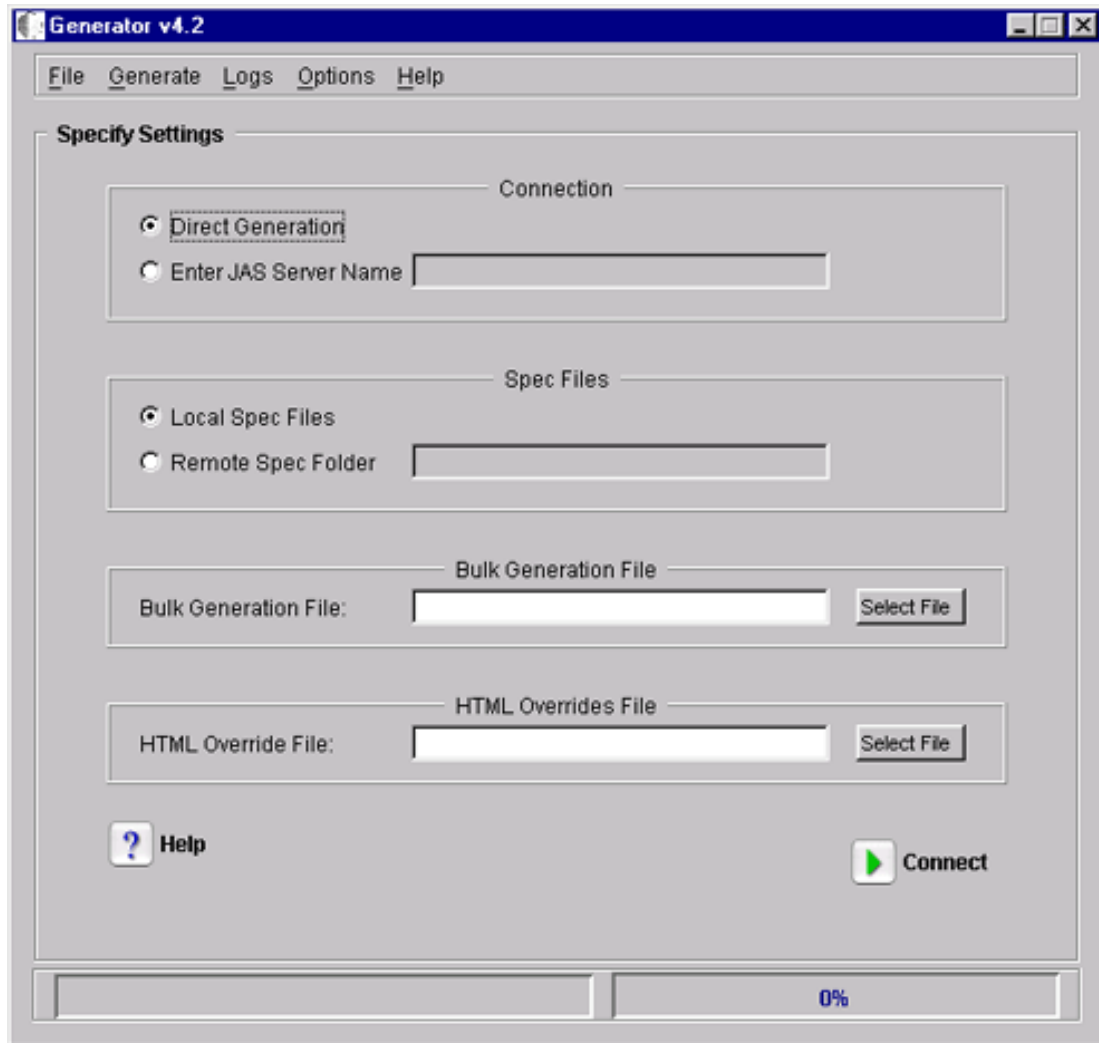
Webサーバーへのログイン後は、次のタスクをスキップし、その後のオブジェクト生成方法に関するセクションを参照してください。

Webサーバーをバイパスしてデータベースに直接生成する方法

オブジェクトをデータベースに直接生成するには、次のタスクを実行します。

► オブジェクトをデータベースに直接生成するには

1. Gen.batを起動します。
2. 〈OneWorld/ERP™ Sign On〉で、OneWorld/ERPにログインします。
3. [Direct Generation(直接生成)]ラジオ・ボタンをクリックします。



直接生成モードでは、ローカル・ディスク上のjas.iniファイルの[JDBC URL]セクションでサーバーを検索することでデータベースが検索されます。ただし、Javaサーバーを使用してオブジェクトを生成する場合、ローカル・ドライブ上のjas.ini ファイルは不要です。

4. [Connect(接続)]をクリックします。

システムはWebサーバーをバイパスし、jas.iniファイルで指定されているデータベースに直接接続します。

eGeneratorの構成

eGeneratorには、特定の環境に合わせて設定できる多数のオプションが用意されています。構成プロセスは、次のタスクからなっています。

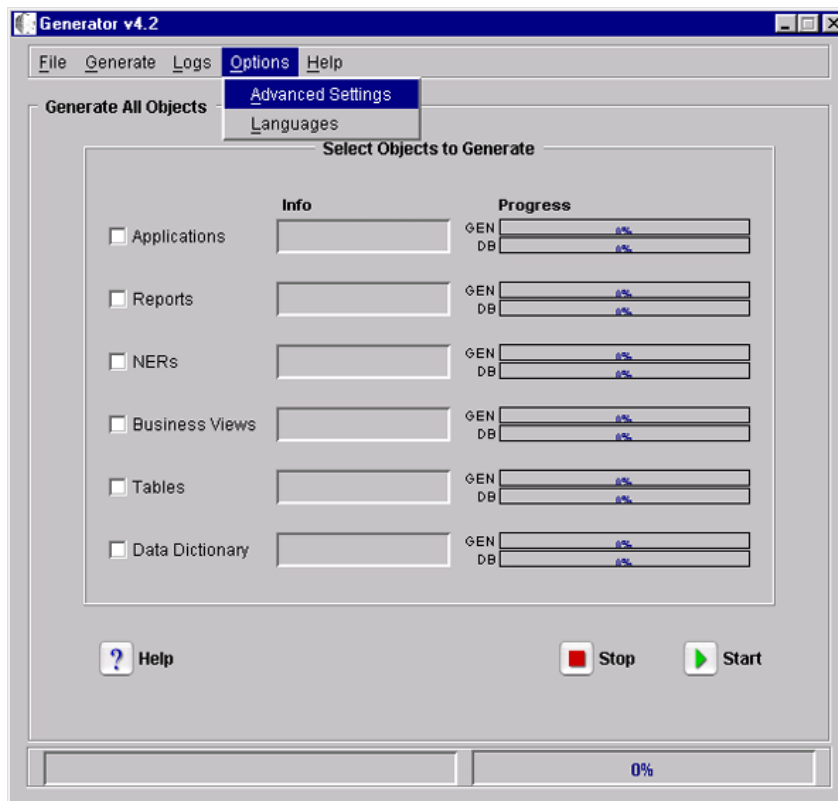
- ・ [eGeneratorオプションの設定 - ページ \[62\]](#)
- ・ [HTMLOverridesファイルの選択 - ページ \[65\]](#)
- ・ [言語の選択 - ページ \[65\]](#)
- ・ [genapp.iniファイルの構成 - ページ \[66\]](#)

eGeneratorオプションの設定

オブジェクトを生成する前に、eGeneratorの動作に影響するさまざまなパラメータを定義できます。

► eGeneratorオプションを設定するには

1. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。



2. 〈Advanced Settings〉で、生成要件に合ったオプションを選択します。



- ・ Logging(ログ)

[Status Log(ステータス・ログ)]または[Error Log(エラー・ログ)]の左のチェックボックスをクリックし、生成プロセスのログを記録するかどうかを指定します。各ログ・ファイルの位置を入力することもできます。ログは、生成プロセスのトラブルシューティングには不可欠です。
- ・ 生成モード

該当するラジオ・ボタンを有効にして、全オブジェクトの生成をパラレル・モードで実行するか逐次モードで実行するかを指定します

生成モードについては、「[生成モード - ページ \[64\]](#)」を参照してください。
- ・ Report Licensing(レポート・ライセンス)

各レポートの後にレポート・ライセンス情報を生成するには、このチェックボックスをクリックします。
- ・ User Option(ユーザー・オプション)

関連オプションを選択することで、アプリケーションのパブリック・バージョンまたは個人用バージョンを生成できます。個人用バージョンを使用できるのは、そのバージョンの作成者のみです。
- ・ Application Entry Point(アプリケーション・エントリ・ポイント)

このオプションを有効にすると、各アプリケーションの後にアプリケーション・エントリ・ポイント情報が生成されます。

生成モード

eGeneratorには、次のWebオブジェクト生成モードが用意されています。

- ・ 逐次生成
- ・ パラレル生成
- ・ 直接生成

逐次生成

これはデフォルトの生成モードです。このモードでは、[Generate-All Objects(全オブジェクトの生成)]オプションを有効にすると、Webオブジェクトが1つずつ逐次生成されます。

メリット:

- ・ 最も安定的な生成モード
- ・ メモリなどのシステム・リソースの所要量が最小
- ・ JITI(ジャストインタイム・インストール)の実行時にもエラーなしで使用可能

デメリット:

- ・ 最も低速の生成モード

パラレル生成

この生成モードを選択するには、[Advanced Settings]、[Parallel Generation(パラレル生成)]の順にクリックします。

この生成モードでは、[Generate-All Objects]オプションを有効にすると、Webオブジェクトが同時に生成されます。

メリット:

- ・ 逐次生成より高速(特に、マルチプロセッサ・ワークステーションの場合)

デメリット:

- ・ JITIが発生する可能性があるので、ユーザーがスペック・ファイル・セット全体を持っていない場合は

使用不可

- ・ パラレル生成中にJITIが発生するとスペック・ファイル破損の可能性あり

直接生成

この生成モードを選択するには、eGeneratorの〈Connect to Web Server (Webサーバーへの接続)〉画面で、下部にある[Direct Generation (直接生成)]チェックボックスを有効にします

直接生成は、前述の各生成タイプと併用できます。このモードでは、ジェネレート・マシン上で小型のJASサーバー・インスタンスが初期化されます。小型JASサーバーが初期化された後、前述のどちらかの方法で生成処理を実行できます。生成中には、JASサーバーはバイパスされ、オブジェクトはデータベースに直接格納されます。

メリット:

- ・ Javaサーバーのセットアップ前にオブジェクトを生成可能
- ・ どの生成モードでも最も高速
- ・ 管理が容易

デメリット:

- ・ 初期セットアップが困難

HTMLOverridesファイルの選択

HTMLOverridesファイルを選択し、複数行編集などの上級機能を使用してHTMLオブジェクトを生成します。

▶ HTMLOverridesファイルを選択するには

1. Gen.batを起動します。
2. 〈OneWorld/ERP Sign On〉で、OneWorld/ERP™にログインします。
3. eGeneratorで、次のフィールドに値を入力します。
 - ・ [HTMLOverrides File (HTMLOverrides ファイル)] : htmloverrides.iniファイルのパスと名称を入力するか、[Select File (ファイルの選択)] ボタンをクリックしてポップアップ・ウィンドウでファイルを参照します。

eGeneratorを実行してアプリケーションを生成すると、htmloverrides.iniファイルが処理されます。

言語の選択

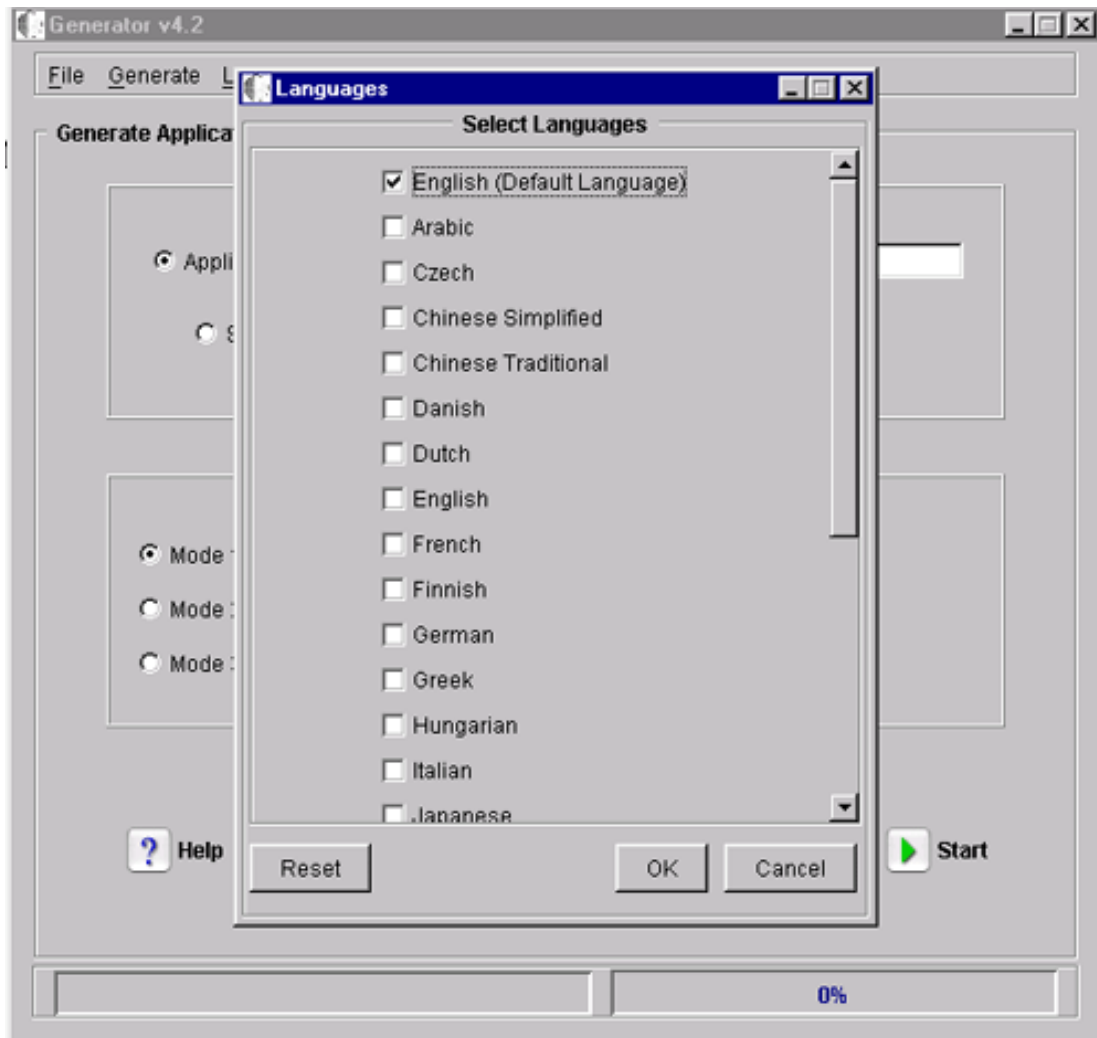
eGeneratorアプリケーションでサポート言語を選択することで、アプリケーションとレポートを希望する言語で生成できます。

注意

使用する言語ごとにLanguage Service Packをインストールする必要があります。

▶ 言語を選択するには

1. eGeneratorで、プルダウン・メニューから[Options]->[Languages(言語)]を選択します。



2. 使用する各言語の左のチェックボックスを有効にします。
3. [OK]をクリックします。

genapp.iniファイルの構成

genapp.iniファイルには、デフォルト以外のモードで生成するアプリケーションのリストが含まれています。デフォルト・モードは1で、Windowsの外観と操作性が得られます。genapp.iniファイルで、他のいずれかのモードで生成するアプリケーションをリスト形式で指定できます。Javaの場合はモード2、HTMLの場合はモード3です。

次のファイルは、サンプルのgenapp.iniファイルです。eGeneratorでは、このファイルが読み取られます。このファイルを使用して、特定のアプリケーションを生成用に構成できます。

```
# genapp.ini Last Revised 3/15/00
# Application is the name of the application to generate
# Mode is the FDA mode used to create the new "version" of the application.
# Attach a mode to a menu from menu design.This determines which mode of
# the application is displayed.The mode has nothing to do with whether or
# not it gets generated in HTML or Java - they are always generated for both.
# An application can only be specified for a mode once.
# Footer is the name of the menu you want displayed at the bottom of the
# application.Footer menus are optional.
```

```
P4015:2:G42314
P4015:3:G42314
P4210:3:G4231
P4210:2:G42314
P4101H:3:G42314
P41202:2:G42314
P41202:3:G42314
P03B2002:2:G42314
P03B2002:3:G42314
P42050:2:G42314
P42050:3:G42314
P4015W:2:G42314
P4015W:3:G42314
P40215:2:G42314
P40215:3:G42314
P41829W:2:G42314
P41829W:3:G42314
P42232:2:G42314
P42232:3:G42314
P4006:2:G42314
P4006:3:G43S11
P42045:2:G42314
P42045:3:G42314
P01012:2:G42314
P01012:3:G43S11
P4310:2:P4310:3:G43S11
P43214:2:P43214:3:P4334:2:P4334:3:G43S11
P0411:2:P0411:3:G43S11
P34301:2:P34301:3:G43S11
P40ITM3:2:G42314
P40ITM3:3:G42314
P4960:2:P01013:2:G42314
P01013:3:G42314
P3460:2:G42314
```

P3460:3:G42314
P43214:3:G43S11
P41201:3:G43S11
P43230:3:G43S11
P44200:3:G43S11
P430114:3:G43S11
P43100:2:G43S11
P43100:3:G43S11
P0150R:3:G42314
P0150S:3:G42314
P055011:2:G05BESS1
P055011:3:G05BESS1
P4915:3:G43S11
P4960:3:G43S11
P17500:2:G1715
P17500:3:G1715
P17501:2:G1715
P17501:3:G1715
P48201:2:G1715
P48201:3:G1715
P17714:2:G1715
P17714:3:G1715
P1723:2:G1715
P1723:3:G1715
P4947:2:G1705
P4947:3:G1705
P32942:3:P053020:3:

P986116 and P986110B do not use modes in B733.3
They are being kept in genapp.ini to prevent any
potential issues with previous releases.

P986116:2:P986116:3:P986110B:2:P986110B:3:

#These apps were added for the project DONUT (6/22/01)

P0092SS:3:
P01012SS:3:
P4334SS:3:
P4311S:3:
P4312S:3:
P4310SS:3:
P41204:3:
P04111:3:
P3462:3:
P4210SS:3:
P4947S:3:
P03B2003:3:
P43230SA:3:
P42230:3:
P42235:3:
P42240:3:
P34301:3:

#SAR 5336769
P0005S:3:P0006S:3:P0101S:3:

すべての標準シリアル化オブジェクトの生成

eGeneratorとJASビルドを併用して、Javaシリアル化オブジェクトのフル・セットを生成できます。これらのシリアル化オブジェクトを使用すると、Webサーバーの実行時にすべてのOneWorld/ERP™オブジェクトにアクセスできます。Webサーバーをインストールするか、新規サービス・パックにアップグレードする場合は、シリアル化オブジェクトのフル・セットを生成します。ただし、オブジェクトの部分セットのみを生成する場合は、このタスクをスキップし、次の「[選択したオブジェクトの生成 - ページ \[76\]](#)」の関連タスクを実行してください。

ここでは次の内容について説明します。

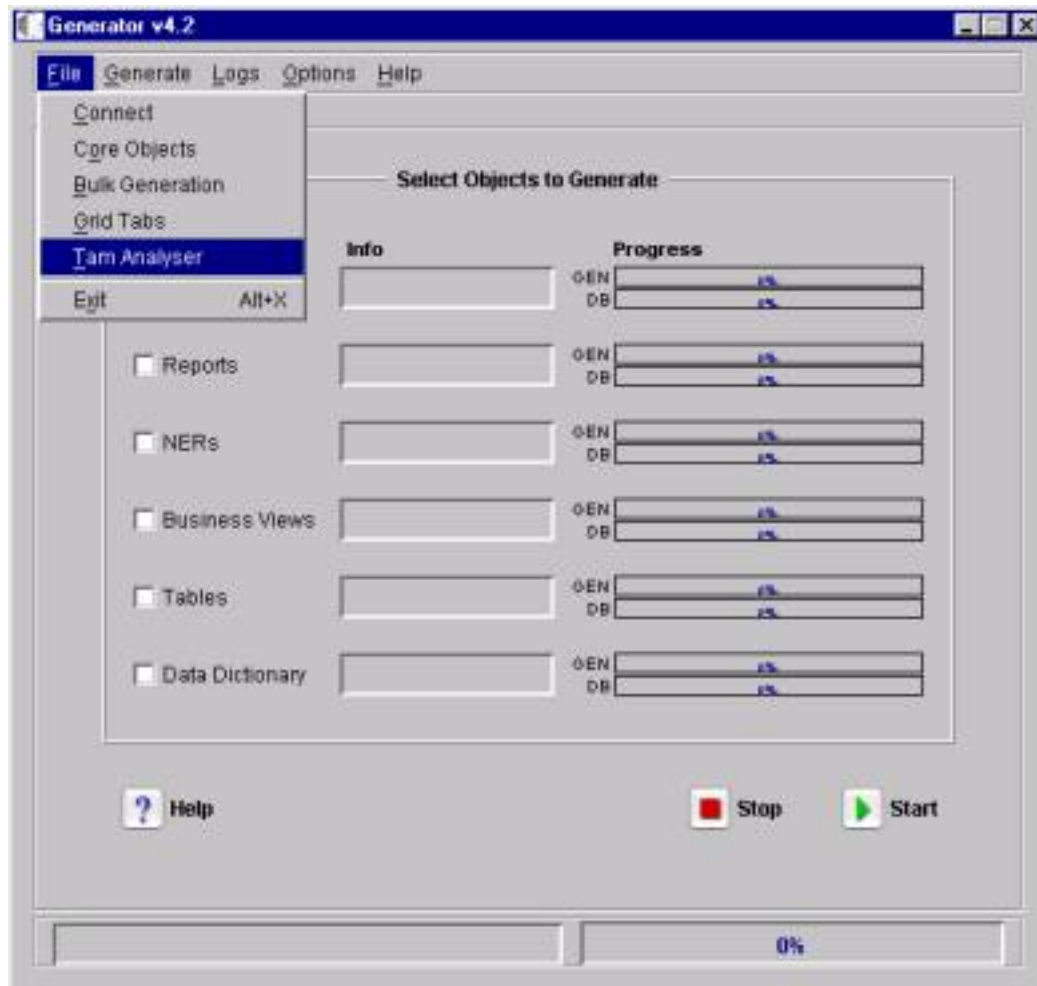
- ・ [TAM Analyzerの実行 - ページ \[69\]](#)
- ・ [全オブジェクトの生成 - ページ \[70\]](#)

TAM Analyzerの実行

TAM Analyzerを実行すると、eGeneratorでデータベースに保存せずに全オブジェクトを生成できます。これにより、生成プロセスをすばやくテストし、ログ・ファイルをチェックして破損スベックを検出できます。TAM Analyzerを使用するには、ステータス・ログとエラー・ログの両方をアクティブ化する必要があります。

▶ TAM Analyzerを実行するには

1. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
2. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
3. プルダウン・メニューから[File]->[Tam Analyzer]を選択します。



全オブジェクトの生成が開始されます。

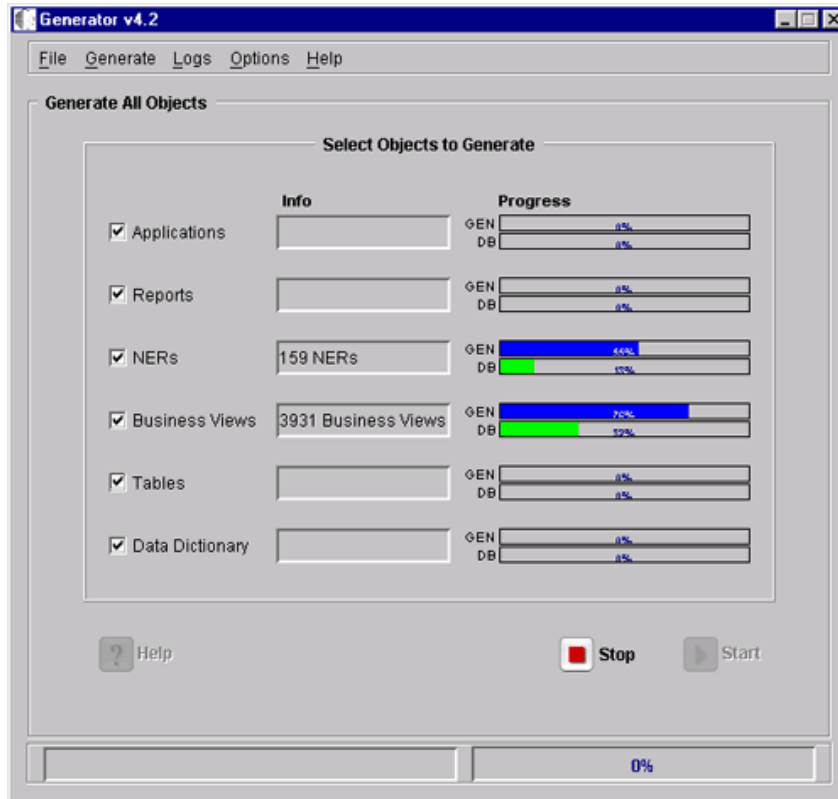
4. 生成完了後に、Status LogとError Logで破損スペックの有無をチェックします

全オブジェクトの生成

次のタスクを実行して、OneWorld/ERP™オブジェクトのフル・セットを生成します。

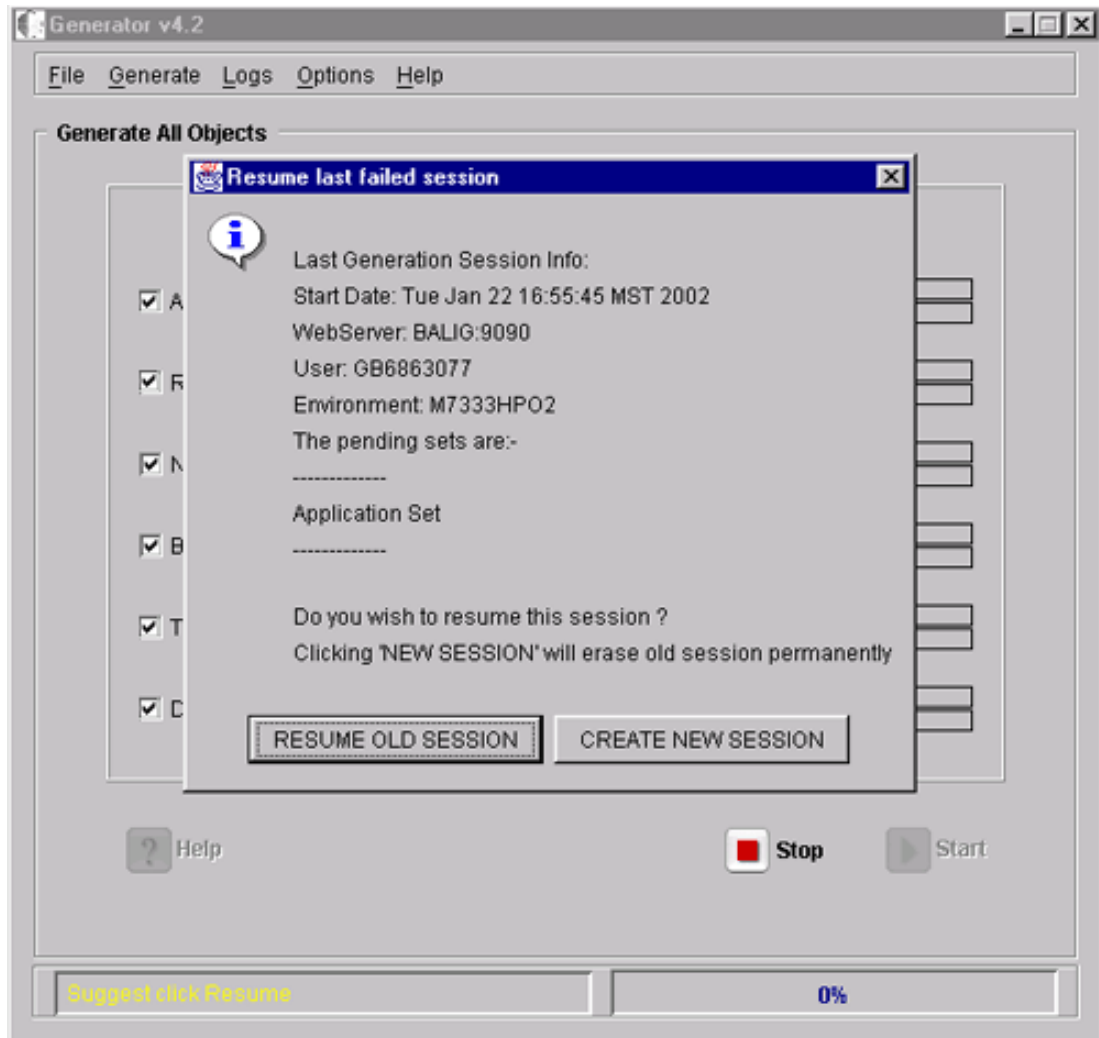
▶ すべてのOneWorld/ERP™オブジェクトを生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate(生成)]->[Core Objects(コア・オブジェクト)]を選択します。
コア・オブジェクトの生成については、「[コア・オブジェクトの生成 - ページ \[80\]](#)」を参照してください。
2. コア・オブジェクトが正常に生成された場合は、プルダウン・メニューから[Generate]->[All Objects(全オブジェクト)]を選択します。



3. 〈Generate All Objects(全オブジェクトの生成)〉で、表示されるオブジェクトをすべて有効にします。
4. [Start]ボタンをクリックします。

前の〈Generate-All Objects〉のセッションが正常終了しなかった場合は、次の画面が表示されます。

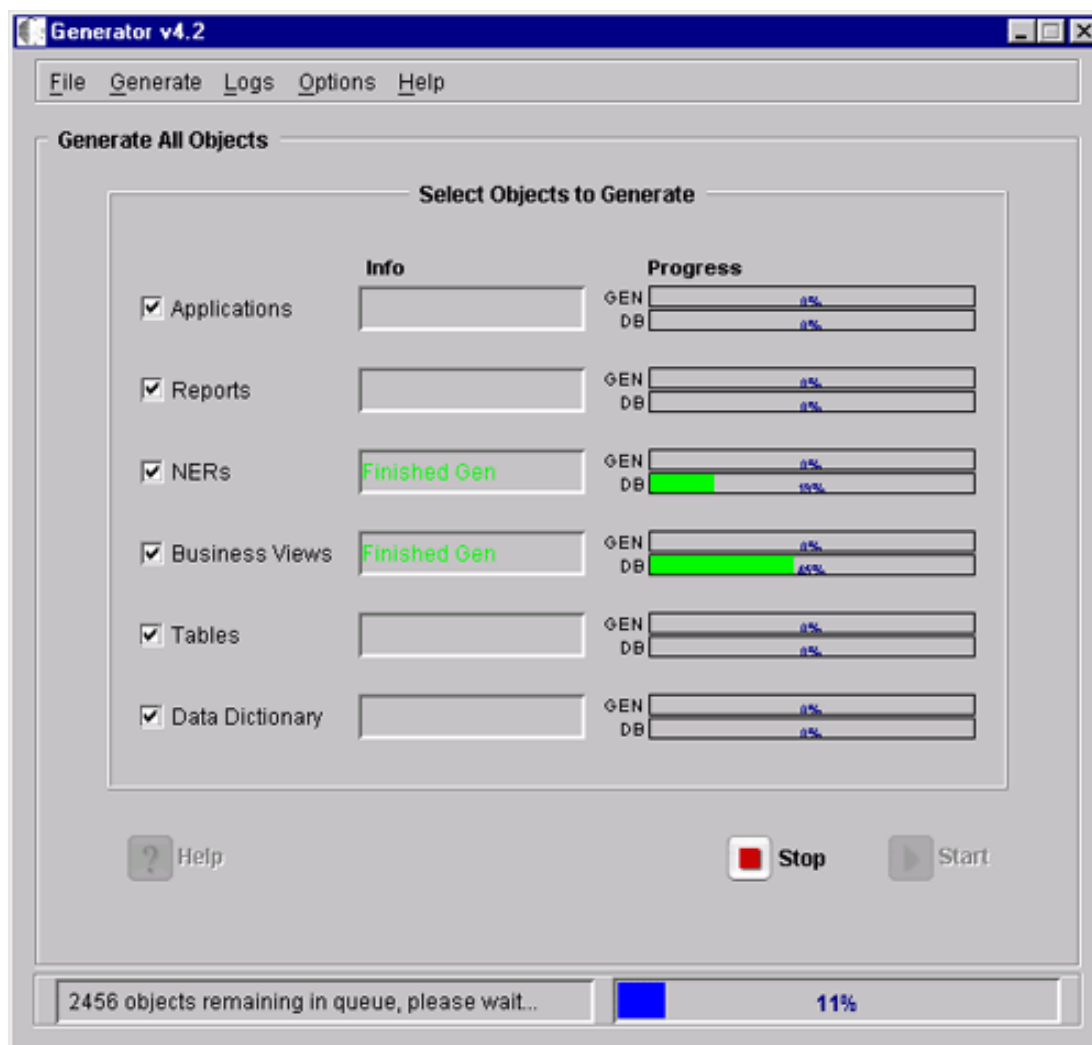


5. 次のオプションのうち1つを選択します。

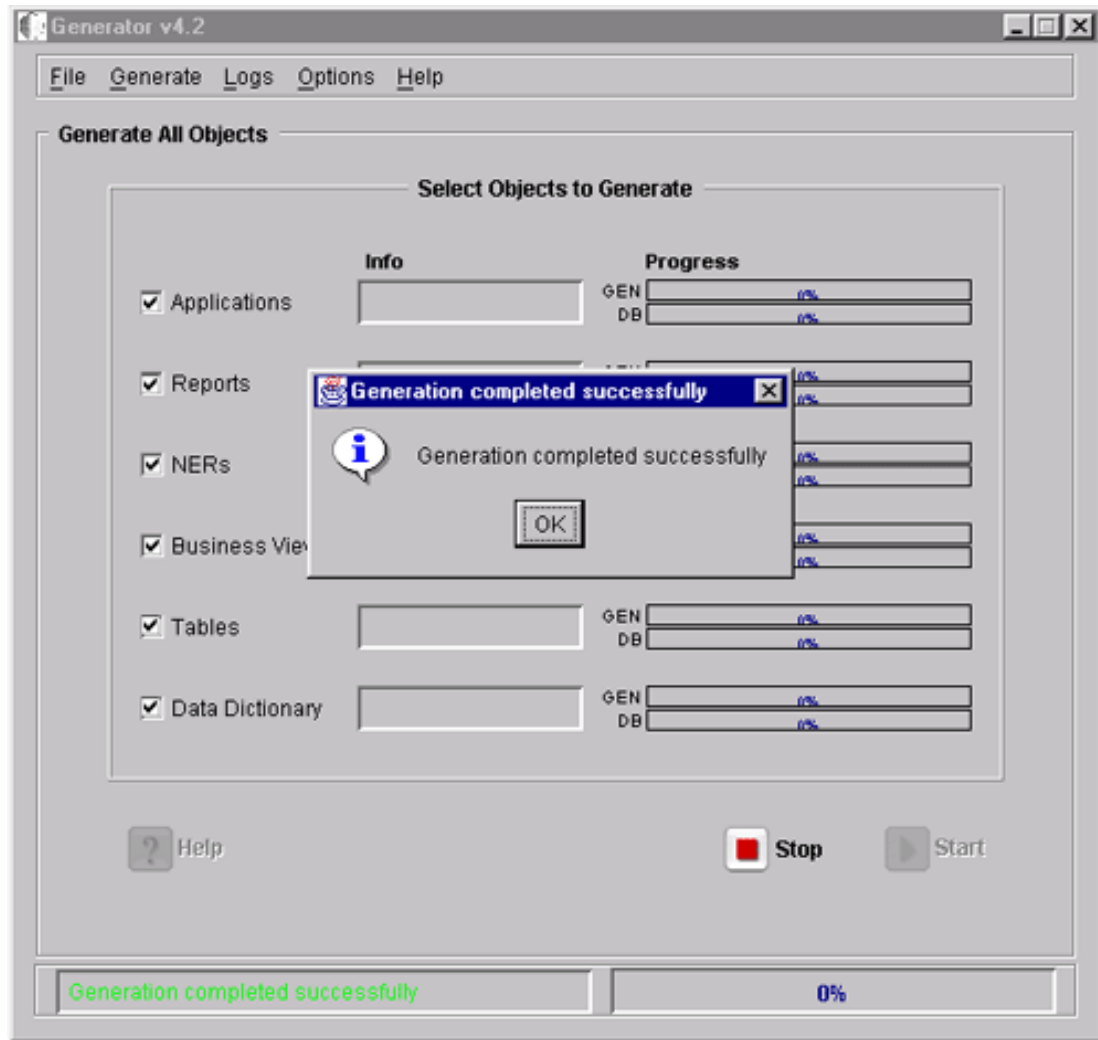
- ・ 前の生成プロセスを再開するには、[RESUME OLD SESSION(前セッションの再開)]をクリックにします。前のプロセスがエラー発生ポイントから再開されるので、このオプションを有効にすることをお勧めします。そのプロセスが完了した後、このタスクを繰り返して新規オブジェクト・セットを生成できます。
- ・ 前の生成プロセスを取り消して新規オブジェクトを生成するには、[CREATE NEW SESSION(新規セッションの作成)]をクリックします。このオプションを選択するのは、すべてのオブジェクト・タイプの新規フル・セットを生成する場合です。

どちらのオプションをクリックした場合も、オブジェクト・セットの生成が開始されます。オブジェクト生成の進行状況が画面に表示されます。青の進行状況バーは生成プロセスの進行状況を示し、緑の進行状況バーはオブジェクトをデータベースに挿入する処理の進行状況を示します。

生成が完了した時点でデータベースへのオブジェクト挿入が完了しない場合は、待ち行列に残っているオブジェクトの数が表示されます。



すべてのオブジェクトがデータベースに挿入されると、次のメッセージが表示されます。



生成プロセスの検証

次のタスクを実行して、生成プロセスが正常終了したかどうかを検証します。

- ・ [ログ・ファイルのチェック - ページ \[74\]](#)
- ・ [データベース確認のチェック - ページ \[75\]](#)

ログ・ファイルのチェック

eGeneratorでは、メニューから[Status Log]と[Error Log]を選択すると、これらのログ・ファイルを自動的に表示できます。

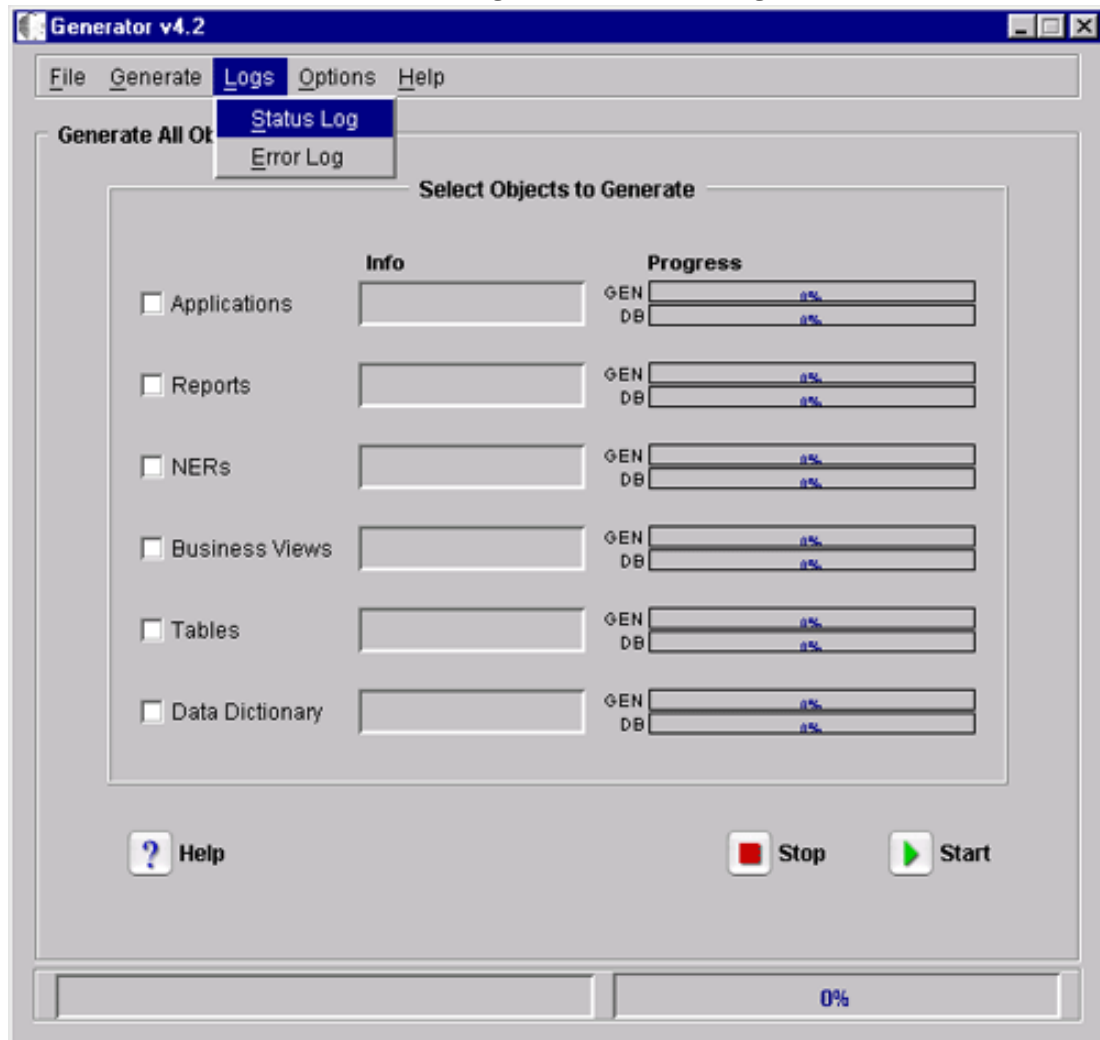
注意

これらのログは、[Generate All Objects]オプションを有効にするたびに、選択したオブジェクト・

タイプに関係なく生成されます。

▶ ステータス・ログを表示するには

- ・ eGeneratorで、プルダウン・メニューから[Logs(ログ)]->[Status Log]を選択します。



▶ エラー・ログを表示するには

- ・ eGeneratorで、プルダウン・メニューから[Logs]->[Error Log]を選択します。

データベース確認のチェック

単一オブジェクトの生成時には、オブジェクトがデータベースに正常に挿入されたことを示す確認メッセージが[コマンド プロンプト]ウィンドウに送られます。これにより、生成プロセスをモニタリングし、オブジェクトがデータベースに正常に挿入されていることを確認できます。

ただし、データ辞書項目またはデータ構造体の場合、[コマンド プロンプト]画面に出力するには多すぎ

るため、これらの確認は出力されません。

次の例は、DOSコマンド行への出力を示しています。

```
Generating application P01012 ...
-->Database Ack:ER_P01012_W01012D successfully inserted into database
-->Database Ack:P01012_HTML_W01012D successfully inserted into database
-->Database Ack:ER_P01012_W01012B successfully inserted into database
-->Database Ack:P01012_HTML_W01012B successfully inserted into database
-->Database Ack:ER_P01012_W01012A successfully inserted into database
-->Database Ack:P01012_HTML_W01012A successfully inserted into database
App generation finished Generating 2 NERs
-->Database Ack:ER_P01012_W01012C successfully inserted into database
-->Database Ack:P01012_HTML_W01012C successfully inserted into database
-->Database Ack:NER_PlugAndPlay_P0101 successfully inserted into database
NER generation finished
Generating 1 PO Data Structure Items
PO Data Structure generation finished
Generating 2 Business Views
Business View generation finished
Generating 5 Tables Table generation finished
Generating 294 Data Dictionary Items
Data Dictionary generation finished
Generating 30 Data Structure Items
Data Structure generation finished
-->Database Ack:NER_UpdateChangedGeoCode successfully inserted into database
-->Database Ack:PODATAP01012 successfully inserted into database
-->Database Ack:VIEW_V0101E successfully inserted into database
-->Database Ack:TABLE_F0101 successfully inserted into database
-->Database Ack:TABLE_F0111 successfully inserted into database
-->Database Ack:TABLE_F0116 successfully inserted into database
-->Database Ack:TABLE_F03012 successfully inserted into database
-->Database Ack:TABLE_F0401 successfully inserted into database
```

選択したオブジェクトの生成

最初にOneWorld/ERPオブジェクトを生成した後、OneWorld/ERP™オブジェクト(UBEやアプリケーションなど)を随時作成またはカスタマイズする場合は、各オブジェクトを個別に生成する必要があります。

eGenerator!には、シリアル化オブジェクトの部分セットを生成できるように、複数の方法が用意されています。「バルク生成ファイルを使用したオブジェクトの生成」を除き、すべての方法はeGenerator画面からオプションを選択することにより実行されます。バルク生成ファイルを使用すると、選択したオブジェクトをテキストファイルに直接入力し、このファイルをeGeneratorで実行できます。

次のいずれかのタスクを実行して、シリアル化オブジェクトの部分セットを生成します。

- ・ [バルク生成ファイルを使用したオブジェクトの生成 - ページ \[77\]](#)
- ・ [コア・オブジェクトの生成 - ページ \[80\]](#)
- ・ [アプリケーションの生成 - ページ \[82\]](#)
- ・ [フォームの生成 - ページ \[86\]](#)

- ・ [レポートの生成 - ページ \[88\]](#)
- ・ [NERの生成 - ページ \[91\]](#)
- ・ [データ辞書項目の生成 - ページ \[92\]](#)
- ・ [テーブルの生成 - ページ \[93\]](#)
- ・ [ビジネス・ビューの生成 - ページ \[94\]](#)
- ・ [データ構造体の生成 - ページ \[96\]](#)
- ・ [グリッド・タブの変換 - ページ \[97\]](#)

バルク生成ファイルを使用したオブジェクトの生成

バルク生成ファイルは、一連の生成パラメータを含むテキスト・ファイルです。バルク生成を使用すると、1つまたは複数の生成パラメータ・セットを簡単に構成してファイルに格納できます。その後は、該当するバルク生成ファイルを選択すると、生成パラメータ・セットをeGeneratorに自動的にロードできます。

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [バルク生成ファイルの作成 - ページ \[77\]](#)
- ・ [バルク生成ファイルの実行 - ページ \[78\]](#)

バルク生成ファイルの作成

gen.batと共に、バルク生成ファイルの作成用テンプレートが用意されています。新規バルク生成ファイルを作成するには、このテンプレートを修正し、同じファイルとして保存する必要があります。

► バルク生成ファイルを作成するには

1. WindowsエクスプローラでBulkGen.txtファイルを開きます。通常、このファイルは次のディレクトリにあります。

¥B9¥Generator¥WebClient



2. このファイル内の既存のオブジェクトをサンプルとして使用し、生成するオブジェクトを入力します(このサンプルは、完了後に必ず削除してください)。

注意

ファイルの先頭にあるMagic_Numberは削除または修正しないでください。この番号により、このファイルがバルク生成ファイルとして識別されます。

3. ファイルを保存します。

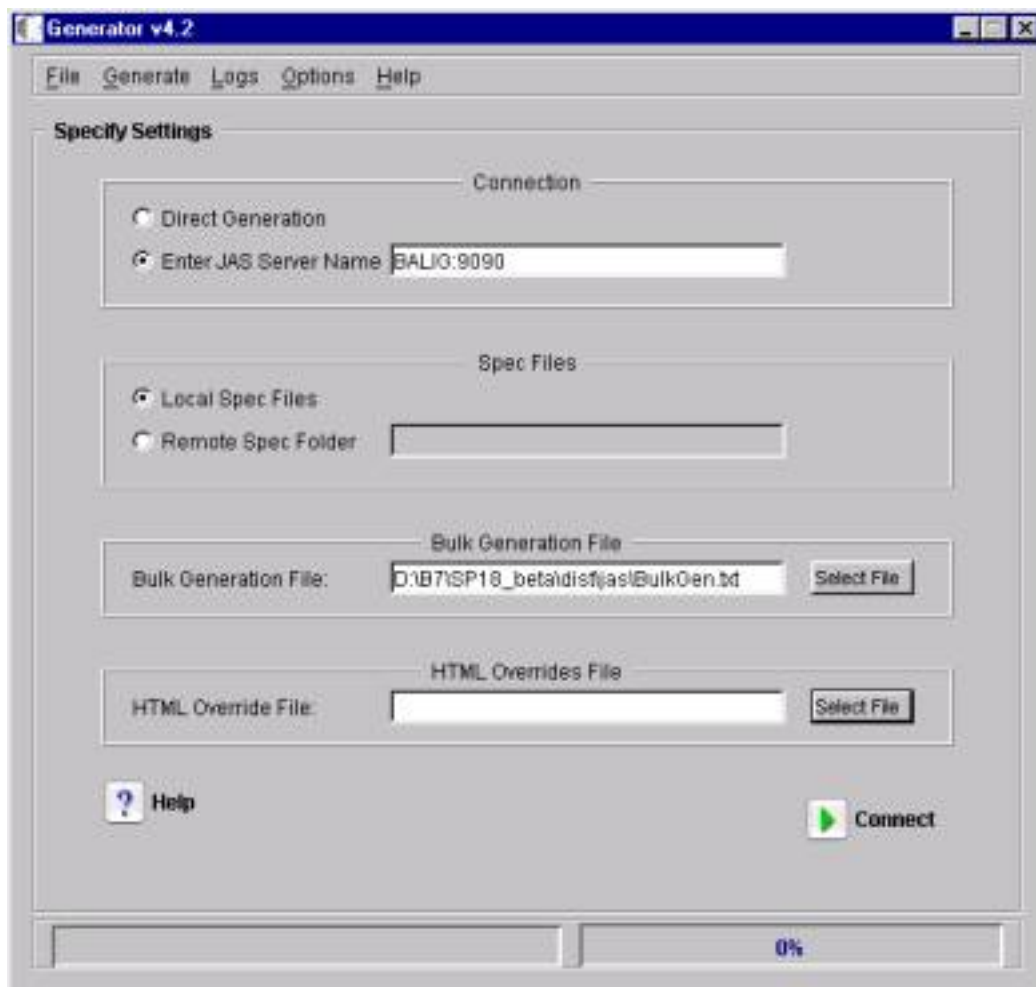
バルク生成ファイルの実行

▶ バルク生成ファイルを実行するには

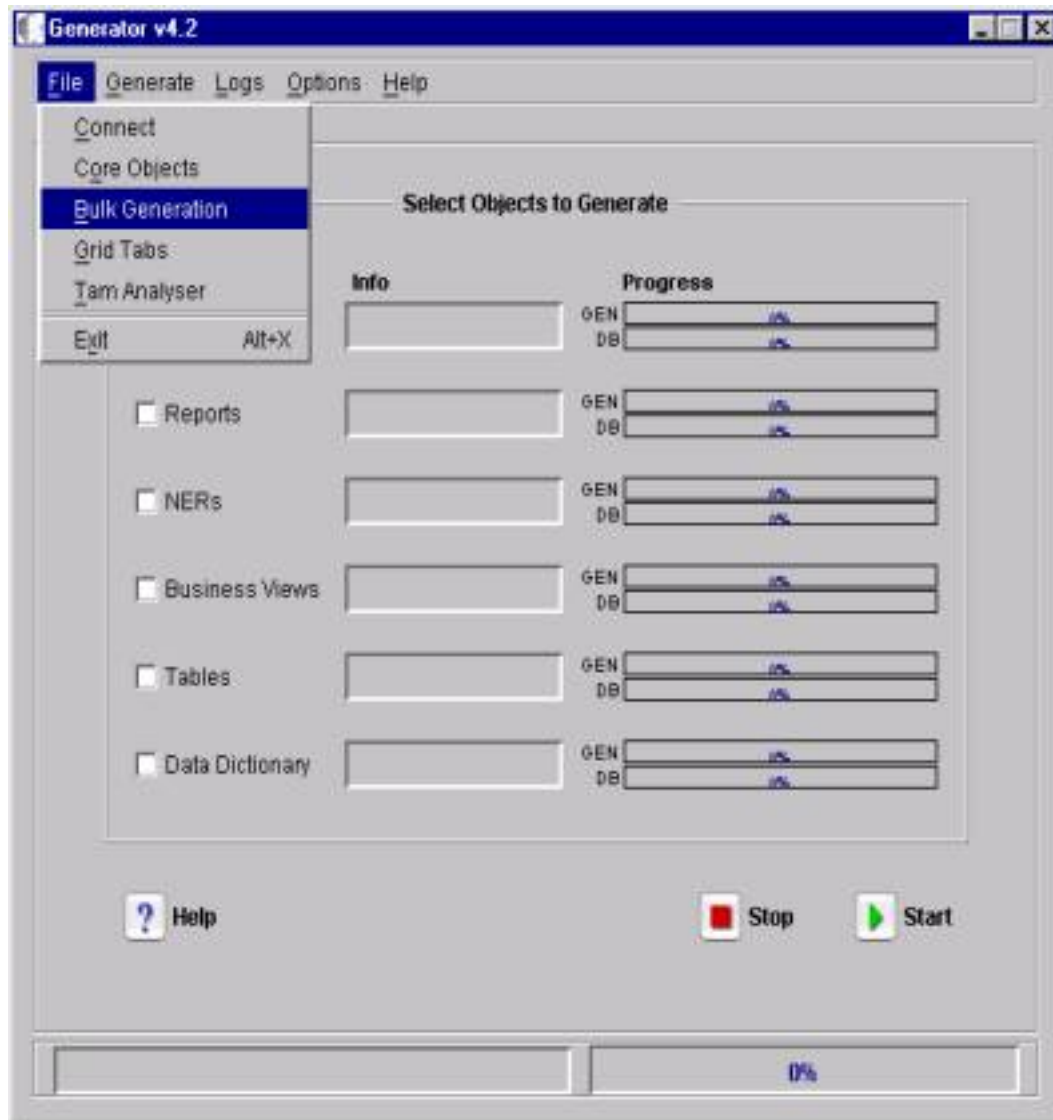
1. Gen.batを起動します。
2. 〈OneWorld Sign On(OneWorldへのサインオン)〉で、OneWorld/ERPにログインします。
3. eGeneratorで、次のフィールドに値を入力します。

- ・ [Bulk Generation File(バルク生成ファイル)]: ファイル名を入力するか、[Select File]をクリックしてバルク生成ファイルを選択します。

システムがファイルに接続するまでに少し時間がかかることがあります。



4. 画面上部のプルダウン・メニューから、[File]->[Bulk Generation(バルク生成)]を選択します。



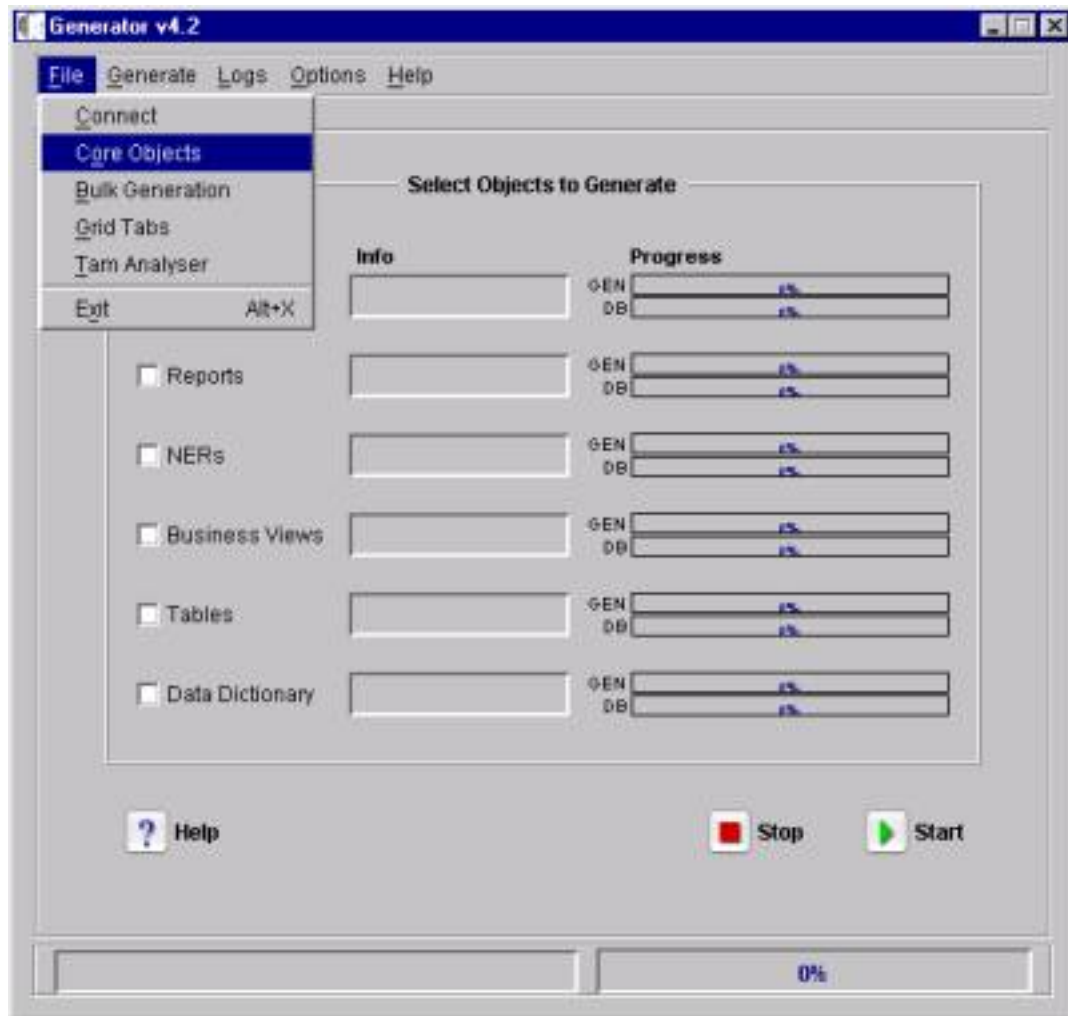
選択したファイルに指定されているオブジェクトがすべて生成されます。

コア・オブジェクトの生成

コア・オブジェクトは、他のOWコンポーネントに必要なファンデーション・オブジェクトです。これらのオブジェクトを生成すると、Javaサーバーでは特にアプリケーションをインストールしなくてもTask Explorer(タスク・エクスプローラ)やポータルを実行できます。

► コア・オブジェクトを生成するには

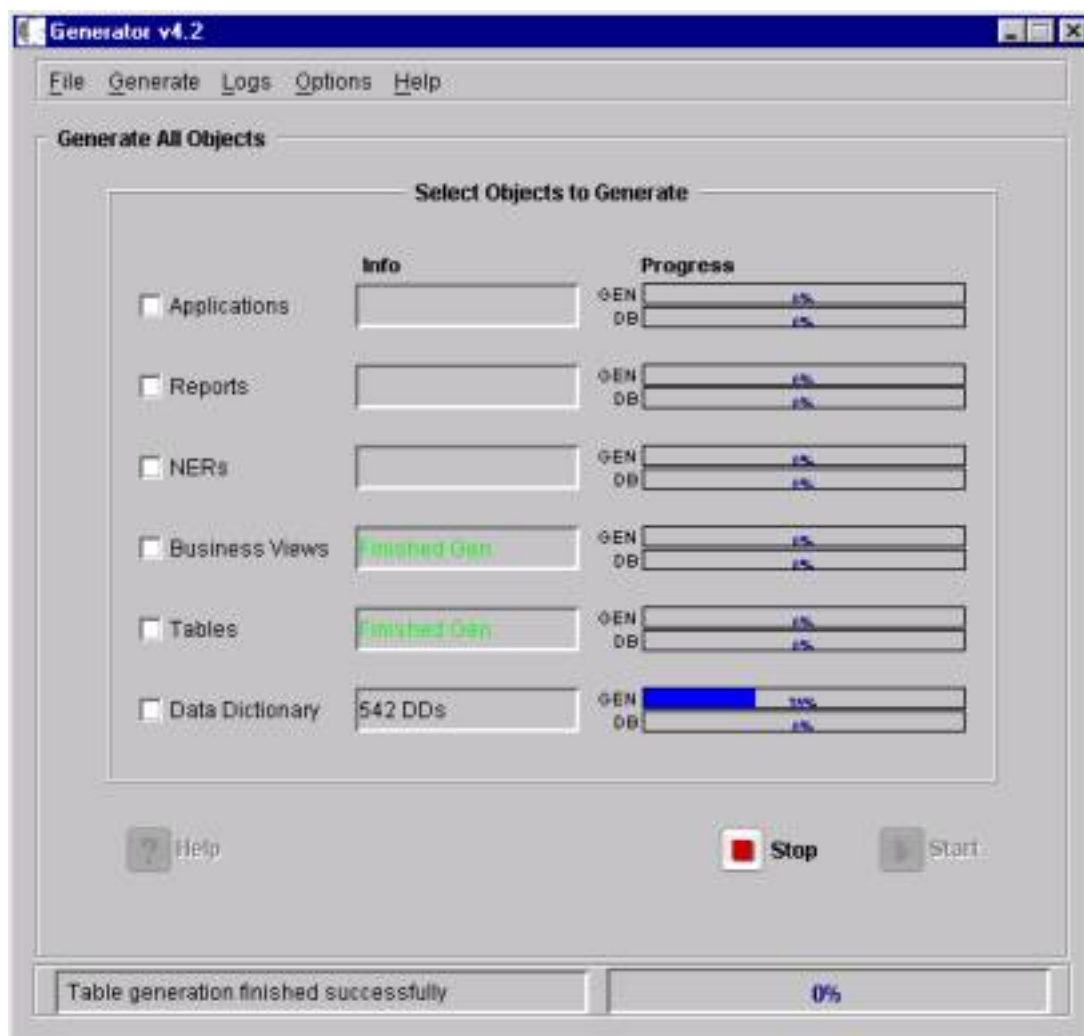
1. eGeneratorで、プルダウン・メニューから[File]->[CoreObjects]を選択します。



コア・オブジェクトとそれに従属関係を持つデータ辞書項目の生成が開始されます。

2. ステータス・ログとデータベースをチェックして、次のオブジェクトが生成されたことを確認します。

テーブル	F9860、F9865、F0005、F983051、F9210、F98980、F98950、F0092、F0101、F00950、F95921、F9060、F9060D、F9061、F9062、F9064、F0010、F0093、F986101、F00921、F00922、F0004、F00941、F0094、F95921、F9065、F0082、F00821、F0083、F0084、F9000、F9001、F9002、F9006
ビュー	V9001B



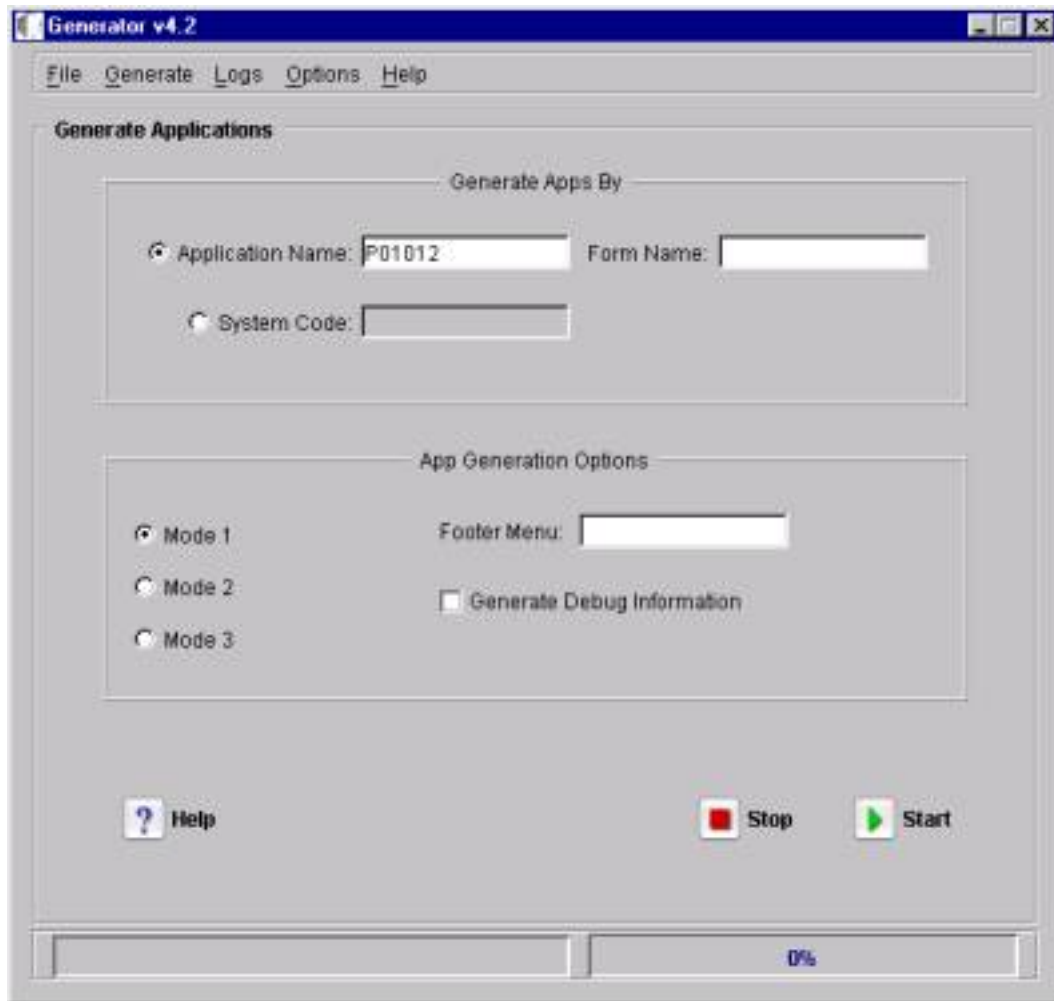
アプリケーションの生成

次のいずれかのタスクを実行して、1つまたは複数のアプリケーションを生成します。

- ・ [手順 19](#) [82]
- ・ [手順 20](#) [84]
- ・ [手順 21](#) [85]

▶ 単一アプリケーションを生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Applications]を選択します。



2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. [Application Name(アプリケーション名)]を有効にして、アプリケーション名(P01012など)を入力します。
5. [Start]をクリックします。

最初にオブジェクト・ライブラリアン・マスター(F9860)と38のデータ辞書項目が生成されます。

6. ステータス・ログで生成状況をチェックします。

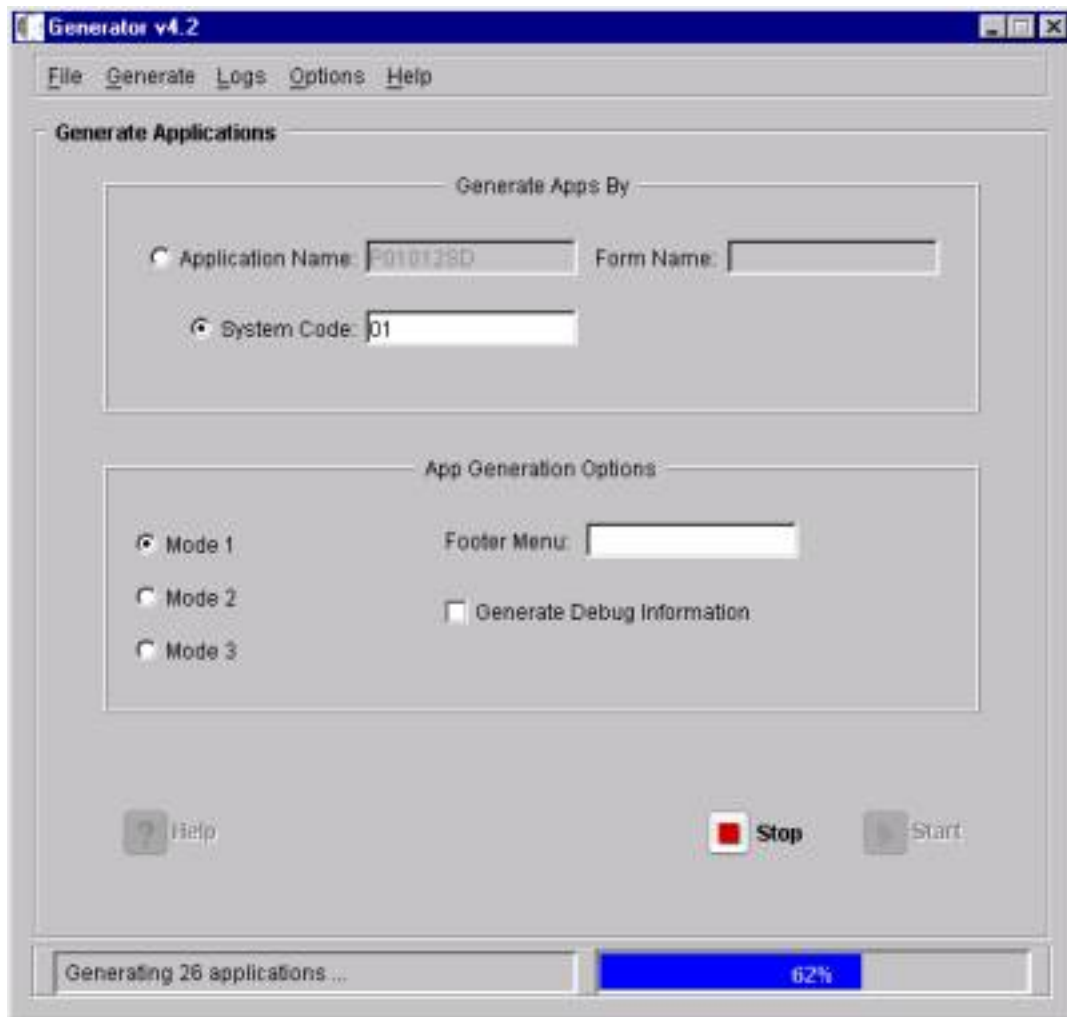
P01012の場合は、次のオブジェクトが生成されます。

- ・ 3つのフォーム:P01012_W01012A、P01012_W01012B、P01012_W01012Cと、それぞれに対応するERオブジェクト
- ・ アプリケーションに含まれるビュー、テーブル、データ辞書項目

7. ステータス・ログをチェックして、これらのオブジェクトが生成されたことを確認します。

▶ システム・コード別にアプリケーションを生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]→[Applications]を選択します。
2. プルダウン・メニューから[Options]→[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。
5. [Generate by System Code(システム・コード別に生成)]を選択します。
6. [Start]をクリックします。



指定したシステム・コードを持つアプリケーションがすべて取り込まれます(たとえば、マスター環境では26のアプリケーションが取り込まれます)。

7. ステータス・ログとエラー・ログをチェックして、各アプリケーションが生成されたことを確認します。

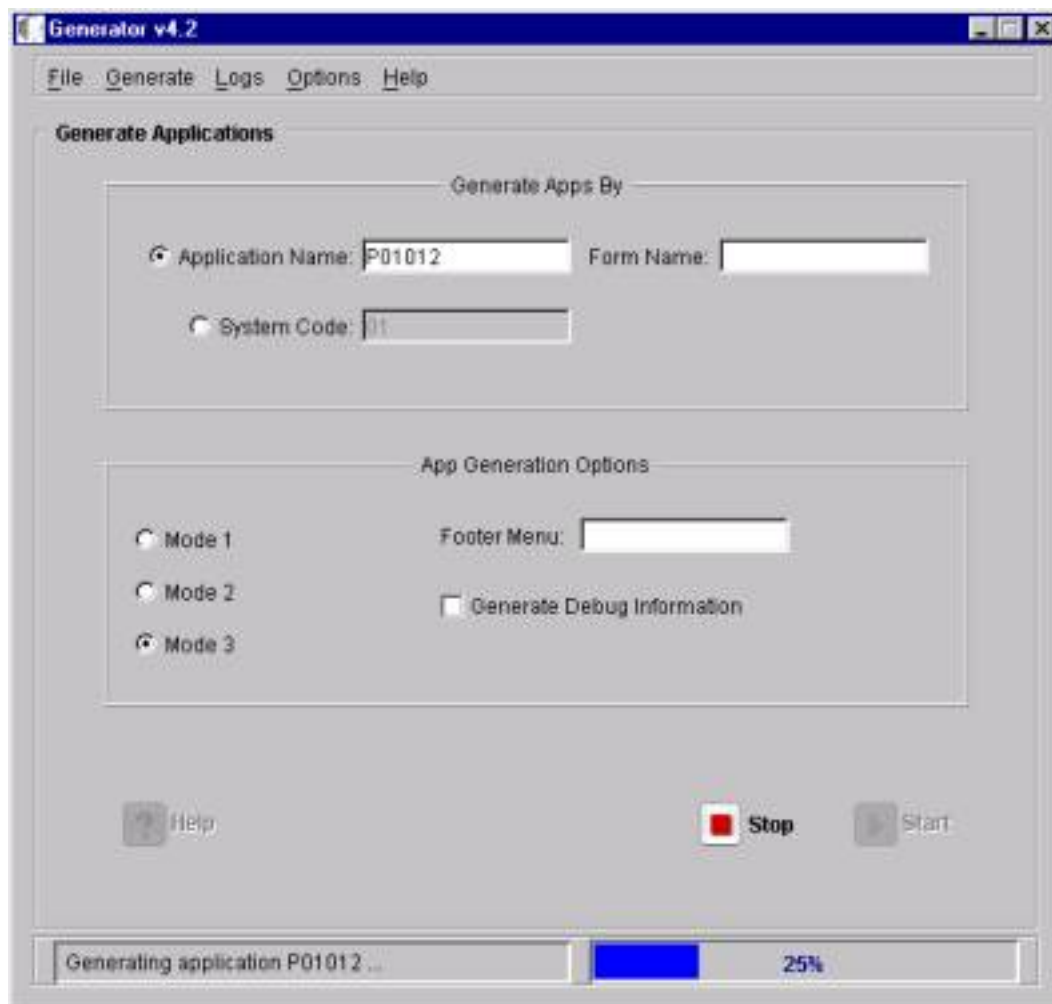
8. 次のSQLコマンドを使用して、各アプリケーションがデータベース上にあることを確認します。

```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'P%W%';
```

▶ モード別にアプリケーションを生成するには

アプリケーションをモード1、2、または3で生成できます。これらのモードにより、アプリケーションの外観と操作性が確定されます。生成モードについては、「OneWorld/ERP Webアプリケーションの設計」の「オブジェクトの生成」を参照してください。

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Applications]を選択します。
2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。
5. [Mode 3(モード3)]を選択します。



6. [Application Name]を有効にして、アプリケーション名 (P01012など)を入力します。
7. [Start]をクリックします。
8. 次のSQLコマンドを使用して、データベースにアプリケーションのHTML版が格納されていることを確認します。

SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'P01012_HTML%';

フォームの生成

▶ フォームを生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Applications]を選択します。



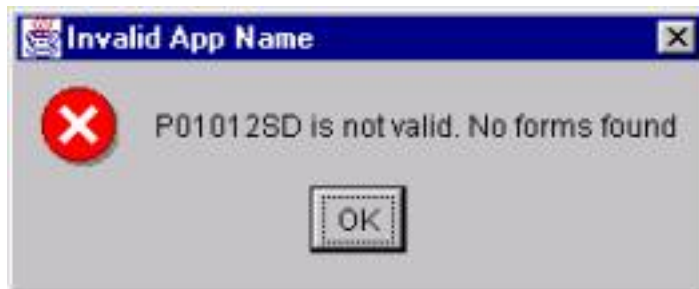
2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。

5. [Form Name(フォーム名)]フィールドにフォーム名(P01012_W01012Aなど)を入力します。
6. [Start]をクリックします。

フォーム名が無効な場合は、次のエラー・メッセージが表示されます。



アプリケーション名が無効な場合は、次のエラー・メッセージが表示されます。



7. 最初にオブジェクト・ライブラリアン・マスター(F9860)と38のデータ辞書項目が生成されます。
8. ステータス・ログで生成状況をチェックします。

W01012Aの場合は、次のオブジェクトが生成されます。

- ・ フォームP01012_W01012Aとそれに対応するERオブジェクト
- ・ アプリケーションに含まれるビュー、テーブル、データ辞書項目
- ・ たとえば、P01012の場合は、次のオブジェクトと294のデータ辞書項目が作成されます。
- ・ NER_UpdateChangedGeoCode
- ・ NER_PlugAndPlay_P0101
- ・ F0101
- ・ F03012
- ・ F0116
- ・ F0111
- ・ F0401
- ・ V0101E

9. これらのオブジェクトがステータス・ログに含まれていることを確認するか、次のクエリーを使用してデータベースをチェックします。

```
SQL> select wboid from f989999
```

レポートの生成

次のいずれかのタスクを実行して、1つまたは複数のレポートを生成します。

- ・ [手順 23](#) [88]
- ・ [手順 24](#) [88]
- ・ [手順 25](#) [89]

▶ 単一レポートを生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Reports]を選択します。
2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。
5. レポート名(R0006Pなど)を入力します。
6. [Start]をクリックします。

最初に、バージョン・リスト・テーブル(F983051)と28のデータ辞書項目が生成されます。

7. ステータス・ログで生成状況をチェックします。

レポートの全バージョンとそれに対応するDSEL、DSEQ、PRINTINFOの各オブジェクトが生成されます。

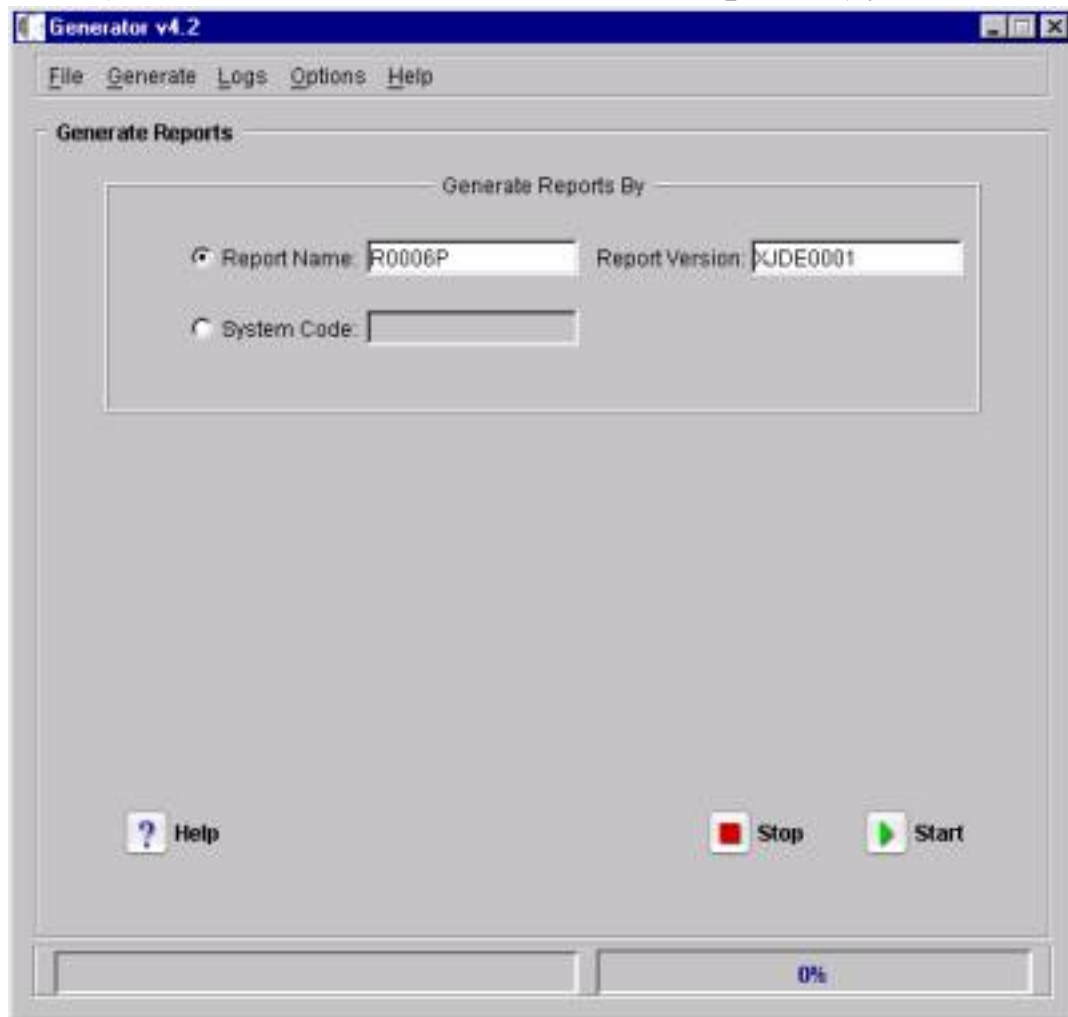
8. ステータス・ログを調べてオブジェクトの存在を確認するか、次のクエリーを使用してデータベースをチェックします。

```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like '%R0006P%';
```

▶ レポート・バージョンを生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Reports]を選択します。
2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。

5. レポート名 (R0006Pなど)とレポート・バージョン(XJDE0001など)を入力します。



6. [Start]をクリックします。

最初にバージョン・リスト(F983051)と28のデータ辞書項目が生成されます。

7. ステータス・ログで生成状況をチェックします。

レポートの全バージョンとそれに対応するDSEL、DSEQ、PRINTINFOの各オブジェクトが生成されます。

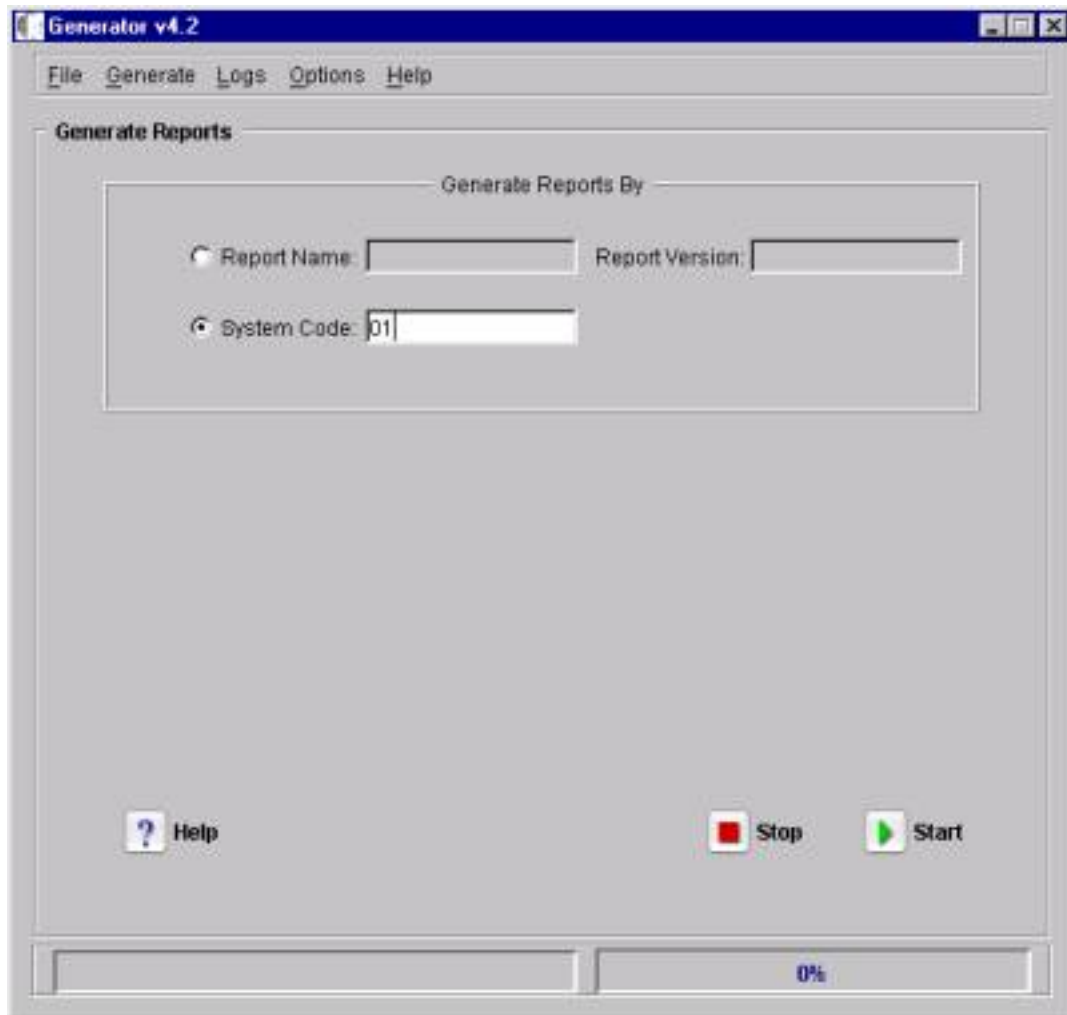
8. ステータス・ログを調べてオブジェクトの存在を確認するか、次のクエリーを使用してデータベースをチェックします。

```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like '%R0006P%';
```

► システム・コード別にレポートを生成するには

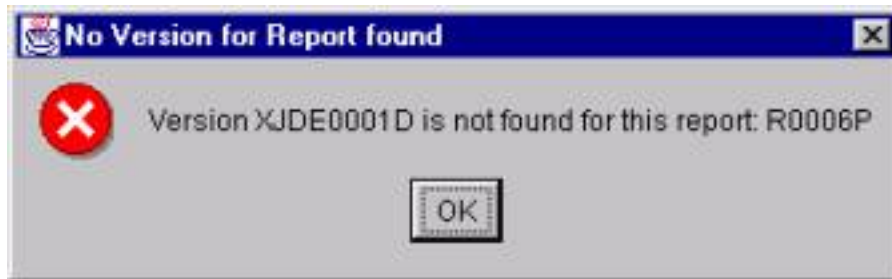
1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Reports]を選択します。

2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。
5. [Generate by System Code]を選択し、コード番号を入力します。
6. [Start]をクリックします。



指定したシステム・コードを持つアプリケーションがすべて取り込まれます(たとえば、マスター環境では26のアプリケーションが取り込まれます)。

入力したバージョン名が間違っている場合は、次のエラー・メッセージが表示されます。



レポート名が間違っている場合は、次のエラー・メッセージが表示されます。



7. ステータス・ログとエラー・ログをチェックして、そのシステム・コードに関するレポートがすべて生成されたことを確認します。
8. 次のSQLコマンドを使用して、各レポートがデータベース上にあることを確認します。

```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'P%W%';
```

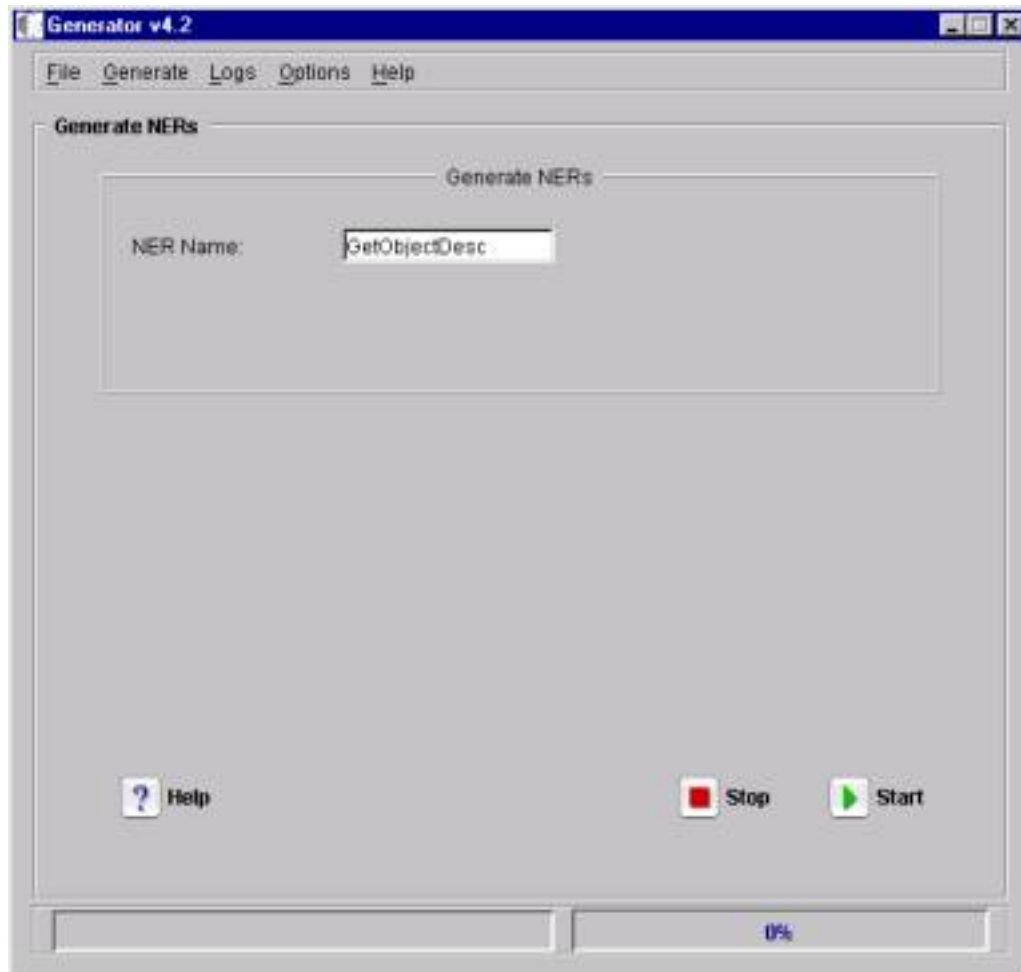
NERの生成

► NERを生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[NERs]を選択します。
2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。
5. NER名(GetObjectDescなど)を入力します。

注意

NER名では、大文字と小文字が区別されます。



6. [Start]をクリックします。
7. ステータス・ログで生成状況をチェックします。
8. 次のSQLコマンドを使用して、各オブジェクトがデータベース上にあることを確認します。

```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'NER_GetObjectDesc'
```

データ辞書項目の生成

▶ データ辞書項目を生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Data Dictionary(データ辞書)]を選択します。
2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。
5. データ辞書項目(OBNMなど)が生成されます。



6. ステータス・ログで生成状況をチェックします。
7. 次のSQLコマンドを使用して、各オブジェクトがデータベース上にあることを確認します。

```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'DICT_OBNM';
```

テーブルの生成

► テーブルを生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Tables(テーブル)]を選択します。
2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。
5. テーブル名(F9860など)を入力します。



6. ステータス・ログで生成状況をチェックします。
7. 次のSQLコマンドを使用して、各オブジェクトがデータベース上にあることを確認します。

```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'TABLE_F9860';
```
8. [UTBrowse(UT参照)]を開き、テーブルにデータ辞書項目があることを確認します。
9. ログをチェックして、データ辞書項目が生成されたことを確認します。
10. 次のSQLコマンドを使用して、各オブジェクトがデータベース上にあることを確認します。

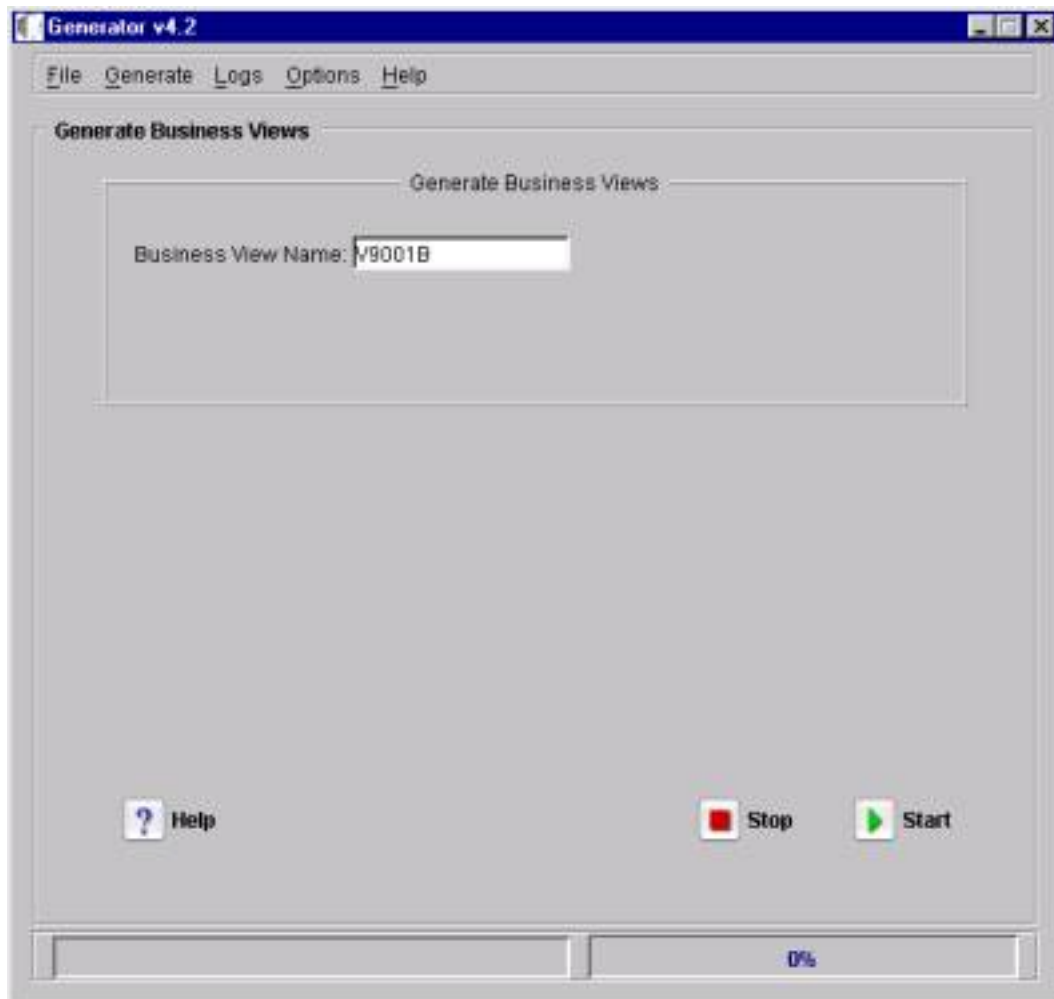
```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'DICT%';
```

オブジェクト・ライブラリアン・マスター(F9860)には、38のデータ辞書項目が必要です。

ビジネス・ビューの生成

▶ ビジネス・ビューを生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Business Views(ビジネス・ビュー)]を選択します。
2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。
5. ビジネス・ビュー名 (V9001Bなど)を入力します。
6. [Start]をクリックします。
7. ステータス・ログで生成状況をチェックします。



8. 次のSQLコマンドを使用して、各オブジェクトがデータベース上にあることを確認します。

```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'VIEW_V9001B';
```
9. 次のSQLコマンドを使用して、各オブジェクトがデータベース上にあることを確認します。

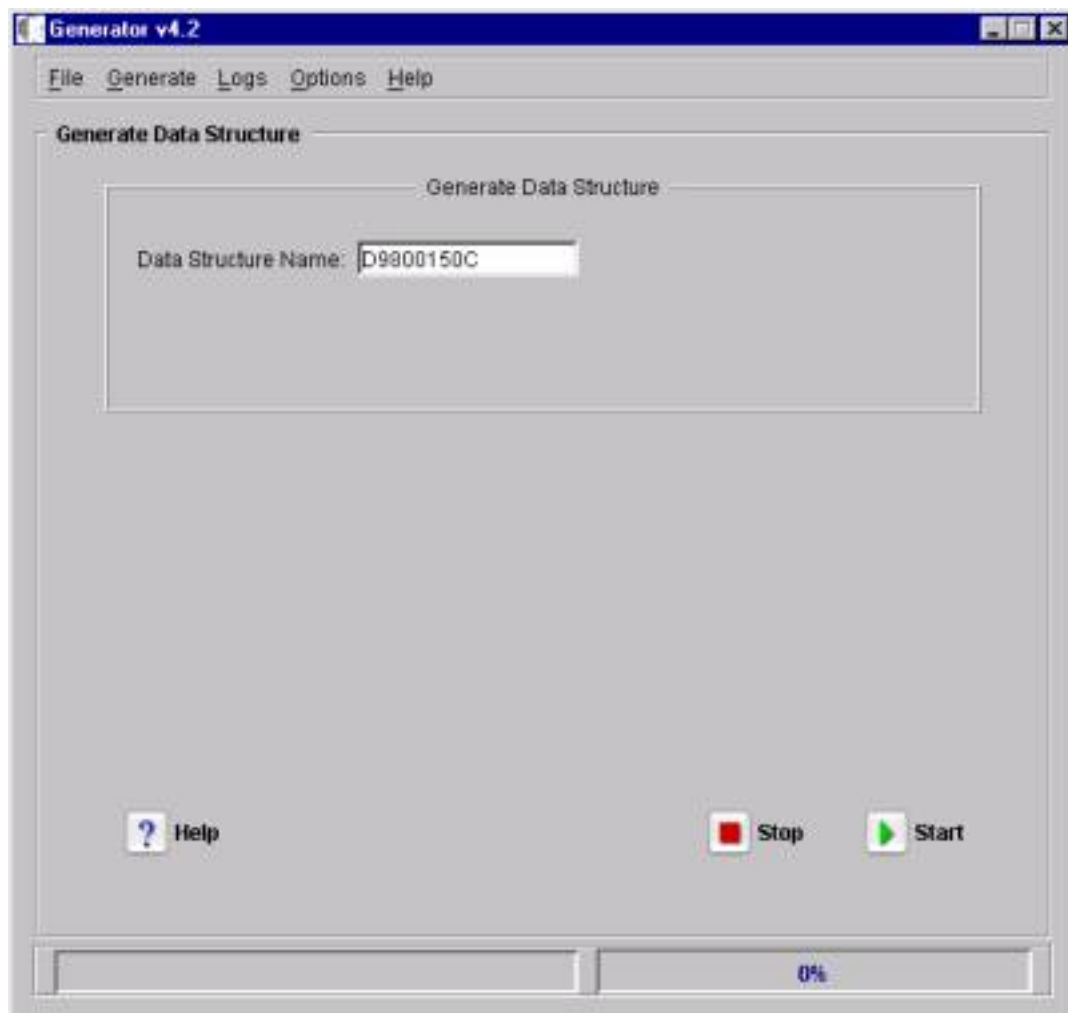
```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'TABLE_%';
```

たとえば、ビジネス・ビューV9001Bには、テーブルF9000とF9001、および78のデータ辞書項目が含まれています。

データ構造体の生成

▶ データ構造体を生成するには

1. プルダウン・メニューから[Generate]->[Data Structures(データ構造体)]を選択します。
2. プルダウン・メニューから[Options]->[Advanced Settings]を選択します。
3. [Error Log]と[Status Log]の左のチェックボックスを有効にして[OK]をクリックします。
4. データベースを切り捨てます。
5. データ構造体名(D9800150Cなど)を入力します。



6. [Start]をクリックします。
7. ステータス・ログで生成状況をチェックします。
8. 次のSQLコマンドを使用して、各オブジェクトがデータベース上にあることを確認します。

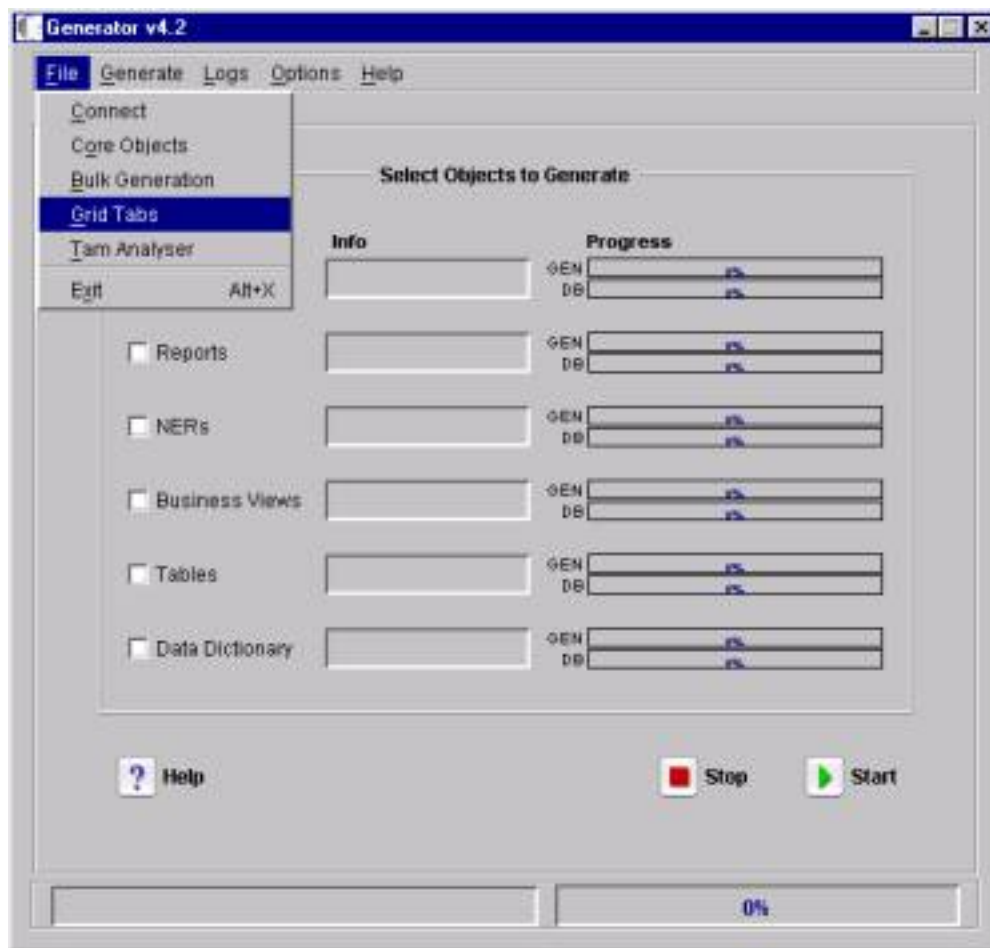
```
SQL> select wboid from f989999 where wboid like 'DSTR_ D9800150C';
```

グリッド・タブの変換

グリッド・タブでは、ユーザー時変更テーブル(F98950)からGDおよびGFレコード・タイプが選択され、バイナリBLOBデータがXML BLOBデータに変換されます。次のタスクを実行して、グリッド・タブを変換します。

▶ グリッド・タブを変換するには

1. プルダウン・メニューから[File]->[Grid Tabs(グリッド・タブ)]を選択します。



[Grid Tabs Conversion(グリッド・タブの変換)]ウィンドウが表示されます。

2. jde.logをチェックして、変換が正常終了したことを確認します。

3. グリッド・タブがアクティブになっていることを確認します。そのためには、アプリケーションを開き、< User Overrides (ユーザー時変更) > がアクティブになっていることを確認します。

この検証が関係するのは、プリスティン (JDEオリジナル) 環境で変換を実行する場合のみです。他の環境を変換する場合は、Web上のグリッド・フォーマットがWindowsクライアントと同じであることを確認してください。

Webサーバーの実行

最初にJ.D. Edwards HTML Webサーバーをインストールした後、WebSphereを停止して再起動する必要があります。

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [Webサーバーの起動 - ページ \[99\]](#)
- ・ [Webサーバーの停止 - ページ \[99\]](#)
- ・ [Webサーバーへのアクセス - ページ \[99\]](#)
- ・ [J.D. EdwardsポータルでのInherited Trustシステムのセットアップ - ページ \[100\]](#)

ヒント

修正内容を有効にするには、構成を修正するたびに、必ずWebSphereアプリケーション・サーバーを停止して再起動する必要があります。

Webサーバーの起動

次の関連タスクを実行してWebサーバーを起動します。

► [Webサーバーをインストールするには \(WebSphere AEの場合\)](#)

1. [WebSphere Administrative Console]を開きます。
2. [WebSphere Administrative Console]で、[Node(ノード)]ツリーを展開します。
3. アプリケーション・サーバー(AS_JDEdwards_1など)を選択し、[Start]ボタンをクリックします。

Webサーバーの停止

► [Webサーバーを停止するには \(WebSphere AEの場合\)](#)

- ・ [WebSphere Administrative Console]で、J.D. Edwardsアプリケーション・サーバー(AS_JDEdwards_1など)を選択して[Stop]をクリックします。

Webサーバーへのアクセス

Webサーバーには、ネットワークに接続している任意のWebサーバーからアクセスできます。

ヒント

デフォルト以外のホストを使用してWebサーバーにアクセスするには、ポート番号を使用する必要がありますが、index.htmlを指定する必要はありません。

► Webサーバーにアクセスするには

1. ブラウザを開き、次のURLを入力してJ.D. Edwardsポータル・クライアントを呼び出します。

`http://<web_server_name>:<port_number>/jde/owportal/`

たとえば、次のように入力します。

`http://jdewebs1.jdedwards.com:81/jde/owportal/index.html`

2. ブラウザを開き、次のURLを入力してJ.D. Edwards HTMLクライアントを呼び出します。

`http://<web_server_name>:<port_number>/jde/owhtml/`

たとえば、次のように入力します。

`http://jdewebs1.jdedwards.com:81/jde/owhtml/`

3. 次のURLを入力してJ.D. Edwards SAWを呼び出します。

`http://<web_server_name>:<port_number>/jde/saw/`

たとえば、次のように入力します。

`http://jdewebs1.jdedwards.com:81/jde/saw/`

エラーは、jas.log、jasdebug.log、stderr.txt、stdout.txtに記録されます。

J.D. EdwardsポータルでのInherited Trustシステムのセットアップ

次のタスクを実行して、Inherited Trustサブリット用のシークレット・エンタープライズ・キーを設定します。これらのサブリットは、J.D. Edwardsポータルのログインを、ビジネス・インテリジェンス(BI)やカスタマー・リレーションシップ・マネジメント(CRM)など、他のJ.D. Edwards製品の認証システムとリンクするために使用されます。Inherited Trustシステムを使用すると、ユーザーはJ.D. Edwardsポータルにログインするだけで、このシステムを使用する他の製品に対して自動的に認証され、何度もログインしなくても製品間を移動できます。各システムは、同じシークレット・エンタープライズ・キーおよびユーザーIDを使用して構成する必要があります(ユーザー・パスワードは、異なってもかまいません)。BIとCRMの構成方法については、該当製品の構成ガイドを参照してください。

下記の手順に従い、サンプル・ファイルを使用して、次の2つの新規サブリットをweb.xmlファイルに追加します。

- ・ oneworld.owportal
- ・ portal

この2つのサーブレットでは、Inherited Trustの構成が定義されます。サーブレットは1つで済む場合もありますが、最大限の互換性を確保するには両方を指定することをお勧めします。

▶ J.D. Edwardsポータル上でInherited Trustシステムをセットアップするには

1. /JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/Web-INFディレクトリに移動します。
JASクラス・ファイルとリソース・ファイルがインストール時にデプロイされたディレクトリです。
2. テキスト・エディタで、このディレクトリにあるweb.xmlファイルを開きます。

注意

このファイル内の最初のサーブレットServlet Proxy Servletは修正しないでください。このサーブレットは、インストール・プロセス中にJ.D. Edwardsインストーラにより作成されており、重要な構成設定が含まれています。

3. 下記のサンプル・ファイルをテンプレートとして使用し、web.xmlファイルにoneworld.owportal servletを追加します。このサーブレットは、ファイルの最後の/servlet>終了タグと</web-app>終了タグの間に挿入してください。

次の設定を使用します。

- Servlet ID: Servlet_2

このサーブレットIDが既に存在する場合は、次の連番を選択します。

- servlet-name、display-name、servlet-class:
com.jdedwards.oneworld.owportal.InheritedTrustManagerServlet
- init-parameter id: 排他IDを選択します。
- param-name: secretEnterpriseKey
- param-value: 任意エンタープライズ・キー値を設定します。
- load-on-startup: 0

次のコードは、Servlet_2の例を示しています。

```
<servlet id="Servlet_2">
<servlet-name>com.jdedwards.oneworld.owportal.InheritedTrustManagerServlet
</servlet-name>
<display-name>com.jdedwards.oneworld.owportal.InheritedTrustManagerServlet</display-name>
<servlet-class>com.jdedwards.oneworld.owportal.InheritedTrustManagerServlet</servlet-class>
<init-param id="InitParam_2"> <param-name>secretEnterpriseKey</param-name>
<param-value>key</param-value>
<description>For Inherited Trust</description>
</init-param>
```

```
<load-on-startup>0</load-on-startup>
</servlet>
```

4. 次のサンプル設定を使用して、web.xmlにportalサーブレットを追加します。このサーブレットは、ファイルの最後の/servlet>終了タグと</web-app>終了タグの間に挿入してください。

次の設定を使用します。

- ・ Servlet ID: Servlet_3

このサーブレットIDが既に存在する場合は、次の連番を選択します。

- ・ servlet-name、display-name、servlet-class:
com.jdedwards.portal.InheritedTrustManagerServlet
- ・ init-parameter id: 排他IDを選択します。
- ・ param-name: secretEnterpriseKey
- ・ param-value: 任意エンタープライズ・キー値を設定します。
- ・ load-on-startup: 0

次のコードはServlet_3の例を示します。

```
<servlet id="Servlet_3">
<servlet-name>com.jdedwards.portal.InheritedTrustManagerServlet
</servlet-name>
<display-name>com.jdedwards.portal.InheritedTrustManagerServlet</display-name>
<servlet-class>com.jdedwards.portal.InheritedTrustManagerServlet</servlet-class>
<init-param id="InitParam_3"> <param-name>secretEnterpriseKey</param-name>
<param-value>key</param-value>
<description>For Inherited Trust</description>
</init-param> <load-on-startup>0</load-on-startup>
</servlet>
```

5. 変更内容をweb.xmlに保存します。
6. Webアプリケーション・サーバーを再起動します。

Webサーバーのチューニング

ここでは、下記のパラメータをチューニングすることで、Webサーバーのパフォーマンスを最大限まで高める方法について説明します。

- ・ [jas.ini設定のチューニング - ページ \[103\]](#)
- ・ [Java仮想マシンのチューニング - ページ \[104\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバーのチューニング - ページ \[104\]](#)
- ・ [シリアル化オブジェクト・データベースのチューニング - ページ \[105\]](#)

jas.ini設定のチューニング

パフォーマンスを最適化するために、jas.iniファイルを開いて次の設定を変更します。

[JDENET]

- ・ `maxPoolSize= 50`

この値はデフォルト値の30から変更してください。変更すると、エンタープライズ・サーバーへの接続数が増加します。

- ・ `maxConnection= 150`

作成できるJDBCデータベース接続の最大数です。

[LOGS]

- ・ `Debug= FALSE`
- ・ `Log`および`Debuglog`パラメータをコメント化します。

[PORTALCONFIGURATION]

- ・ `MaxComponentThreadPool=`

ユーザー側にOneWorld/ERPとURIの多数のコンポーネントがあり(ワークスペースごとに10以上)、100人以上の同時ユーザーが予想される場合は、この数値をデフォルトの100から増やします。この値を101以上に増やすと、最初は効率が向上しますが、ある時点を超えると低下します。

Java仮想マシンのチューニング

仮想マシン(VM)の最適なメモリ構成は、実行するVMが単一か複数か、HTMLクライアントがスタンドアロン構成で動作するかポータル経由で動作するかに応じて異なります。

単一VMのチューニング

単一VMが動作するシステム上で、次の操作を行います。

- HTMLクライアントをスタンドアロン構成で実行している場合は、最小および最大ヒープ・サイズを512MBに設定します。
- 1.5GB以上のRAMを搭載したマシン上でポータルを介してHTMLクライアントを実行している場合は、最小および最大ヒープ・サイズを1024MBに設定します。RAMの小さいマシンでは、512MBに設定してください。

複数VMが動作するシステムのチューニング

複数VMが動作しているシステムの場合は、VMごとに1GB以上のRAMを確保し、各VMを次のメモリ・サイズで構成することをお勧めします。

- スタンドアロンHTMLクライアント: 512M
- Portal経由のHTMLクライアント: 768M

4方向プロセッサの場合、ポータルではオペレーティング・システム用に1GB、HTMLクライアントではオペレーティング・システム用に2Gが残ります。経験上、システム上のすべてのVMIに、システム・メモリの%以上を割り当ててください。

HTMLクライアントの動作はVMごとに512MBで最適になり、HTMLクライアント付きポータルの動作はVMごとに1GBで最適になります。

エンタープライズ・サーバーのチューニング

エンタープライズ・サーバー上で、3～5人のユーザーを予想するように各カーネルを構成します。

DB2®/UDBの場合のみ

初期インストール後にOneWorld/ERP™エンタープライズ・サーバーの構成を修正している場合は、次の構成パラメータをチェックして、OneWorld/ERP™の要件を満たしていることを確認してください。

データベース・マネージャ構成

パラメータ	OneWorld/ERP™のデフォルト設定
query_heap_sz	8000

データベース構成(OWSH9)

パラメータ	OneWorld/ERP™のデフォルト設定
applheapsz	6000
locklist	2000
locktimeout	60

シリアル化オブジェクト・データベースのチューニング

すべてのシリアル化オブジェクトを最初に生成するときには、F989999テーブルとF989998テーブルに多数の行が挿入されます。コストを考慮してデータベースを最適化している場合は、アクセス・パスを最適化するためにテーブル統計を更新する必要があります。

シリアル化オブジェクト・データベースをチューニングするには、データベース管理者は次のいずれかのセクションの手順を実行する必要があります。

- ・ [DB2/UDBのチューニング - ページ \[105\]](#)
- ・ [Oracle9iのチューニング - ページ \[106\]](#)

DB2/UDBのチューニング

DB2/UDBでは、デフォルトでコストベース最適化が使用されるため、統計を更新する必要があります。次のタスクをエンタープライズ・サーバー上で実行します。

▶ DB2/UDBをチューニングするには

1. DB2/UDBのインスタンス所有者 (db2inst1など) としてログインします。
2. [コマンド プロンプト] から、次のコマンドを入力してデータベース・サーバーに接続します。
 > Ø db2 connect to JDE9 user username using password
3. 次のコマンドを入力して統計を更新します。
 > db2 "runstats on table PD9.f989999"
 > db2 "runstats on table PD9.f989998"

注意

上記のコマンドは、環境がPD9の場合です。シリアル化オブジェクトが別の環境にある場合は、PD9を正しい環境で置き換えてください。

このプロセスは、完了までに数分かかることがあります。

Oracle9iのチューニング

Oracleでは、デフォルトでコスト・ベースの最適化が使用されます。ただし、OneWorld/ERPエンタープライズ・サーバーをインストールすると、インストール・プロセスによりデータベースがルール・ベースの最適化に自動的に変更され、チューニングする必要はありません。

次のタスクを実行して最適化の設定をチェックし、コスト・ベースの最適化を使用する場合はデータベースのチューニングを行います。

- ・ [最適化設定の確認 - ページ](#) [106]
- ・ [統計の更新 - ページ](#) [106]

最適化設定の確認

次のどちらかの方法で設定を確認します。

▶ init.oraファイルのパラメータ設定をチェックするには

1. iinit.oraファイルを開き、パラメータ名optimizer_modeを検索します。
値がruleに設定されている場合、最適化モードはルールベースであり、次の統計更新ステップを実行する必要はありません。
2. このパラメータが見つからない場合や、異なる値に設定されている場合は、「[統計の更新 - ページ](#) [106]」のタスクを実行します。

▶ データベースをクエリーするには

1. sqlplusを使用してデータベース・サーバーにログインし、次のステートメントを入力します。

```
select name, value from v$parameter where name = 'optimizer_mode';
```
2. 値がruleの場合、統計を更新する必要はありません。他の値に設定されている場合は、次のタスクを実行して統計を更新します。

統計の更新

1. 次のコマンドを入力してデータベース・サーバーにログオンします。

```
> sqlplus username@connection_string/password
```
2. 次のコマンドを入力して統計を更新します。

```
> analyze table PD9.f989999 compute statistics;  
> analyze table PD9.f989998 compute statistics;
```

注意

上記のコマンドは、環境がPD9の場合です。他の環境の場合は、PD9を正しい環境で置き換えてください。

このプロセスは、完了までに数分かかることがあります。

付録 A. jas.iniファイルのパラメータと値

jas.iniファイルでは、Webサーバーからエンタープライズ環境に通信できるように、COMおよび他のWebサーバー固有のプロパティが定義されています。また、このファイルはインストールの成否を左右するものです。重要な設定が正しくなかったりブランクになっていると、Webサーバーは動作しません。ここでは、重要な設定をセクション別に表形式で説明します。

Javaサーバーのインストーラを使用してWebサーバーをインストールするときには、jas.iniファイルが自動的に更新されます。ただし、インストール後に、テキスト・エディタを使用してjas.ini設定を修正できます。jas.iniファイルの機能は、OneWorld/ERPエンタープライズ・サーバーのjde.iniファイルに似ています。

注意

ERP以降は、jas.iniファイルの多数の設定が新規のファイルJDBj.iniに移動しています。この新規ファイルについては、「Appendix C: jdbj.iniファイルのパラメータと値」を参照してください。

jas.iniファイルを構成するには、次の操作を実行する必要があります。

- ・ インストール環境に固有のサーバー名を[SECURITY]および[SERVER]セクションのパラメータに追加します。
- ・ パス名固有の各種設定のパス名を確認します。J.D. Edwardsの推奨に従っていれば、これらのパスを大幅に変更する必要はありません。
- ・ TCP/IP接続用のポート番号を確認します。

ヒント

通常は、次の情報が含まれるように.iniファイルにコマンド行を追加してください。

- ・ 現行のJASパッケージのバージョン(CDに貼付されているラベルを参照)
- ・ ファイルの手動更新日
- ・ 更新者名

次の表は、Webサーバーで使用されるjas.ini設定をまとめたものです。

セクション	説明
[DB SYSTEM SETTINGS]	ERP9以降、これらの設定は新規のファイルJDBj.iniの次のセクションにあります。 [JDBj-BOOTSTRAP SESSION]

	[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]
[SECURITY] - ページ [111]	OneWorld ERPセキュリティ・サーバー情報が含まれます。
[OWWEB] - ページ [114]	Webサーバー固有の設定。
[PORTALCONFIGURATION] - ページ [118]	<p>このオプション・セクションは、標準jas.iniファイルには含まれていません。</p> <p>J.D. Edwardsポータルオプション設定が含まれます。このセクションに示されている設定はデフォルト設定であり、jas.iniの一部として組み込む必要はありません。つまり、jas.iniで値を指定しなければ、ポータルではこのセクションに示されているデフォルト設定が自動的に使用されます。</p> <p>ただし、jas.iniから読み取れる値を修正するサイトでは、そのカスタム・インストールに合わせて正しい値を入力および修正する必要があります。また、将来のインストールではカスタム修正が保存されない可能性があるため、アップグレード前にjas.iniのコピーを保存しておく必要があるの で注意してください。</p>
[CACHE] - ページ [127]	HTTPセッションの設定
[DB CONNECTION POOL]	<p>DB接続プールでは、データ・ソース、ユーザーID、およびパスワードに基づいて接続グループが管理されます。この設定を使用すると、管理者は使用可能にする接続数を調整できます。使用されない接続を維持する期間は、Connectionプロパティを使用してCACHEセクションで指定します。また、このセクション内で構成されるプール・クリーナー・プロセスにより、プールの接続が指定した間隔でスケジュールに従ってチェックされます。プール・クリーナーにより、適用可能なSQLステートメントにより無効と判断された接続が置換されます。デフォルトでは、プール・クリーナーは無効になっています。有効化するには、ValidationString.xプロパティを少なくとも1つは指定する必要があります。</p> <p>ERP9以降は、このセクションはJDBj.iniファイルに移動され、名前が変更されています。この新規セクションについては、「[JDBj-CONNECTION POOL]」を参照してください。</p>
[JDBC Drivers]	ERP9以降は、このセクションはJDBj.iniファイルに移動され、名前が変更されています。この新規セクションについては、「[JDBj-JDBC DRIVERS]」を参照してください。
[JDBC URL]	ERP9以降は、このセクションはJDBj.iniファイルに移動され、名前が変更されています。この新規セクションについては、「[JDBj-SPEC DATA SOURCE]」を参照してください。
[SERVER COMPONENTS] - ページ [128]	Webサーバー・パッケージをロードします。このセクションは変更しないでください。
[JDENET] - ページ [129]	WebサーバーでOneWorld/ERPエンタープライズ・サーバーと通信するための値を指定します。

[SERVER] - ページ [130]	WebサーバーでOneWorld/ERPエンタープライズ・サーバーからデータ辞書エラーの記述を取り込むための値を指定します。
[LOGIN] - ページ [131]	ログインとローカル・ディレクトリの設定が含まれています。
[LOGS] - ページ [131]	デバッグ・ログを有効化して、ログ・ファイルのロケーションを指定します。
[TRANSACTIONS] - ページ [133]	JASでトランザクション処理をカスタマイズするための構成設定が含まれます。
[JAS Instance]	このオプション・セクションは、標準jas.iniファイルには含まれません。 リダイレクト機能を使用して複数のJASインスタンスを定義するための設定が含まれます。複数のインスタンスを定義して、パフォーマンスを改善し、多数のユーザー向けにインストール環境を拡張できます。複数のJavaインスタンス間でユーザーを割り当てるためのデフォルト・メカニズムは「ラウンド・ロビン」、つまり順次選択方式です。
[JAS Weight]	このオプション・セクションは、標準jas.iniファイルには含まれません。 リダイレクト機能を使用して複数のJASインスタンスのロード・バランシングを有効化するための設定が含まれます。
[Redirector]	このオプション・セクションは、標準jas.iniファイルには含まれません。 使用可能なWebサーバーがない場合の、リダイレクトによる転送先を指定します。通常、これは説明を提供するHTMLページです。
[WEB GUI] - ページ [133]	このセクションではWebのGUIインターフェイスのカスタマイズ方法とサービス・パック22で新しく加わった内容について説明します。

[SECURITY]

次の表は、Webサーバーの基本機能を提供する重要な設定を示します。

[SECURITY]		
パラメータ	推奨設定	説明
SecurityServer=	サイト依存の変数	OneWorld/ERPエンタープライズ・サーバーのインストール用に定義したセキュリティ・サーバーの名称を指定します。
Factory=	<ul style="list-style-type: none"> J.D. Edwards ERPと統合されているポータルの場合： com.jdedwards.system.security. 	<p>ユーザー名とパスワードの検証に使用するメソッドを指定します。</p> <p>メソッドはポータル構成に依存する</p>

[SECURITY]		
パラメータ	推奨設定	説明
	<p>SecurityServerProxyFactory</p> <ul style="list-style-type: none"> ポータル単体の場合: <p>com.jdedwards.system.security. SecurityServerDBFactory</p> <ul style="list-style-type: none"> セキュリティ・サーバーとしてiSeriesを使用するポータル単体の場合: <p>com.jdedwards.system.security. SecurityServerAS400Factory</p>	<p>ので注意してください。Factoryの値を指定しないと、デフォルトでJ.D. Edwards ERPと統合されているポータルの値に設定されます。</p>

次の表は、クリティカルではない設定を示しています。

[SECURITY]		
パラメータ	推奨設定	説明
NumServers=	1	<p>このWebサーバーにサインオンするユーザーに使用可能として定義する、OneWorld/ERPセキュリティ・サーバーの合計数を指定します。</p> <p>このパラメータを指定しないか、ブランクにした場合、デフォルト値は1で、サインオンはjas.iniの[SECURITY]セクションのSecurityServer=パラメータで定義されているプライマリ・セキュリティ・サーバーによって処理されます。</p>
SecurityServerN=	サイト依存の変数	<p>セカンダリ・セキュリティ・サーバー名を指定します。ユーザーがプライマリ・サーバーにサインオンできない場合に、有効なセカンダリ・サーバーへのフェールオーバーにサインオンする場合は、複数のセカンダリ・サーバーを定義できます。</p> <p>Nに有効な値は1～nです。</p> <p>1. 最初のセカンダリ・セキュリティ・サーバーを定義します。</p>

[SECURITY]		
パラメータ	推奨設定	説明
		<p>2. 第2のセカンダリ・セキュリティ・サーバーを定義します。</p> <p>n 順次アクセスされるセキュリティ・サーバーを必要な数だけ定義します。</p>
UserLogonCookie=	FALSE	<p>ユーザー・サインオン情報がHTMLクライアント・マシン上の暗号化Cookieに保存されるかどうかを定義します。この情報には、ユーザー名、パスワード、および環境が含まれます。</p> <p>有効な値は次のとおりです。</p> <p>TRUE ユーザー情報は、ログイン画面に自動入力される暗号化Cookieに保存されます。</p> <p>DIRECT ユーザーはCookieのログイン情報にアクセスし、ログイン画面をバイパスできます。</p> <p>FALSE ユーザー情報は暗号化Cookieに保存されません。JASリダイレクト使用時には、この設定を使用する必要があります。</p>
CookieLifeTime unit is	"day"	CookieLifeTime=パラメータで使用する時間の単位を指定します。
CookieLifeTime=	7	Cookieが失効するまでの期間を指定します。この値の単位には、CookieLifeTime unit isパラメータの値が使用されます。
Data Source=	"System - B9"	セキュリティ・テーブルへの接続に使用するデータ・ソースを指定します。
User=	"JDE"	<p>データベース・ユーザーIDを指定します。</p> <p>この設定は、ポータル単体の場合にのみ使用されます。</p>

[SECURITY]		
パラメータ	推奨設定	説明
Password=	"JDE"	データベース・パスワードを指定します。 この設定は、ポータル単体の場合にのみ使用されます。

[Security]セクションの構成は、ユーザー認証に使用するセキュリティ・サーバーのタイプに応じて異なります。次に基本的な構成の例を示します。

OneWorldセキュリティ・サーバーを使用する場合

```
[Security] Factory=com.jdedwards.system.security.SecurityServerProxyFactory
NumServers=3
SecurityServer=JDED
SecurityServer1=JDEC
SecurityServer2=corowhp
```

データベース・セキュリティ・サーバーを使用する場合（ポータル単体）

```
[Security]
Factory=com.jdedwards.system.security.SecurityServerDBFactory
DataSource=System-Security
User=JDE
Password=JDE
```

ポータル単体でデータベース・セキュリティ・サーバーを指定すると、システムではデータベース・プロキシ・ユーザーのJava実装が使用されます。

iSeriesセキュリティ・サーバーを使用する場合（ポータル単体）

```
[Security] Factory=com.jdedwards.system.security.SecurityServerAS400Factory
SecurityServer=JDEC
```

SecurityServer設定でiSeriesセキュリティ・サーバー名を指定します。

[OWWEB]

次の表は、Webサーバーの基本機能を提供する重要な設定を示します。

[OWWEB]		
パラメータ	推奨設定	説明
PathCodes=	('JD9','DV9','PY9')	このキーでは、標準J.D. Edwardsパス・コードをリストします。標準パス・コードを使用する場合、これらの値を修正する必要はありません。このキーを修正する場合は、OneWorld/ERPに有効なパス・コードを指定する必要があります。

[OWWEB]		
パラメータ	推奨設定	説明
		デフォルト環境はパス・コードで示されます。この値が空の場合、使用可能なすべての環境が特定のユーザーまたはグループに使用可能になります。各パス・コードは、一重引用符で囲んでカンマで区切ります。
MO QUEUE=	サイト依存のパス	<p>Webサーバー上のメディア・オブジェクト・ディレクトリの位置を識別します。このパスは、Webブラウザ用の仮想パス/jde/moqueue/に変換する必要があります。</p> <p>Webサーバー・プロセスには、このパスの読取り権限と作成権限が必要です。</p> <hr/> <p>注意</p> <p>このディレクトリの作成を必要とする場合があります。</p> <hr/> <p>デフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/moqueue</p>
FtpPort=	21	FTP用のデフォルト・ポートを指定します。
FtpUsr=	anonymous	メディア・オブジェクト・ファイル・サーバーへのFTPアクセスに使用するユーザーIDを指定します。
FtpPwd=	anonymous	メディア・オブジェクト・ファイル・サーバーへのFTPアクセスに使用するパスワードを指定します。
UseMOWinNTShare	FALSE	WebサーバーでWindowsのファイル共有メカニズムの代わりにFTPアクセスを使用するように指定します。
InYourFaceError=	TRUE	<p>Webサーバーで、Webインターフェイス関連のエラー・メッセージを現行フォームの上部に表示するように指定します。</p> <p>この設定をFALSEに変更すると、代わりに右上隅に小さい赤アイコンが表示されます。このアイコンをクリックすると、エラー・メッセージのテキストが表示されます。</p>

次の表は、クリティカルではない設定を示しています。

パラメータ	推奨設定	説明
LargeLoginImage	/jde/share/images/ jdelogin_large.gif	HTTPサーバーのドキュメント・ルートへの相対URLを指定します。標準デスクトップ・ブラウザ (IE 5、Netscape 6) を使用している場合は、このイメージがログイン・ページに表示さ

パラメータ	推奨設定	説明
		<p>れます。</p> <hr/> <p>ヒント</p> <p>ポータル単体の場合は、別のグラフィックを指定できます。次に例を示します。</p> <p>/jde/share/images/ portallogin_large.gif</p>
SmallLoginImage	/jde/share/images/ jdelogin_small.gif	<p>HTTPサーバーのドキュメント・ルートへの相対URLを指定します。普及型デバイス(PocketPC、Windows CE)を使用している場合は、このイメージがログイン・ページに表示されます。</p> <hr/> <p>ヒント</p> <p>ポータル単体の場合は、別のグラフィックを指定できます。次に例を示します。</p> <p>/jde/share/images /portallogin_small.gif</p>
F0005Prefix=	DR	ユーザー定義コード・テーブル(F0005)のカラム・プレフィックス。
F0004Prefix=	DT	ユーザー定義コード・タイプ・テーブル(F0004)のカラム・プレフィックス。
MaxUser=	100	OneWorld/ERP(インターネット)ユーザーの最大数。
PrintImmediate=	FALSE	FALSEに設定すると、エンタープライズ・サーバーではPDFファイルが生成されるだけです。TRUEに設定すると、エンタープライズ・サーバーではPDFファイルが生成され、PostScriptに変換されます。UBEジョブのPDLまたはライン出力です。
KeepUBE=	TRUE	FALSEに設定すると、UBEジョブの完了時にJDE.LOGおよびJDEDEBUG.LOGファイルが削除されます。TRUEに設定すると、UBEジョブの完了時にJDE.LOGおよびJDEDEBUG.LOGファイルが保存されます。

パラメータ	推奨設定	説明
UBQueue=	QB9	UBEジョブが投入されるバッチ待ち行列。
SystemDateFormat=	MDE	システム日付の形式を指定します。
SystemDateSeparator=	/	システム日付区切り文字を指定します。
HelpPath=	/jde/owhelp/e	<p>ヘルプ・ファイルのディレクトリ・パスを指定します。この設定の構文は次のとおりです。</p> <p>http://[machine]/[path]/</p> <p>HelpPathの設定を指定しないか、デフォルト設定の/jde/owhelp/eを使用すると、WebサーバーではJASサーバーの現行インスタンスに基づいてヘルプ・パスが作成されます。</p> <p>たとえば、WebサーバーのURLが次の場合、</p> <p>http://machinename:82/</p> <p>Webサーバーではヘルプ・パスのURLが次のように想定されます。</p> <p>http://machinename:82/jde/owhelp/e</p> <hr/> <p>注意</p> <p>eは英語版ヘルプ・ファイルのデフォルト・パスです。他の言語を使用する場合は、eを使用言語を表す正しい記号で置き換えてください。</p> <hr/>
OWJRNL=	OWJRNL	<p>この設定は、iSeriesプラットフォーム上で実行中のWebサーバーにのみ適用可能です。AS/400のDB2データベース・レコードを更新するために手動コミットを有効化している場合は、この設定を使用して、Webサーバーで該当するiSeriesテーブルのJOURNALを有効化できます。</p> <p>この設定には、STRJOURNALストアド・プロシージャ用のAS/400ライブラリの名称を指定する必要があります。</p>
AutoPilotIDs=	FALSE	<p>この設定では、JavaサーバーでJ.D. Edwards AutoPilotツールを使用してHTMLクライアント・アクションのスクリプトを作成する場合に役立つIDが生成されるかどうかを制御します。有効な値は次のとおりです。</p>

パラメータ	推奨設定	説明
		FALSE JavaサーバーではAutoPilot IDは生成されません。 TRUE JavaサーバーでAutoPilot IDが生成されます。
AnonAccess=	TRUE	匿名ユーザー・アクセスを有効にします。
DefaultEnvironment=	サイト依存の変数	デフォルトのログイン環境。基本認証と併用されます。
InitialLanguageCode=	EN	初期ユーザー言語のISO言語コード。
LogoutProcessTimeout=	90	ユーザーがアクティブ化したビジネス関数が、ログアウト後も引き続き実行される秒数。
PPCSetDefaultFocus=	TRUE	この設定により、PocketPCデバイスの画面に仮想キーボードが表示されるかどうかは確定されます。デフォルト値はFALSEです。 この設定がFALSEの場合、PocketPCデバイスのフォームにはデフォルトのフォーカスが設定されず、画面にキーボードは表示されません。 この設定がTRUEの場合は、PocketPCにデフォルトのフォーカスが設定され、画面に仮想キーボードが表示されます。キーボードでPocketPCデバイスの貴重な領域が使用されますが、一部のカスタマーはスキャナーを使用して画面にデータを入力する際にデフォルトのフォーカスを必要とします。PocketPCデバイスでデフォルトのフォーカスが必要な場合は、この値をTRUEに設定してください。

[PORTALCONFIGURATION]

このセクションには、J.D. Edwardsポータルのオプション設定が含まれます。

Cisco LocalDirectorなどのロード・バランサを使用している場合は、localhost設定を指定する必要があります。

Portal Component Importerを使用している場合は、backup、jde、およびservlet設定を指定する必要があります。

これらの設定を除き、このセクションに示されるのはすべてデフォルト設定であり、jas.iniの一部として組み込む必要はありません。つまり、jas.iniで値を指定しなければ、ポータルではこのセクションに示されているデフォルト設定が自動的に使用されます。

ただし、jas.iniから読み取れる値を修正するサイトでは、そのカスタム・インストールに合わせて正しい値を入力および修正する必要があります。また、将来のインストールではカスタムな変更内容が保存されない可能性があるため、アップグレード前にjas.iniのコピーを保存しておく必要があるので注意してください。

次の設定は、J.D. Edwardsポータルインポート/エクスポート・コンポーネントを構成するには必須です。

[PORTALCONFIGURATION]		
パラメータ	推奨設定	説明
jde	/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war	JASインストール時に作成されるWebディレクトリ。Component Importer/Exporterは、このディレクトリで.html、.gif、.jpgファイルなどのHTMLリソースの検索と書き込みを行います。
servlet	/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/classes	ポータル・サーブレットが常駐し、アップデート・センターからのコンポーネントが格納されるディレクトリ。Component Importer/Exporterは、このディレクトリでサーブレットの検索と書き込みを行います。このディレクトリは、JAS管理者が作成し、JDE WebアプリケーションのCLASSPATHに組み込まれるように構成する必要があります。
backup	/backup	Component Importerによって上書きされるファイルの保存場所。これにより、上書きされたファイルのバックアップが提供されます。 このディレクトリはCLASSPATHに指定せず、Webサーバーからは参照可能にしないでください。
OneWorldPortal	TRUE	ポータルに対して、J.D. Edwards ERP製品がWebサーバーと統合されているかどうかを指示します。この設定をjas.iniファイルで指定しなければ、値TRUEが使用されます。この値をFALSEに設定すると、OneWorld/ERPシステムが必

[PORTALCONFIGURATION]		
パラメータ	推奨設定	説明
		要であることを示すフラグが付いたポータル・コンポーネントは実行されません。

次の表は、クリティカルではない設定を示しています。

パラメータ	推奨設定	説明
Admin (SP 13.1以上の場合)	サイト依存の変数、デフォルト値なし	ユーザーIDを 文字で区切ったリストを指定します。これらのユーザーは、リレーションシップに関係なくすべてのコンポーネントとワークスペースを管理できます。
cache_workspace_purge	3600000	ワークスペースが削除される前にアクセスされないままキャッシュに残っているミリ秒数。0(ゼロ)に設定すると、ワークスペースはキャッシュから除去されません。 この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。
cache_workspace_expire	900000	期限付きコンポーネントについて、ワークスペースが削除されるまでの、最後にロードされたタイムスタンプに加算されるミリ秒数。コンポーネントを期限付きにするには、 public long getLastLoadedTimestamp();を実装します。ユーザーがアクセスしない限り、ワークスペースは期限切れになりません。0(ゼロ)に設定すると、ワークスペースはキャッシュで期限切れになりません。 この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。
cache_workspace_timeout	300000	項目が除去対象か期限切れかを

		<p>キャッシュ内でチェックするまでシステムが待機するミリ秒数。この値が小さいほど、メモリ使用効率は向上しますが、キャッシュが低速になります。0(ゼロ)に設定すると、ワークスペースはキャッシュから除去されず、期限切れにもなりません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_workspace_refresh	0	<p>すべてのワークスペースがキャッシュから削除されるまでのミリ秒数。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_component_purge	3600000	<p>コンポーネントが削除される前にアクセスされないままキャッシュに残っているミリ秒数。0(ゼロ)に設定すると、コンポーネントはキャッシュから除去されません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_component_expire	900000	<p>期限付きコンポーネントについて、コンポーネントが削除されるまでの、最後にロードされたタイムスタンプに加算されるミリ秒数。コンポーネントを期限付きにするには、 public long getLastLoadedTimestamp();を実装します。ユーザーがアクセスしない限り、コンポーネントは期限切れになりません。0(ゼロ)に設定すると、コンポーネントはキャッシュで期限切れになりません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_component_timeout	300000	<p>項目が除去対象か期限切れかをキャッシュ内でチェックするまでシステムが待機するミリ秒数。この値が</p>

		<p>小さいほど、メモリ使用効率は向上しますが、キャッシュが低速になります。0(ゼロ)に設定すると、コンポーネントはキャッシュから除去されず、期限切れにもなりません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_component_refresh	0	<p>すべてのコンポーネントがキャッシュから削除されるまでのミリ秒数。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_itrust_purge	60000	<p>継承によるトラスト・セッションが削除される前にアクセスされないままキャッシュに残っているミリ秒数。0(ゼロ)に設定すると、継承によるトラスト・セッションはキャッシュから除去されず、期限切れにもなりません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスとセキュリティが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_itrust_expire	0	<p>期限付きコンポーネントについて、継承によるトラスト・セッションが削除されるまでの、最後にロードされたタイムスタンプに加算されるミリ秒数。コンポーネントを期限付きにするには、public long getLastLoadedTimestamp();を実装します。ユーザーがアクセスしない限り、継承によるトラスト・セッションは期限切れになりません。</p> <p>このセクションは、J.D. Edwardsから特に指示されない限り修正しないでください。</p>
cache_itrust_timeout=	30000	<p>項目が除去対象か期限切れかをキャッシュ内でチェックするまでシステムが待機するミリ秒数。この値が小さいほど、メモリ使用効率は向上しますが、キャッシュが低速になり</p>

		ます。0(ゼロ)に設定すると、継承によるトラスト・セッションはキャッシュから除去されず、期限切れにもなりません。
cache_itrust_refresh	0	すべての継承によるトラスト・セッションがキャッシュから削除されるまでのミリ秒数。
cache_entbutton_purge	3600000	<p>エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンが削除される前にアクセスされないままキャッシュに残っているミリ秒数。0(ゼロ)に設定すると、エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンはキャッシュから除去されません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。この値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_entbutton_expire	0	<p>期限付きコンポーネントについて、エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンが削除されるまでの、最後にロードされたタイムスタンプに加算されるミリ秒数。コンポーネントを期限付きにするには、public long getLastLoadedTimestamp();を実装します。0(ゼロ)に設定すると、エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンはキャッシュで期限切れになりません。</p> <p>0(ゼロ)に設定すると、エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンはキャッシュで期限切れになりません。</p>
cache_entbutton_timeout	900000	項目が除去対象か期限切れかをキャッシュ内でチェックするまでシステムが待機するミリ秒数。この値が小さいほど、メモリ使用効率は向上しますが、キャッシュが低速になります。0(ゼロ)に設定すると、エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンはキャッシュで期限切れにならず、除去もされません。
cache_entbutton_refresh	0	エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンがすべてキャッシュから削除されるまでのミリ秒数。

pagegreeting	Welcome to your Portal	新規ワークスペースを追加するときのデフォルト・ページに表示される挨拶メッセージ。この設定のデフォルト値はブランクです。
localhost	サイト依存の変数	Cisco LocalDirectorルーターを使用している場合は、この設定を組み込む必要があります。Webサーバーのポートが80以外の場合は、ポートを指定する必要があります。構文はip_address:portで、ip_address:portはローカルのOneWorld/ERP Javaサーバー・マシン (Cisco LocalDirectorマシンではなく) を指します。ポータル・コードでマシン要求の出所を判別し、それに従って応答をルーティングできるようにするには、この設定が必須です。 たとえば、次のように入力します。 10.0.110.79:85
styleurl	/jde/owportal/portal.css	ポータル・スタイルシートのURI。 相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。
hlpimg	/jde/owportal/images/ help2.gif	コンポーネント・ツールバーのヘルプ・イメージ名。 相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。
perimg	/jde/owportal/images/ edit2.gif	/jde/images/edit2.gifなど、デフォルトのカスタマイズ・アイコン・ファイルのパスと名称。 相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。
maximg	/jde/owportal/images/ maximize2.gif	/jde/images/maximize2.gifなど、デフォルトの拡張アイコン・ファイルのパスと名称。 相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。
minimg	/jde/owportal/images/ minimize2.gif	/jde/images/minimize2.gifなど、デフォルトの連絡先アイコン・ファイルのパスと名称。

		相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。
resimg	/jde/owportal/images/ restore2.gif.	/jde/images/restore2.gifなど、デフォルトの復元アイコン・ファイルのパスと名称。 相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。
retimg	/jde/owportal/images/ return.gif.	/jde/images/return.gifなど、デフォルトのリターン・アイコン・ファイルのパスと名称。 相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。
ShowCurrentEnvironmentRole	FALSE	環境表示。TRUEに設定すると、ワークスペース・ナビゲーション・バーに現行の環境が表示されます。
ShowSignin	TRUE	ユーザーが匿名でログインしたときに、ワークスペース・ナビゲーション・バーに標準ログインのハイパーリンクを表示します。
corplogourl	/jde/owportal/images/jdelogo.gif	デフォルトの会社ロゴのURL。このイメージは、現行のワークスペースでイメージが指定されていない場合に使用されます。 相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。
corplogolinkurl		デフォルトの会社ロゴのハイパーリンクのURL。このリンクは、現行のワークスペースでリンクが指定されていない場合に使用されます。 この設定にはデフォルト値がありません。 相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。
DataMigrationHasOccurred	これはシステム設定です。この設定の修正やjas.iniファイルへの追加は行わないでください。	B9のプリスティン(JDEオリジナル)コンポーネントとワークスペースのデータが更新されている場合はTRUE。
DefaultWorkspace		他のワークスペースが指定されていない場合や、

		<p>DefaultWorkspaceOnlyがTRUEに設定されている場合に表示されるワークスペース。</p> <p>この値は、ワークスペース名ではなくワークスペースIDに設定してください。</p> <p>このパラメータの設定には大文字を使用します。</p> <p>この設定にはデフォルト値がありません。</p>
DefaultWorkspaceOnly	FALSE	デフォルトのワークスペースへのアクセスのみを許可します。
ForceDefaultWorkspace	TRUE	DefaultWorkspaceを入力してForceDefaultWorkspaceをTRUEに設定すると、ユーザーにはログイン時に最初のワークスペースとして常にデフォルト・ワークスペースが表示されます。
edting	/jde/owportal/images/ edit2.gif	<p>デフォルトの編集アイコンのURL。編集アイコンは、ユーザーがオブジェクトを変更するためのボタンに使用されます。</p> <p>相対URLと完全修飾URLの両方が有効です。</p>
NumberOfIcons	34	エンタープライズ・ナビゲーション・バーのアイコンの一時変更数。
colorscheme1	Default #FFFFFF #00009C #0063CE #080029 #CECECE #FFFFFF #636363 #FFFFFF background.jpg /jde/owportal/owportal.css	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名称、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシートのURLからなっています。
colorscheme2	Springtime #FFFFFF #218C7B #84BDB5 #006B63 #CECECE #FFFFFF #FF6B29 #FFFFFF springtimebkgd.gif /jde/owportal/portal.css	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名称、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシートのURLからなっています。

colorscheme3	Bluedot #FFFFFF #4A5A9C #849CC6 #001873 #CECECE #FFFFFF #737BB5 #FFFFFF bluedotbkgd.gif /jde/owportal/portal.css	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名称、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシートのURLからなっています。
colorscheme4	Techno #FFFFFF #006363 #739C9C #004242 #CECECE #FFFFFF #B5C6C6 #FFFFFF technobkgd.gif /jde/owportal/portal.css	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名称、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシートのURLからなっています。
colorscheme5	Cityscape #FFFFFF #FF9C00 #FFC66B #000063 #CECECE #FFFFFF #636363 #FFFFFF cityscapebkgd.gif /jde/owportal/portal.css	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名称、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシートのURLからなっています。

[CACHE]

各キーで指定する値はミリ秒単位なので注意してください。たとえば、60000ミリ秒は1分です。

次の設定は、Webサーバーの基本機能には影響しません。

注意

ERP9までのこのセクションにあった設定の多くは、JDBj.iniファイルの次のセクションに移動しています。

- ・ [JDBj-CONNECTION POOL]
- ・ [JDBj-RUNTIME PROPERTIES]

パラメータ	推奨設定	説明
UserSession=	1200000	非アクティブなユーザー・セッションがキャッシュからクリーンアップされるまでのミリ秒数。このユーザー・セッションはJ.D. Edwardsコードのサーバー側で管理され、WebSphereのHTTPセッションとは異なります。UserSessionの設定値を、WebSphere HTTPセッションのタイム

		<p>アウト(Invalidate timeout)設定値の2倍にすることをお勧めします。</p> <hr/> <p>注意</p> <p>この値は、JavaサーバーがWebSphereより先にタイムアウトにならないように、WebSphereの[Invalidate Time]設定より大きい値に設定する必要があります。WebSphereでの[Invalidate Time]設定をチェックするには、[WebSphere Administrative Console]を開き、アプリケーション・サーバー(AS_JDEdwards_1)までノードを展開します。次に、Session Manager Servicesノードをクリックして[Advance]タブをクリックします。[Invalidate Time]が有効かされ、正しい値(分単位)に設定されていることを確認してください。</p> <hr/> <p>デフォルト値: 12000000</p> <p>UserSessionには、常にWebSphereでのHTTPセッション・タイムアウトの[Invalidate Timeout]設定より大きい値を設定する必要があります。</p> <p>変更の効果: [HTTP Session timeout]の値に達すると、JASはキャッシュからUserSessionを削除するように指示する通知を受け取ります。UserSession値を変更しても、この値がWebSphereでの[HTTP session timeout]の値よりも大きければ影響はありません。</p>
CacheCheck=	300000	<p>キャッシュに格納されている全オブジェクトの状況をチェックするミリ秒数。デフォルト値を使用することをお勧めします。</p> <p>デフォルト値: 300000</p> <p>最小値: 60000。60000未満の値を指定すると、CacheManagerがキャッシュに格納されている値をチェックする頻度が高くなりすぎて、JASサーバーのオーバーヘッドが大きくなります。</p> <p>最大値: 600000。600000を超える値を指定しないでください。CacheManager はキャッシュ内のオブジェクトの状況を頻繁にチェックできなくなり、無効なキャッシュが期限切れ後もキャッシュに残ることになります。</p> <p>リレーションシップ: この値は、JAS.INIファイルの他のパラメータには依存しません。</p> <p>変更の効果: この値を小さくすると、CacheManager はキャッシュに格納されている値を頻繁にチェックするため、JASサーバーにオーバーヘッドが発生します。この値を極端に大きくすると、CacheManagerはキャッシュ内のオブジェクトの状況を頻繁にチェックしなくなり、無効なオブジェクトが期限切れ後もキャッシュに残ることになります。</p>

[SERVER COMPONENTS]

[SECURITY]セクションでは次の設定を確認してください。jas.iniのこのセクションは、Webサーバーで環境変数の設定に使用されます。このセクションは、J.D. Edwardsから特に指示されない限り修正しないでく

ださい。

[SERVER COMPONENTS]

com.jdedwards.jas.UserManager

com.jdedwards.jas.JDBCProxy

com.jdedwards.jas.JDEORB

com.jdedwards.jas.DDValidation

com.jdedwards.jas.security.SecurityBroker

com.jdedwards.jas.UDCJDBC

com.jdedwards.jas.JDEUDCText

com.jdedwards.jas.JDEUpdates

com.jdedwards.jas.JDEQueries

com.jdedwards.jas.JDEOWDirect

com.jdedwards.jas.MenuServer

com.jdedwards.jas.ServerQuery

com.jdedwards.jas.JDESignon

[JDENET]

このセクションを使用するのは、ビジネス関数の実行とUBEの起動にJOWProxyサービスを使用しない場合のみです。

次の表は、Webサーバーの基本機能を提供する重要な設定を示します。

[JDENET]		
パラメータ	推奨設定	説明
serviceNameConnect=	6011	J.D. Edwardsエンタープライズ・サーバーがリスニングするTCPポート。この設定は環境に合わせて修正する必要があります。 デフォルトでは、このデフォルト・ポートの番号はOneWorld/ERPのリリースごとに1ずつ大きくなります。OneWorld/ERPの場合、デフォルト値は6011です。

次の表は、クリティカルではない設定を示しています。

パラメータ	推奨設定	説明
-------	------	----

enterpriseServerTimeout=	90000	タイムアウト条件が発生するまでのミリ秒数。
MaxPoolSize=	50	エンタープライズ・サーバーへの最大接続数。
TempFileDir=	/tmp	JDENET用の一時ディレクトリ。IFSシステム上の有効なディレクトリを入力する必要があります。

[SERVER]

このセクションを使用するのは、ビジネス関数の実行とUBEの起動にJOWProxyサービスを使用しない場合のみです。

次の表は、Webサーバーの基本機能を提供する重要な設定を示しています。

[SERVER]		
パラメータ	推奨設定	説明
GlossaryText Server=	サイト依存の変数	<p>このエントリでは、OneWorld/ERPがWebサーバー用の用語解説テキスト情報を提供するためにリスニングする、エンタープライズ・サーバーとポート番号を指定します。</p> <p>構文は次のとおりです。</p> <p>machine_name:6011</p> <p>machine_nameはサイトの有効なマシン名です。</p>

次の表は、クリティカルではない設定を示します。

パラメータ	推奨設定	説明
codePage=	1252	<p>用語解説テキスト情報の表示に使用するコード・ページ。サポートされるエンコード体系は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1252 英語と西ヨーロッパ言語 932 日本語 950 繁体字中国語

パラメータ	推奨設定	説明
		<ul style="list-style-type: none"> 936 簡体字中国語 949 韓国語

[LOGIN]

このセクションでは、ログイン・オプションとLocal Directorオプションを設定します。

パラメータ	推奨設定	説明
PassKey=	サイト依存の変数	Cookieの暗号化に使用されるキーの英数字の一時変更。
externalhost=	machine:port	ブラウザからのリソース要求について完全修飾URLの作成に使用されます。
DisplayEnvironment=	Administrator preference (管理者の作業環境)	<p>DefaultEnvironmentでデフォルト環境を設定している場合の環境表示ルール。</p> <p>Show: ユーザーはログイン時にデフォルト環境を一時変更できます。</p> <p>Hidden: ユーザーはログイン時に[Environment (環境)]ボックスを表示できません。</p> <p>ReadOnly: ユーザーはログイン時に環境設定を変更できません。</p> <p>UseDefault: ユーザーはログイン時に異なる環境を選択できますが、システムでは他のユーザー選択が一時変更され、最終的にはデフォルト環境にログインします。</p>
DisablePasswordAboutToExpire	TRUE	「password about to expire (パスワード失効間近)」の通知を抑止する一時変更。

[LOGS]

このセクションでは、Webサーバーに関連する各種ロギング機能のシステム依存値を設定します。

[LOGS]		
パラメータ	推奨設定	説明
Log=	サイト依存の変数	<p>jas.logファイルの位置と名称。パスには、システム上に存在するディレクトリを指定する必要があります。このパスをサイトのインストール環境と対照して確認してください。デフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/log/jas.log</p>
Debuglog=	サイト依存の変数	<p>jasdebug.logファイルの位置と名称。パスには、システム上に存在するディレクトリを指定する必要があります。このパスをサイトのインストール環境と対照して確認してください。デフォルト・パスは次のとおりです。</p> <p>/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/log/jasdebug.log</p>
Debug=	FALSE	<p>TRUE デバッグ・ロギングが有効です。</p> <p>FALSE デバッグ・ロギングが無効です。</p>
jdbcTrace=	FALSE	<p>TRUE JDBCステートメントのトレース・ログが、標準出力ログ・ファイルに書き込まれます。</p> <p>FALSE トレース・ログは書き込まれません。</p>
JasDBLogging=	1	<p>JAS DBのロギングなし。1 = ステートメント、UserSession。2 = ステートメント、UserSession、DataSource、パラメータ値。3 = 2 およびSELECTステートメント。</p>
stderr=	サイト依存の変数	<p>入力エラー用のWebSphereログ・ディレクトリを指定します。</p> <p>STDERRキーとSTDOUTキーは、WebSphereアプリケーション・サーバーの定義時にSTDERRおよびSTDOUTフィールドで指定したのと同じディレクトリを指す必要があります。通常、これはB9のサブディレクトリです。デフォルト・パスは次のとおりです。</p> <p>/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/log/stderr.log</p>
stdout=	サイト依存の変数	<p>出力エラー用のWebSphereログ・ディレクトリを指定します。</p> <p>STDERRキーとSTDOUTキーは、WebSphereアプリケーション・サーバーの定義時にSTDERRおよびSTDOUTフィールドで指定したのと同じディレクトリを指す必要があります。通常、これはB9のサブディレクトリです。デフォルト・パスは次のとおりです。</p> <p>/JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/log/stdout.log</p>
rtlog=	サイト依存の変数	<p>ランタイム・ログ・ファイルの位置と名称。デフォルト値は次のと</p>

[LOGS]		
パラメータ	推奨設定	説明
		おりです。 /JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/log/rt.log
rtdebug=	サイト依存の変数	ランタイム・ログ・デバッグ・ファイルの位置と名称。デフォルト値は次のとおりです。 /JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/log/rtdebug.log
rtdebugTrace=	TRUE	ランタイム・ログ・ファイルを有効化するかどうかを指定します。
rtlogType=	ALL	ランタイム・デバッグ・ログ・ファイルに記録できるイベントのタイプを指定します。“ALL”の代わりに、次の1つまたは複数の設定を入力できます。 BSFN TableIO SYSFUNC MISC ER EVENT

[TRANSACTIONS]

このセクションでは、JASでトランザクション処理をカスタマイズするための構成を設定します。

[TRANSACTIONS]		
パラメータ	推奨設定	説明
ReapInterval=	5	Transaction Reaperで破棄されたトランザクションをチェックする間隔(分単位)。有効な値:1～nの整数。デフォルト:5分。
MaxAge=	10	トランザクションの最大経過時間(分単位)。この時間より古いトランザクションは、TransactionReaperによりロールバックされます。有効な値:1～nの整数。デフォルト:10分。

[WEB GUI]

このセクションではWebのGUIインターフェイスのカスタマイズ方法とサービス・パック22で新しく加わった内容について説明します。

[WEB GUI]		
パラメータ	推奨設定	説明
bandwidth=	narrowまたはwide	bandwidth設定を使用して、帯域幅の低いネットワークを考慮してGUIインターフェイスをカスタマイズします。デフォルトでは、WebサーバーはHTML形式のすべてのOneWorld/ERPフォームにタブ修飾を使用しています。タブ修飾により隅の丸いタブが表

[WEB GUI]		
パラメータ	推奨設定	説明
		<p>示されますが、このフォーマットでの表示には大きい帯域幅が必要になります。</p> <p>bandwidthを“narrow”に設定するとタブ修飾が無効化され、タブ表示に使用される帯域幅が小さくなります。この設定では、HTMLフォームに表示されるタブは単純な長方形のボックス状になります。</p> <p>bandwidthを“wide”に設定すると、タブ修飾が有効化されます。</p> <p>この設定は任意です。設定しなければ、Web修飾はデフォルトでwideとなります。</p>

付録 B. サンプルjas.iniファイル

次のコードは、an iSeries Webサーバー用のjas.iniファイルのサンプルです。

注意

次のサンプルjas.iniは、当初はB7333 OneWorldシステム用に構成されていました。そのため、多数のパスとパラメータ値をERP 9.0に合わせて更新する必要があります。ERP 9.0で有効な値については、「Appendix A: jas.iniファイルのパラメータと値」を参照してください。

```
# Please refer to the JAS Installation Guide for detailed information on
# this file.
#
#

[SECURITY]
DataSource=System - B9
SecurityServer=
UseLogonCookie=FALSE
CookieLifeTime=7
SSOEnabled=FALSE
SSOUserIDOnly=FALSE
# set password only if SSOUserIDOnly is set to TRUE
Password=

[OWWEB]
PathCodes=('JD9','DV9','PY9','PD9')
MO QUEUE=/PeopleSoft/B7333/jdewww/moqueue
MAXUser=100
UseMOWinNTShare=FALSE
SystemDateFormat=MDE
SystemDateSeparator=/

# The HelpPath key determines where JAS looks for help files.
# Syntax: "http://[machine]/[path]/".
# Note, if you specify "/jde/owhelp/", this machine is assumed.HelpPath=/jde/owhelp/

# Library Name for the AS/400 STRJOURNAL stored procedure

[CACHE]
# These intervals are in milliseconds.For example,
60000ms = 1 minute
UserSession=2400000
CacheCheck=60000

[SERVER COMPONENTS]
```

```
#
# Do not modify this section
# com.jdedwards.jas.UserManager
com.jdedwards.jas.JDBCProxy
com.jdedwards.jas.JDEORB
com.jdedwards.jas.DDValidation
com.jdedwards.jas.security.SecurityBroker
com.jdedwards.jas.UDCJDBC
com.jdedwards.jas.JDEUDCText
com.jdedwards.jas.JDEUpdates
com.jdedwards.jas.JDEQueries
com.jdedwards.jas.JDEOWDirect
com.jdedwards.jas.ServerQuery
com.jdedwards.jas.JDESignon

[JDENET]
# Enterprise Server JDENET port serviceNameConnect=6009

# JAS Server JDENET Listening port serviceNameListen=6009

# Maximum number of dedicated kernel types maxKernelRanges=1

# Time out value for requests sent to the Enterprise Server enterpriseServerTimeout=90000

# Directory for JDENET temporary file tempFileDir=/tmp

# Clustered logical datasource retry interval ClusterRetryInterval=60000

# Dedicated Kernel Definitions
[JDENET_KERNEL_DEF1]
krnlName=XAPI
Kernel process
ClassName=com.jdedwards.runtime.virtual.xapi.PublishedMessageProcessor
startMessageRange=15001
endMessageRange=15250
maxNumberOfThread=3

[SERVER]
# Enterprise Server and port providing
Glossary Text information
glossaryTextServer=SERVERNAME:6009

# Encoding scheme
# 1252- English and Western European
# 932- Japanese
# 950- Traditional Chinese
# 936- Simplified Chinese
# 949- Korean codePage=1252

[LOGS]
log=/PeopleSoft/B7333/jas.log
debuglog=/PeopleSoft/B7333/jasdebug.log
```



```
Debug=FALSE
```

```
# The STDERR and STDOUT keys must point to the same directory that was supplied for the
# STDERR and STDOUT fields when defining the WebSphere Application Server.
# This is usually the INTERNET directory under B7333.
```

```
#
```

```
#stderr=/PeopleSoft/B7333/stderr.log
```

```
#stdout=/PeopleSoft/B7333/stdout.log
```

[JAS INSTANCE]

```
# This is for JAS redirector only
```

```
# RoundRobin will be used as default if there is no entry in [JAS WEIGHT].
```

```
# If redirect based on JAS instance weight, then each instance's weight must be specified,
```

```
# otherwise, weight 0 will be assumed, which means the server will not get any redirected request
```

```
# example:JAS1=http://127.0.0.1/jde
```

```
# Note:in this example, "JAS1" is the key, if weight will be given,
```

```
# this key must be used in [JAS WEIGHT] section to match this JAS instance
```

[JAS WEIGHT]

```
# The key must match the key in [JAS INSTANCE] section
```

```
# example:JAS1=2
```

```
# The weight is ratio based, for example:
```

```
# JAS1=2
```

```
# JAS2=1
```

```
# That means JAS1 will take as twice load as JAS2
```

[REDIRECTOR]

```
# interval unit is milliseconds Interval=5000
```

```
# This is the location that Redirector will redirect to, if no server is available.
```

```
# If it is empty, redirect will display a simple page telling user that no server is available
```

```
# example:NoServerAvailableURL=http://servername/path/noserver.html NoServerAvailableURL=
```

[TRANSACTIONS]

```
# Configuration settings to customize transaction processing within JAS.
```

```
# ReapInterval :Interval in minutes of how often the TransactionReaper
```

```
# should check for abandoned transactions.
```

```
# Valid values:Integer from 1 to n
```

```
# Default:5 minutes
```

```
# MaxAge :Maximum age in minutes of a transaction.Transactions
```

```
# older than this will be rolled back by the
```

```
# TransactionReaper.
```

```
# Valid values:Integer from 1 to n
```

```
# Default:10 minutes
```

```
#
```

```
ReapInterval=5 MaxAge=10
```


付録 C. jdbj.iniファイルのパラメータと値

jdbj.iniファイルには、JDBjの構成情報が含まれます。JDBjにより、J.D. Edwards WebサーバーからOneWorld/ERPデータベースにアクセスできます。このファイルのパラメータは、OneWorld/ERPデータへのアクセスにのみ使用され、スタンドアロン・データベースへのアクセス時には無視されます。

jdbj.iniファイルの重要なパラメータは、Javaサーバーのインストーラを使用してWebサーバーをインストールする間に自動更新されます。ただし、インストール後に、テキスト・エディタを使用してこれらの設定を修正できます。jdbj.iniファイルの機能は、OneWorld/ERPエンタープライズ・サーバーのjde.iniファイルに似ています。

ヒント

通常は、次の情報が含まれるように.iniファイルにコマンド行を追加してください。

- ・ 現行のJASパッケージのバージョン(CDに貼付されているラベルを参照)
- ・ ファイルの手動更新日
- ・ 更新者名

jdbj.iniファイルの各セクションは、次のカテゴリに分かれています。

- ・ [J.D. Edwards OneWorld/ERPデータ固有のセクション - ページ \[139\]](#)
- ・ [汎用セクション - ページ \[142\]](#)

J.D. Edwards OneWorld/ERPデータ固有のセクション

jdbj.iniの次のセクションは、OneWorld/ERPデータへのアクセス時にのみ適用されます。スタンドアロン・データベースへのアクセス時には無視されます。

設定	説明
[JDBj-BOOTSTRAP SESSION] - ページ [139]	システム・テーブルへのアクセスを提供するサインオン情報が含まれています。
[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE] - ページ [140]	OCMと他の一部のシステム・テーブルがあるデータ・ソースを定義します。
[JDBj-SPEC DATA SOURCE] - ページ [141]	シリアル化スペック・テーブルがあるデータ・ソースを定義します。

[JDBj-BOOTSTRAP SESSION]

この情報は、システム・テーブルにアクセスするためのサインオンに使用されます。JDBjは、ブートストラップ処理中にセキュリティ・サーバーを介してこのユーザーをサインオンします。サインオン情報が無効な場合は、OneWorld/ERPデータベースにアクセスできません。

注意

このセクションの情報は、旧インストール(ERP 9より前)のJDE.INIファイルの[DB SYSTEM SETTINGS]セクションに指定していた情報と一致する必要があります。

[JDBj-BOOTSTRAP SESSION]		
パラメータ	推奨設定	説明
user=	サイト依存の変数	OneWorld/ERPセキュリティ・サーバーへのログインに使用するユーザー名。
password=	サイト依存の変数	OneWorld/ERPセキュリティ・サーバーへのログインに使用するパスワード。
environment	サイト依存の変数	システム・テーブルが格納されているOneWorld/ERP環境。
role=	*ALL	すべてのロールにアクセスするには"*ALL"と入力します。

[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]

このセクションでは、OCMと他の一部のシステム・テーブルがあるデータ・ソースを定義します。JDBjは、このデータ・ソースをブートストラップ時と後で必要に応じてOCMエントリを参照する際に使用します。データ・ソースが有効でなければ、OneWorld/ERPデータベースにはアクセスできません。

注意

このセクションの情報は、旧インストール(ERP 9より前)のJDE.INIファイルの[DB SYSTEM SETTINGS]セクションに指定していた情報と一致する必要があります。

[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]		
パラメータ	推奨設定	説明
name=	サイト依存の変数	データ・ソース名。ブートストラップ接続には重要ではありませんが、エラー・メッセージとログ・ファイルに示されます。 (全サーバー)

[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]		
パラメータ	推奨設定	説明
databaseType=	I = AS/400 O = Oracle S = SQL Server W = UDB	OneWorld/ERPシステムで使用するデータベースのタイプを選択します。 (全サーバー)
server=	サイト依存の変数	サーバー名。 (AS/400、SQL Server)
physicalDatabase	サイト依存の変数	物理データベース (AS/400のライブラリ修飾子として使用)。 (AS/400、SQL Server)
lob=	trueまたはfalse	LOBのサポート。 (OracleとAS/400)

[JDBj-SPEC DATA SOURCE]

これは任意のセクションです。シリアル化スペック・テーブルが存在するデータ・ソースを定義します。JDBjは、これらのパラメータをブートストラップ時およびその後で必要に応じてシリアル化スペック・オブジェクトを参照する際に使用します。このセクションを指定しなければ、JDBjはOCMを使用してシリアル化スペック・テーブルを検索します。有効でなければ、OneWorld/ERPデータベースにはアクセスできません。

特定のデータベース・プラットフォーム用に入力する必要があるフィールドについては、上記の「[\[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE\] - ページ \[140\]](#)」のパラメータの説明を参照してください。

[JDBj-SPEC DATA SOURCE]		
パラメータ	推奨設定	説明
name=	サイト依存の変数	データ・ソース名。ブートストラップ接続には重要ではありませんが、エラー・メッセージとログ・ファイルに示されます。 (全サーバー)
databaseType=	I = AS/400 O = Oracle S = SQL Server	OneWorld/ERPシステムで使用するデータベースのタイプを選択します。 (全サーバー)

[JDBj-SPEC DATA SOURCE]		
パラメータ	推奨設定	説明
	W = UDB	
server=	サイト依存の変数	サーバー名。 (AS/400、SQL Server)
serverPort=	サイト依存の変数	サーバーのポート番号。 (SQL Server)
database=	サイト依存の変数	データベース名。 (Oracle、UDB)
physicalDatabase=	サイト依存の変数	物理データベース (AS/400のライブラリ修飾子として使用)。 (AS/400、SQL Server)
owner=	サイト依存の変数	データベース所有者。 (Oracle、SQL Server、UDB)
lob=	trueまたはfalse	LOBのサポート。 (OracleとAS/400)
unicode=	trueまたはfalse	Unicode変換を実行します。 (SQL Server)
user=	サイト依存の変数	OneWorld/ERPサーバーへのログインに使用するユーザー名。
password=	サイト依存の変数	OneWorld/ERPサーバーへのログインに使用するパスワード。

汎用セクション

上記以外のセクションは、OneWorld/ERPとスタンドアロンの両方のデータへのアクセス時に適用されます。

設定	説明
[JDBj-JDBC DRIVERS] - ページ [?]	JDBCドライバとJDBC固有の設定を定義します。
[JDBj-ORACLE] - ページ [143]	Webサーバー上のtnsnames.oraファイルの位置を定義します。

設定	説明
[JDBj-LOGS] - ページ [144]	JDBCドライバからのJDBCトレースを有効化します。
[JDBj-SERVER] - ページ [144]	既存のダブルバイトが破損した場合に、処理を停止するためのオプションを提供します (iSeries JDBCツールボックス・ドライバ固有)。
[JDBj-CONNECTION POOL] - ページ [144]	現在、これらの設定はJDBC接続のプーリングに常に使用されます。
[JDBj-RUNTIME PROPERTIES] - ページ [146]	これらの設定は、JDBj論理接続に適用可能なシステム・ランタイム・プロパティに対応しています。

[JDBj-JDBC DRIVERS]

このセクションの値を使用して、Webサーバーでデータベース・タイプへのアクセスに使用されるJDBCドライバを指定します。OneWorld/ERPの旧リリースでは、OracleとiSeriesのドライバがWebサーバーのデフォルトだったため、これらのドライバを設定する必要はありませんでした。ただし、OneWorld/ERPでは、JASのCLASSPATH例外を回避するために、デフォルト・ドライバは想定されません。Webサーバーでは、このセクションで指定したドライバのみがロードされます。

[JDBC DRIVERS]		
パラメータ	推奨設定	説明
Oracle=	oracle.jdbc.driver.OracleDriver	このドライバがOracleデータベースに使用されます。
AS400=	com.ibm.as400.access.AS400JDBCdriver	このドライバはAS/400用DB2 UDBに使用されます。

[JDBj-ORACLE]

このセクションでは、Webサーバー上のtnsnames.oraファイルのロケーションを定義します。このパスが必要なのは、Oracleデータベースへのデータ接続のみです。

パラメータ	推奨設定	説明
tns=	サイト依存の変数	Oracle tnsnames.oraファイルの位置を指定します。Oracleを使用しない場合、このエントリは空白でかまいません。Oracleデータベースを使用する場合は、このステートメントのコメント化を解除する必要があります。 /Oracle/Ora9/

パラメータ	推奨設定	説明
		network/ADMIN/tnsnames.ora

[JDBj-LOGS]

このセクションでは、JDBCドライバからのJDBCTレースを有効化します。

パラメータ	推奨設定	説明
jdbcTrace=	false	このセクションでは、JDBCドライバからのJDBCTレースを有効化できます。通常はデバッグにのみ使用します。本稼働用環境でJDBCTレースを有効化すると、パフォーマンスが低下します。

[JDBj-SERVER]

既存のダブルバイトが破損した場合に、処理を停止するためのオプションを提供します (iSeries JDBCツールボックス・ドライバ固有)。

パラメータ	推奨設定	説明
dbcsConversionTolerant=	true	iSeries JDBCツールボックス・ドライバ固有。値がfalseの場合は、既存のダブルバイトが破損していると処理が停止します。

[JDBj-CONNECTION POOL]

これらの設定はJDBC接続のプーリングに使用されます。

パラメータ	推奨設定	説明
jdbcPooling=	false	現在、JDBCプーリングはサポートされていないため、この設定を有効化してもプーリングはJDBjにより実行されます。
MaxConnection=	50	データ・ソースへの最大接続数。この数を超えた接続要求は、次に使用可能な接続の待ち行列に入れます。

MinConnection=	0	データ・ソースへの最小接続数。古い接続をクローズしても、使用中かどうかに関係なくプールにはこの数の接続が残ります。
PoolGrowth=	5	接続要求を現在の割当てで満たせない場合に、システムによって作成される接続数。
InitialConnection=	5	プール作成時に作成される接続数。
connectionTimeout	1800000	非アクティブな接続キャッシュがプールから削除されるまでの時間(ミリ秒数)。 ERP9までは、この設定は[cache]セクションのConnectionパラメータでした。
CleanPoolInterval=	300000	プール・クリーナーが検証文字列を持つデータ・ソースをクリーニングするように設定される間隔を指定します。各キーで指定する値はミリ秒単位なので注意してください。たとえば、60000ミリ秒は1分です。 検証文字列の書式は次のとおりです。 ValidationString_x=<statement> xは、DB2/400の場合はI、4、R、SQL Serverの場合はS、Oracleの場合はOです。 statementは、任意のユーザーが実行できるSQLステートメントです。 たとえば、次のように入力します。 ValidationString_I=Select * from QSYS2.SYSCOLUMNS WHERE 1=2 ValidationString_S=Select @@connections ValidationString_O=Select sysdate from dual
maxSize	50	各JDBC接続でキャッシュされるJDBC準備ステートメントの最大数

		。
cachePurgeSize	5	maxSize制限に達した場合にJDBC接続から除去されるJDBCステートメントの数。

[JDBj-RUNTIME PROPERTIES]

このセクションの設定は、JDBj論理接続に適用可能なシステム・ランタイム・プロパティに対応しています。

注意

示されている値はそれぞれのデフォルトです。テンプレートのデフォルト・エントリはコメント化されています。これらの値を変更する場合は、シャープ記号(#)を削除してください。

パラメータ	推奨設定	説明
dataCacheEntrySizeThreshold=	500	データ・キャッシュの単一エントリの最大サイズ(ロー数)を設定します。入力がこのしきい値を超える可能性がある場合は、キャッシュされません。値-1は、該当するエントリをすべてキャッシュする必要があることを示します。 有効な値:-1以上。
dataCacheEntryThreshold=	100	データ・キャッシュの最大サイズ(エントリ数)を設定します。データ・キャッシュがこのサイズを超えると、新規エントリ用の領域を確保するために最後に使用されたエントリが削除されます。値-1は、最大サイズがないことを示します。
forceSingleDataSource=	false	JDBjが、複数のデータベース・オブジェクトが関連する操作を単一データ・ソースに対して強制的に実行する必要があるかどうかを指定します。値がtrueの場合、JDBjは操作に関連する最初のデータベース・オブジェクトの物理データ・ソースのみの解決します。値がfalseの場合、JDBjは全データベース・オブジェクトの物理データ・ソースを解決し、単一操作が複数のデータ・ソースにまたがる場合は例外を発生させます。

		有効な値: true、false。
resultSetTimeout=	60000	<p>操作が実行されなかった場合に、結果セットがタイムアウトになるまでの時間(ミリ秒数)。</p> <p>デフォルト設定を使用することをお勧めします。</p> <p>有効な値: -1 以上。</p> <p>ERP9までは、この設定は[cache]セクションのResultSetパラメータでした。</p>
retryInterval=	0	<p>再試行間隔のプロパティ。べき等のデータベース操作を再試行するまでの待機間隔(ミリ秒数)を設定します。-1は再試行なし、0は即時再試行を意味します。</p> <p>有効な値: -1 以上。</p>
retryMaximum=	5	<p>べき等データベース操作の再試行回数を設定します。-1は無限再試行を意味します。</p> <p>有効な値: -1 以上。</p>
ocmCachePurge=	3600000	<p>非アクティブなOCMキャッシュ・エントリが除去されるまでのミリ秒数を設定します。</p> <p>0はOCMキャッシュ・エントリが除去されないことを意味します。</p>
personalSpecVersions=	false	<p>ユーザーの個人用バージョンが読取可能かどうかを指定します。この設定は読取り時にのみ適用され、スペック生成時には適用されません。trueに設定すると、存在する場合は個人用バージョンが戻され、それ以外の場合はパブリック・バージョンが戻されます。このプロパティをfalseに設定すると、個人用バージョンは読み取られず、デフォルトでパブリック・バージョンに設定されます。</p> <p>有効な値: true、false。</p>
securityCachePurge=	3600000	<p>非アクティブ・サービス・キャッシュ・エントリが除去されるまでの時間(</p>

		<p>ミリ秒数)。0はサービス・キャッシュ・エントリが除去されないことを意味します。</p> <p>デフォルト値を使用することをお勧めします。</p> <p>有効な値:0以上。</p> <p>ERP9までは、この設定は[cache]セクションのSecurityパラメータでした。</p>
serviceCachePurge=	3600000	<p>非アクティブ・サービス・キャッシュ・エントリが除去されるまでの時間(ミリ秒数)。0はサービス・キャッシュ・エントリが除去されないことを意味します。</p> <p>有効な値:0以上。</p> <p>ERP9までは、この設定は[cache]セクションのUDCInfoパラメータでした。</p>
specCachePurge=	3600000	<p>非アクティブ・スペック・キャッシュ・エントリが除去されるまでの時間(ミリ秒数)。0はスペック・キャッシュ・エントリが除去されないことを意味します。</p> <p>有効な値:0以上。</p> <p>ERP9までは、この設定は[cache]セクションのViewTableパラメータでした。</p>
specConsistencyCheck=	minimal	<p>スペックの一貫性チェック・レベル。このプロパティを上位レベルに設定すると、スペックの一貫性問題に関連する例外メッセージが改善されます。パフォーマンスが低下するため、不要な場合は下位レベルに設定してください。</p> <p>有効な値:full, minimal, none。</p>
transactionIsolation=	default	<p>トランザクションに使用する分離レベルを設定します。</p> <p>有効な値:default、none、read uncommitted、read committed、repeatable read、serializable</p>

transactionTimeout=	120000	<p>トランザクションがタイムアウトになるまでの時間(ミリ秒数)。指定した時間内に操作が実行されなかった場合は、トランザクションがタイムアウトになります。このタイムアウトを-1に設定すると、トランザクションのタイムアウト機能が無効化されます。現在、この状況が発生するのはJDBjがJASTランザクションの一部として実行される場合のみです。</p> <p>有効な値:-1以上。</p>
triggerAutoFetch=	none	<p>JDBjがOneWorldトリガーに渡すために、変更があったローを自動的に取り込む必要があるかどうかを指定します。特定のトリガーを正常に動作させるには、この操作が必要です。</p> <p>有効な値:none、single、all。</p>
updatableResultSetTimeout=	-1	<p>操作が実行されなかった場合に、更新可能な結果セットがタイムアウトになるまでの時間(ミリ秒数)。-1は、更新可能な結果セットがRESULT_SET_TIMEOUTと同じ値になる必要があることを示します。</p> <p>有効な値:-1以上。</p>
usageExecutionThreshold=	20000	<p>単一のデータベース操作の最大実行時間(ミリ秒数)。単一データベース操作の実行時間がこのしきい値を超えると、使用状況トラッキングの一部としてステートメントと時間がログに記録されます。</p> <p>有効な値:0以上。</p>
usageFetchSizeThreshold=	500	<p>1回の取込みで戻される予想最大取込みサイズ(ロー数)。1回の取込みで戻されるロー数がこのしきい値を超えると、使用状況トラッキングの一部とし実際の取込みサイズがログに記録されます。-1は、任意の取込みサイズが有効であることを示します。</p> <p>有効な値:-1以上。</p>
usageResultSetOpenThreshold=	60000	<p>結果セットがオープン状態になっている最大時間(ミリ秒数)。結果セッ</p>

		<p>トがオープン状態になっている時間がこのしきい値を超えると、使用状況トラッキングの一部として結果セットと時間がログに記録されます。この設定値に達しても、結果セットが自動的にクローズされることはありません。値-1は、この種の使用状況がトラッキングされないことを示します。</p> <p>有効な値:-1以上。</p>
usageTracking=	false	<p>使用状況トラッキングを有効または無効にします。この設定により、テスト中に使用するトラッキングとロギングを追加できます。使用状況をトラッキングするとパフォーマンスが低下するため、本稼働用コードでは無効化してください。</p> <p>有効な値:true、false。</p>
usageTrackingOutput=	log	<p>使用状況トラッキングの出力先を指定します。</p> <p>有効な値:log、exception。</p>
usageTransactionActiveThreshold=	120000	<p>有効な値:-1以上。</p>

付録 D. サンプルJDBj.iniファイル

次のコードは、JDBj.iniファイルのサンプルです。このサンプルはすべてのプラットフォームに有効です。

```
#=====
#           jdbj.ini - JDBj configuration
#
# This file contains configuration information for JDBj, which provides
# general database access capabilities on behalf of J.D. Edwards Java
# solutions.
#
# IMPORTANT:All keys in this file are case sensitive.
#=====

#=====
#           OneWorld specific information
#
# These sections apply only when accessing OneWorld data.These
# sections are ignored for standalone database access.
#=====

#-----
# Bootstrap session
#
# This information is used to sign on to provide access to system
# tables.JDBj signs this user on via the security server at bootstrap-
# time, so if it is not valid, then no OneWorld database access is
# possible.
#
# NOTES:* This information in this section should match the
#        corresponding information specified in the
#        [DB SYSTEM SETTINGS] section of this installation's JDE.INI
#        file.
#-----

[JDBj-BOOTSTRAP SESSION]
user=xxxxxxx
password=xxxxxxx
environment=xxxxxxx
role=*ALL

#-----
# Bootstrap physical data source
#
# This defines the data source where the OCM and some other system
# tables reside.JDBj uses this at bootstrap time and later to look up
# OCM entries on demand.If it is not valid, then no OneWorld database
# access is possible.
#
```

```
# Here is a description of each field in this section:
#
# -----
# Field          Description                      Applies to
# -----
# name           The data source name.This is not that All
#                important for bootstrap connections,
#                but it does show up in error messages
#                and the log.
# -----
# databaseType   The database type.One of the      All
#                following:
#                I = AS/400
#                O = Oracle
#                S = SQL Server
#                W = UDB
# -----
# server         The server (i.e. the host).AS/400,
#                SQL Server
# -----
# database       The database.Oracle, UDB
# -----
# serverPort     The server port.SQL Server
# -----
# physicalDatabase The physical database (used as library AS/400,
#                qualifier for AS/400).SQL Server
# -----
# owner          The owner.Oracle,
#                SQL Server,
#                UDB
# -----
# lob           Supports lobbs.Oracle,
#                AS/400
# -----
# unicode        Performs unicode conversion.SQL Server
# -----
#
# NOTES:* This information in this section should match the
#        corresponding information specified in the
#        [DB SYSTEM SETTINGS] section of this installation's JDE.INI
#        file.
# -----

[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]
name=yyyyyyyyyy
databaseType=y
server=
serverPort=
database=
physicalDatabase=
owner=
```



```

lob=false
unicode=true
#-----
# Bootstrap spec data source (Optional)
#
# This defines the data source where the serialized spec tables reside.
# JDBj uses this at bootstrap time and after to look up serialized spec
# objects on demand.If this section is not specified, then JDBj will
# use the OCM to find the serialized spec table.If it is not valid, no
# OneWorld database access is possible.
#
# See the description for "Bootstrap physical data source" above for
# information about which fields must be filled in for a given database # platform.
#-----

[JDBj-SPEC DATA SOURCE]
name=zzzzzzzzz
databaseType=z
server=
serverPort=
database=
physicalDatabase=
owner=
lob=false
unicode=true
user=zzzzzzzzz
password=zzzzzzzzz

#=====
#           END - OneWorld specific information
#
# The rest of the sections apply when accessing OneWorld and standalone
# data.
#=====

#-----
# JDBC drivers
#
# This defines JDBC drivers and JDBC specific settings.
#-----

[JDBj-JDBC DRIVERS]
ORACLE=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
AS400=com.ibm.as400.access.AS400JDBCdriver
SQLSERVER=com.microsoft.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver
UDB=COM.ibm.db2.jdbc.app.DB2Driver

[JDBj-ORACLE]
tns=c:¥oracle¥ora9¥network¥admin¥tnsnames.ora

[JDBj-LOGS]
jdbcTrace=false

```

```
[JDBj-SERVER]
dbcsConversionTolerant=true

#-----
# Connection pool settings
#
# These are used only when J2EE connection pooling is not available.
#-----

[JDBj-CONNECTION POOL]
jdbcPooling=false
minConnection=5
maxConnection=50
initialConnection=5
poolGrowth=5
connectionTimeout=1800000
cleanPoolInterval=600000
maxSize=50
cachePurgeSize=5

#-----
# JDBj Runtime properties
#
# These are all optional.They correspond to system runtime properties
# applicable to JDBj logical connections.
#
# NOTES:* In each case, the values listed are the defaults.The
#        template default entries are commented out.Make sure
#        and remove the pound sign (#) when changing these values.
#-----

[JDBj-RUNTIME PROPERTIES]

; Data cache entry size threshold property.Sets the maximum
; size (in rows) for a single entry in the data cache.If a
; potential entry exceeds this threshold, then it will not be
; cached.-1 indicates that all eligible entries should be
; cached.
;
; Valid values:-1 or greater

# dataCacheEntrySizeThreshold=500

; Data cache entry threshold property.Sets the maximum size (in
; entries) for the data cache.If the data cache exceeds this
; size, then the least recently used entries are removed to
; make room for the new entry.-1 indicates that there is no
; maximum.
;
; Valid values:-1 or greater

# dataCacheEntryThreshold=100
```

```

; Force single data source property.Indicates whether JDBj
; should force operations involving multiple database objects to
; run against a single data source.If this is true, JDBj will
; only resolve the physical data source for the first database
; object involved in a given operation.Otherwise, JDBj will
; resolve physical data sources for all database objects and
; throw an exception if a single operation spans multiple data
; sources.
;
; Valid values:true, false

# forceSingleDataSource=false

; Result set timeout property.Sets the the number of
; milliseconds for the result set timeout.A result set will
; timeout if it has not had any operations for a period of time.
;
; Valid values:-1 or greater

# resultSetTimeout=60000

; Retry interval property.Sets the interval (in milliseconds)
; to wait before retrying idempotent database operations.-1
; means not to retry, 0 means retry immediately.
;
; Valid values:-1 or greater

# retryInterval=0

; Retry maximum property.Sets the number of times to retry
; idempotent database operations.-1 means to retry
; indefinitely.
;
; Valid values:-1 or greater

# retryMaximum=5

; OCM cache purge property.Sets the number of
; milliseconds after which inactive OCM cache entries are
; purged.0はOCMキャッシュ・エントリが除去されないことを意味します。
;
; Valid values:0 or greater

# ocmCachePurge=3600000

; Personal Spec Versions property.Indicates if user's personal
; version can be read.This is only enforced during a read and not
; during a spec generation.If it set to a true, the personal version
; will be returned if it exists, otherwise the public version will be
; returned.If the property is set to a false, then the personal
; version will not even be read and we will default to the public
; version
;

```

```

; Valid values:true, false

# personalSpecVersions=false

; Service cache purge property.Sets the number of
; milliseconds after which inactive service cache entries are
; purged.0 means to never purge service cache entries.
;
; Valid values:0 or greater

# securityCachePurge=3600000

; Service cache purge property.Sets the number of
; milliseconds after which inactive service cache entries are
; purged.0 means to never purge service cache entries.
;
; Valid values:0 or greater

# serviceCachePurge=3600000

; Spec cache purge property.Sets the number of
; milliseconds after which inactive spec cache entries are
; purged.0 means to never purge spec cache entries.
;
; Valid values:0 or greater

# specCachePurge=3600000

; Spec consistency check property.Sets the level of spec
; consistency checking.Set this property to a higher level to
; improve exception messages relating to spec inconsistency
; problems.Set this to a lower level when it is not needed
; since it may degrade performance.
;
; Valid values:full, minimal, none

# specConsistencyCheck=minimal

; Transaction isolation property.Sets the isolation level to be
; used for transactions.
;
; Valid values:default, none, read uncommitted, read committed,
; repeatable read, serializable

# transactionIsolation=default

; Transaction timeout property.Sets the number of milliseconds
; for the transaction timeout.A transaction will timeout if it
; has not had any operations for a period of time.If this
; timeout is set to a -1 then the transaction timeout feature
; will be disabled.(This currently only happens when JDBj is

```

```
; run as part of a JAS transaction.)
;
; Valid values:-1 or greater

# transactionTimeout=120000

; Trigger auto fetch property.Indicates whether JDBj should
; automatically fetch rows to be changed in order to pass them
; to OneWorld triggers.This is needed for certain triggers to
; work properly.
;
; Valid values:none, single, all

# triggerAutoFetch=none

; Updatable result set timeout property.Sets the the number of
; milliseconds for the updatable result set timeout.An
; updatable result set will timeout if it has not had any
; operations for a period of time.-1 indicates that updatable
; result sets should have the same value as RESULT_SET_TIMEOUT.
;
; Valid values:-1 or greater

# updatableResultSetTimeout=-1

; Usage execution threshold property.Sets the expected maximum
; time (in milliseconds) for a single database operation to
; execute.If a single database operation takes longer than this
; threshold, then the statement and time will be logged as part
; of usage tracking.
;
; Valid values:0 or greater

# usageExecutionThreshold=20000

; Usage fetch size threshold property.Sets the expected maximum
; fetch size (in rows) for a single fetch to return.If a single
; fetch returns more than than this threshold, then the actual
; fetch size will be logged as part of usage tracking.-1
; indicates that any fetch size is valid.
;
; Valid values:-1 or greater

# usageFetchSizeThreshold=500

; Usage result set open threshold property.Sets the expected
; maximum time (in milliseconds) for a result set to remain
; open.If a result set is left open longer than this threshold,
; then the result set and time will be logged as part of usage
; tracking.This does not automatically close the result set.A
; usage result set open threshold value of -1 indicates that no
; such usage tracking will occur.
;
```

```
    ; Valid values:-1 or greater

# usageResultSetOpenThreshold=60000

    ; Usage tracking property.Enables or disables usage tracking.
    ; This provides additional tracking and logging to use during
    ; testing.Usage tracking does incur a performance penalty so it
    ; should be disabled for production code.
    ;
    ; Valid values:true, false

# usageTracking=false

    ; Usage tracking output property.Specifies the destination of
    ; usage tracking output.
    ;
    ; Valid values:log, exception

# usageTrackingOutput=log

    ; Usage transaction active threshold property.Sets the expected
    ; maximum time (in milliseconds) for a transaction to remain
    ; active.If a transaction is left active longer than this
    ; threshold, then the transaction and time will be logged as
    ; part of usage tracking.This does not automatically rollback
    ; the transaction.A usage transaction active threshold value of
    ; -1 indicates that no such usage tracking will occur.
    ;
    ; Valid values:-1 or greater

# usageTransactionActiveThreshold=120000

#=====
#                      END OF FILE
#=====
```

付録 E. WebSphere 4.0への移行

ここでは、Webサーバー構成をWebSphereアプリケーション・サーバー(WAS) 3.5からWAS 4.0に移行する方法について説明します。

WebSphere™ 4.0のアップグレードに関する技術的な最小要件は、次のとおりです。

- ・ JAS SP20以上
- ・ WAS 4.0、FixPack 3以上付き (Advanced Editionの場合はSF99241付き5733-WA4)
- ・ IIS 5.0またはIBM HTTP Server (5722-DG1)
- ・ JDK 1.3、最新のPTFまたはFixPack付き

移行プロセスは次のタスクからなります。

- ・ [Javaサーバー構成のバックアップ作成 - ページ \[159\]](#)
- ・ [WebSphere 3.5インストールの削除 - ページ \[160\]](#)
- ・ [WebSphere 4.0とJASのインストールと構成 - ページ \[162\]](#)

Javaサーバー構成のバックアップ作成

WAS 4.0に問題が生じた場合にシステムを復元できるように、現行のWebSphere™ 3.5構成と、IBM HTTPサーバー構成について、バックアップを作成することをお勧めします。移行プロセス中に、バックアップ・ディレクトリからWAS 4.0構成にデータベース・ドライバをコピーします。

構成ファイルを、現行のJASインストール環境で作成したバックアップ・ディレクトリに保存することをお勧めします。たとえば、現行のWebサーバーが/PeopleSoft/b9にインストールされている場合は、バックアップ・ディレクトリとして/PeopleSoft/b9/backupを作成し、このディレクトリに構成ファイルをすべて格納します。

バックアップ・プロセスは、次のタスクからなっています。

- ・ [WebSphere 3.5構成のバックアップ作成 - ページ \[159\]](#)
- ・ [jas.iniファイルのバックアップ作成 - ページ \[160\]](#)

WebSphere 3.5構成のバックアップ作成

ここでは、WebSphere™のbinディレクトリにあるXMLConfigユーティリティを使用して、WebSphere™ 3.5構成ファイルのバックアップを作成します。後でこのファイルを使用して、WebSphere™構成を復元できます。次の手順をWebサーバー上で実行して、XML構成ファイルを生成します。

➤ WebSphere 3.5構成のバックアップを作成するには

1. Webサーバー上で、IBM WS AdminServerサービスが実行されていることを確認します。
実行されていない場合は、次のコマンドを使用して開始します。

STRSBS QEJB/QEJSBS
2. Webサーバー上で、Qshell (STRQSH)を起動し、ディレクトリを/qibm/proddata/webasadv/binに変更します。
3. 次のコマンドを実行してXML構成ファイルを生成します。

XMLConfig -export WebConf35.xml -adminNodeName <nodename>

<node name>はWebSphere™を実行中のサーバーの名称、WebConf35.xmlはバックアップ・ファイル名です。
4. 生成されたWebConf35.xmlを、WebSphereインストール・ディレクトリ外部のバックアップ・ディレクトリにコピーします。

jas.iniファイルのバックアップ作成

▶ jas.iniファイルのバックアップを作成するには

1. 基本のJASインストール内容が含まれているディレクトリに移動します。
たとえば、wrklnk /JDEdwards/JASに移動します。
2. jas.iniファイルとhtmlclient.iniファイルを、JASディレクトリから前に作成したバックアップ・ディレクトリにコピーします。

WebSphere 3.5インストールの削除

WebSphere™ 3.5.xインストールを削除して、新たにWebSphere™ 4.0をインストールすることをお勧めします。このプロセスの場合は、「[WebSphereからの Web Server構成の削除 - ページ \[161\]](#)」をスキップし、「[WAS 3.5.xインストールの削除 - ページ \[161\]](#)」に進んでください。WebSphere™ 3.5インストールを削除せずに、WebSphere™ 3.5.xから4.0に直接アップグレードするように選択した場合、またはWebSphere™ 3.5.xと4.0を平行に実行する場合は、次の点に注意してください。

- ・ WAS 4.0.x Advanced Editionに直接アップグレードまたは移行できるのは、WebSphere™ 3.5.x Advanced Edition Application Serverのみです。
- ・ WebSphere 3.5.x Standard Application ServerからWebSphere™ 4.0 Advanced Editionには、直接移行できません。WebSphere 3.5.x Standard Application Serverを使用している場合は、最初のタスクをスキップし、「[WAS 3.5.xインストールの削除 - ページ \[161\]](#)」のタスクを実行して、WebSphere™ 4.0 Advanced Editionにアップグレードしてください。
- ・ WebSphere 3.5.x Standard Editionをインストールして、WebSphere™ 4.0.x Advanced Editionと平行で実行できますが、このアプローチはお勧めしません。この構成をセットアップするには、IBMのWebサイトにアクセスし、移行手順に従ってください。
- ・ WebSphere 3.5.x Advanced Edition Application Serverを使用しており、WebSphere™ 4.0.x Advanced

Edition)に直接移行するように選択した場合は、Webサーバーインストールを削除する必要があります。このアプローチはお勧めしませんが、セクション「[WebSphereからの Web Server構成の削除 - ページ \[161\]](#)」のタスクを実行した後、IBMのWebサイトにアクセスし、その手順に従ってWebSphere[®] 4.0にアップグレードできます。

次のタスクを実行して、現行のWebサーバー・インストールを削除してください。

- ・ [WebSphereからの Web Server構成の削除 - ページ \[161\]](#)
- ・ [WAS 3.5.xインストールの削除 - ページ \[161\]](#)

WebSphereからの Web Server構成の削除

他のWebアプリケーションをWebSphere[™]で管理しているか、WebSphere[™] 3.5.x Advanced Application Serverを使用しており、WebSphere[™] 4.0 Advanced Editionに直接アップグレードするように選択したために、J.D. Edwards推奨のアップグレード・ルートに従えない場合は、次のタスクを実行して、WebSphere[™] 3.5.xから現行のJAS構成を削除します。

► WebSphere[™]からWebサーバー構成を削除するには

1. [WebSphere Administrative Console]を開きます。
2. J.D. Edwardsアプリケーション・サーバーが実行中でないことを確認します。
3. J.D. Edwardsアプリケーション・サーバー (AS_JDEdwards_1など)を右クリックし、[Remove]を選択します。
4. 削除したアプリケーションに関連付けられている仮想ホスト (VH_JDEdwards_1など)を選択し、アイコンを展開してみます。

アイコンを展開できる場合は、他のアプリケーションが関連付けられています。
5. 仮想ホストに関連付けられているアプリケーションを削除します。
6. すべての関連アプリケーションを削除した後、[Virtual Host]アイコンを右クリックして[Remove]を選択します。
7. J.D. Edwardsアプリケーション・サーバーと仮想ホストが他にもある場合は、上記のステップを繰り返して削除します。
8. 下記の残りのタスクをスキップします。特定のアップグレード・ルートを実行する手順については、IBMのWebサイト上で関連するWebSphere[™]マニュアルを参照してください。WebSphere[™] 4.0へのアップグレード後に、「Webサーバーのインストールと構成」のタスクを実行します。

WAS 3.5.xインストールの削除

ここでは、推奨アップグレード・パスとして、WebSphereアプリケーション・サーバー3.5.xとWebSphere Administrative Consoleインストールを削除する手順について説明します。以降のタスクでは、WebSphereアプリケーション・サーバー4.0をフレッシュ・インストールとしてインストールします。

► WAS 3.5.xインストールを削除するには

1. WebSphereが実行されていないことを確認します。WebSphereが実行されている場合は、次のコマンドを実行してWebSphereアプリケーション・サーバーを停止します。

ENDSBS QEJBSBS

2. 次のコマンドを入力して、WebSphere 3.5.x用のライセンス・プログラム製品を削除します。

DLTLICPGM LICPGM(5733AS3)

3. サーバーからWebSphereディレクトリ(/QIBM/UserData/WebASAdv)を削除します。
4. Administrative Consoleを実行するワークステーション上で、[コントロール パネル]から[アプリケーションの追加と削除]を開きます。
5. WebSphereアプリケーション・サーバー・プログラムを削除して、コンピュータを再起動します。

WebSphere 4.0とJASのインストールと構成

J.D. Edwardsの推奨パスに従ってWebSphere™ 3.5からWebSphere™ 4.0にアップグレードした場合は、このガイドに従ってWebSphere™ 4.0をインストールします。これ以後の各付録の説明に従って、WebサーバーでWebSphere™を構成してください。

他の移行パスを選択した場合は、IBMのWebサイトで該当するガイドを検索して、アップグレード・プロセスを実行してください

付録 F. Webサーバーのサービス・パックのアップグレード

ここでは、Webサーバーのサービス・パックを現行リリースにアップグレードする方法について説明します。この手順の途中で、現行の構成のバックアップを作成した後、WebSphere構成からJ.D. Edwards関連のコンポーネントを削除します。

はじめる前に

- ・ MTRを参照し、WebSphereの有効なFixPackがインストールされていることを確認します。

アップグレード・プロセスは次のタスクからなります。

- ・ [Webサーバー構成のバックアップ作成 - ページ \[163\]](#)
- ・ [WebSphereからのWebサーバー構成の削除 - ページ \[164\]](#)
- ・ [キャッシュ・ディレクトリの削除 - ページ \[165\]](#)
- ・ [新規サーバーのサービス・パックのインストール - ページ \[166\]](#)

Webサーバー構成のバックアップ作成

問題が生じた場合にシステムを復元できるように、現行のWebSphere™4.0構成と、IBM HTTPサーバー構成について、バックアップを作成することをお勧めします。

構成ファイルを、現行のJASインストール環境で作成したバックアップ・ディレクトリに保存することをお勧めします。たとえば、現行のWebサーバーが/JDEdwards/JASにインストールされている場合は、バックアップ・ディレクトリとして/JDEdwards/JAS/backupを作成し、このディレクトリに構成ファイルをすべて格納します。

バックアップ・プロセスは次のタスクからなります。

- ・ [WebSphere 4.0構成のバックアップ作成 - ページ \[163\]](#)
- ・ [jas.iniファイルのバックアップ作成 - ページ \[164\]](#)

WebSphere 4.0構成のバックアップ作成

ここでは、WebSphere™のbinディレクトリにあるXMLConfigユーティリティを使用して、WebSphere™ 4.0構成ファイルのバックアップを作成します。後でこのファイルを使用して、WebSphere™構成を復元できます。次の手順をWebサーバー上で実行して、XML構成ファイルを生成します。

► WebSphere 4.0構成のバックアップを作成するには

1. Webサーバー上で、IBM WS AdminServerサービスが実行されていることを確認します。

実行されていない場合は、次のコマンドを使用して開始します。

QEJBADV4/QEJBADV4

2. Webサーバー上で、Qshell (STRQSH)を起動し、ディレクトリを/qibm/proddata/webasadv4/binに変更します。
3. 次のコマンドを実行してXML構成ファイルを生成します。

```
XMLConfig -export WebConf40.xml -adminNodeName <nodename>
```

<node name>はWebSphere™を実行中のサーバーの名称、WebConf40.xmlはバックアップ・ファイル名です。

4. 生成されたWebConf40.xmlを、WebSphereインストール・ディレクトリ外部のバックアップ・ディレクトリにコピーします。

たとえば、ファイルを/JDEdwards/JAS/backupにコピーします。

jas.iniファイルのバックアップ作成

▶ jas.iniファイルのバックアップを作成するには

1. 基本のJASインストール内容が含まれているディレクトリに移動します。

たとえば、wrklnk /JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/WEB-INFディレクトリに移動します。

2. jas.iniファイルとhtmlclient.iniファイルを、このディレクトリから前に作成したバックアップ・ディレクトリにコピーします。

たとえば、ファイルを/JDEdwards/JAS/backupにコピーします。

ポータル・コンポーネントのバックアップ作成

カスタマイズされたポータル・コンポーネントを作成しており、それをアップグレード後の構成に移行する場合は、『Portal (ポータル)』ガイドの指示に従って、カスタマイズされたコンポーネントをバックアップ・ディレクトリにエクスポートします。アップグレードの完了後に、『Portal (ポータル)』ガイドの指示に従って、カスタマイズされたコンポーネントを新規構成にインポートしてください。

WebSphereからのWebサーバー構成の削除

▶ WebSphere™からWebサーバー構成を削除するには

1. [WebSphere Administrative Console]を開きます。
2. J.D. Edwardsアプリケーション・サーバー(AS_JDEdwards_1)が実行中でないことを確認します。
3. アプリケーション・サーバー・ノード(AS_JDEdwards_1)を展開し、J.D. Edwardsエンタープライズ・アプリケーション(EA_JDEdwards)を右クリックして[削除]を選択します。

注意

アプリケーション・サーバーを削除する前にエンタープライズ・アプリケーションを削除しないと、エラーが生成されます。

エンタープライズ・アプリケーションのエクスポートを確認するプロンプトが表示されます。

4. エンタープライズ・アプリケーションのバックアップを作成する場合は、バックアップ・ディレクトリ名を入力します。

このディレクトリにファイル(EA_JDEdwards_1.ear)がエクスポートされるので、後で問題が発生した場合に使用できます。

ファイルノ生成後に、エンタープライズ・アプリケーションの削除を確認するプロンプトが表示されます。
5. [はい]をクリックします。
6. J.D. Edwardsアプリケーション・サーバー(AS_JDEdwards_1など)を右クリックし、[Remove]を選択します。

アプリケーション・サーバーを削除すると、/JDEdwards/JASのEA_JDEdwards_1.ear ディレクトリが自動的に削除されます。
7. 削除したアプリケーションに関連付けられている仮想ホストを選択します(VH_JDEdwards_1など)。
8. 仮想ホストに関連付けられているアプリケーションを削除します。(アプリケーション・サーバーは1つのみです)。
9. すべての関連アプリケーションを削除した後、[Virtual Host]アイコンを右クリックして[Remove]を選択します。
10. J.D. Edwardsアプリケーション・サーバーと仮想ホストが他にもある場合は、上記のステップを繰り返して削除します。
11. 下記の残りのタスクをスキップします。代わりに、前の「Webサーバーのインストールと構成」のタスクを実行します。これらのタスクは、新規Webサーバーをインストールする場合と同様に実行してください。

キャッシュ・ディレクトリの削除

WebSphereインストールには、Webサーバーの旧バージョンに関連付けられているアプリケーション・サーバー用の1つまたは複数のキャッシュ・ディレクトリがあります。これらのサブディレクトリにキャッシュされた情報は、新規構成には無効であり、削除する必要があります。

► キャッシュ・ディレクトリを削除するには

1. OneWorld Javaサーバー上で、WAS_HOME/temp/nodeディレクトリに移動します。WAS_HOMEはWebSphereのルート・ディレクトリ(/qibm/userdata/webasadv4/defaultなど)、nodeはWebSphereのノード名(通常はシステム名)です。

2. temp/nodeディレクトリで、対応するアプリケーション・サーバー・ディレクトリ(AS_JDEdwards_1)とそのサブディレクトリをすべて削除します。

これにより、古いWebサーバー・インストール環境からのキャッシュがクリアされます。アプリケーション・サーバーを再起動すると、更新後の情報を使用して新規キャッシュが作成されます。

新規サーバーのサービス・パックのインストール

上記のタスクを実行した後、次のタスクを実行して新規サービス・パック・ソフトウェアをインストールします。

► 新規Webサーバーのサービス・パックをインストールするには

1. 「Webサーバーのインストールと構成」に戻り、新規サービス・パックのインストールを実行します。
2. 新規サービス・パックのインストール後に、「OneWorld/ERPのシリアル化オブジェクトの生成」に進んで「ジェネレート・マシンへのJASビルドのコピー」のタスクを実行します。
3. Webサーバーの新規シリアル化オブジェクト・セットを生成します。
4. バックアップ・ディレクトリに保存したデータベース・ドライバを、新規に構成したアプリケーション・サーバーにコピーします。